

於て、夫れ、かくの如くに一貫した物語りをなして居る。二國同盟と三國同盟との決闘に、イギリスが立つたのも、亦、ドイツのベルギー併合が、大に海上に於けるイギリスの地位を弱め、結局、イギリスの國際的權威に打撃を與ふるものたるを虞れたからであつた。

## 二四七 ドイツ軍のフランス侵入

戦端の一度、開くるや、驚絶すべく迅速なる動員は、ドイツに實現せられた。一八七〇年の八月には、彼は、四十五萬の兵を集中し得たのであつたが、四十四年後の八月に、彼のフランスの境に集むることを得たりしは、彼が全陸軍の少なくとも四分の三で、その數無慮、一六〇萬と稱せられた。かくて西方境界線の長さに互りて、七個の軍として配置せられたる其貔貅は、暴風雨の如くにベルギー、及、ルクセンブルグを吹き捲くつて殺到して來たので、フランスでは、ジョッフル參謀總長自ら總司令官として、五個の軍を以て之に衝つた。イギリスは、直にフレンチ French をして、十五萬の兵を率ゐて大陸に渡らしめ、此部隊は、八月二十一日を以て集中を完了し、以てマース河の線に於て、フランスの友軍と共にドイツ軍を堰き止めることになつたが、ドイツ軍の向ふ所、殆んど敵なく、ベルギーの抵抗は、一蹴せられて、その國都は陥り、聯合軍、亦、敗れてフランスに追ひまくられたので、二十四日に至て、ジョッフルは、總退却の命を發し、聯合軍の、且、闘ひ、且、

走ること十二日、クルック將軍麾下のドイツ軍は、セダン開城の記念日に於て、パリを距る纔に十里の地點に肉薄するに至つた。パリ政府は、周章、都をボルドーに遷した。ジョッフルの作戦は、敵をば、十分にフランスの内地に誘き寄せ、彼がひた進みに進み來つて、其隊伍の整へらるゝに至らざるに、機を見て反撃を之に喰はさんと云ふにあつた。マルヌの線こそは、逆撃に轉すべき恰好の地點として選ばれたる所であつた。侵入軍の疲労の日を追うて加はり來るに反して、聯合軍の勢は、新手を加へて次第に振うて來た。そこでジョッフルは、敵が、大數の豫備隊のパリに蒐集せられつゝ、あるを知らずして、マルヌを渡るや、九月五日、俄に全軍をして攻勢を採らしめ、數日の血戦を以て、遂に、敵をエーン河の彼方に撃退した。これより、位置戦は運動戦に代り、兩軍は、深く塹壕を穿ち、相對峙して容易に動かさず、パリは、全く救はるゝことを得たのである。

そこでドイツ軍は、ベルギーを整ふべく、十月、アンヴェルスを陥れ、ついで、カレーまでの北海岸を手に入るべく、奮闘したが、イギリス軍、能く、之を防いで、イーゼル河に阻止した。けれども、ドイツのベルギーを占領せるは、イギリスに對する大なる威嚇たらざるを得なかつたから、ロンドン政府の陸海軍當局者は、フランスをして、此方面に其大なる勢力を割き、イギリス海軍と相策應して、再、オランダまでの全海岸を奪回し、以てドイツ軍の右翼を脅かすの潑刺たる新作戦を執らしむべく、熱心に主張する所あつたが、パリを懸念するジョッフルの之を肯んぜざりしがため、



西部戦線に於ける聯合軍には、これから、何等、著しき戦法の開展を期することが出来なかつた。従て西部の戦場では、フランスは、その開戦勿々に占領したりしアルサスの一部を手にするに過ぎず、之に反してドイツは、ルクセンブルグの一圓、フランスに境せる一片土を除いたベルギーの全部、竝に、フランスの全産鐵額の九割と石炭の五割とを産出し、般賑なる工業と、豊饒なる農圃、及、葡萄園とを有する東北部の十數縣を占領することを得たのである。

## 二四八 イタリアの中立、竝に、参戦

大戦の勃發に際して、イタリアのいかなる態度をとるべきやは、彼が、經濟、地理、及、軍略上の地位と、及、その最近に於ける外交上の行動とによりて、略、卜知せられ得たる所で、その少くとも、ゲルマン同盟に加入して兵を擧ぐるが如きことなかるべきは明であつた。二年前の戦役で以て、重荷を負はされて居つたその國民は、一九一四年の夏に於ては、皆、寧ろ、平和を冀つて居つた。これ八月三日、ローマ政府がオーストリアによりて企てられたる戦争と、之に基く結果との、共に攻撃的性質を有するもので、三國同盟に約束せられたる單純なる防禦的性質とは矛盾するものなれば、イタリアは中立に止まるべきを聲明するに至りし所以であつた。けれども、イタリアは、同時に、その陸海軍に動員を命じ、糧食、及、軍需品の買ひ入れを怠らず、萬一のために備ふる事

には手拔かりなく、アルバニアに革命軍、起りて、新アルバニア公、その國を逐はれ、四隣列國、之を窺竄するに及び、終に、意を決して、十月、其ワロナ港を占領したのであつた。彼の中立を標榜するや、その決して、フランスに向て害意を挟むものにあらざるをパリ政府に告げ、フランスをして安んじてイタリア邊境の兵を彼が戦場にさし向くることを得しめたので、それだけゲルマン同盟の疑心を惹き起さざるを得なかつた。そこで、ゲルマン同盟は、急にローマ駐劄の大使を更へ、共にその最有力なる外交家を派遣して、ローマ政府の三國協商の陣中に投入するを妨げ、之をして若し、三十餘年來の與國と戦友たるを難んぜしむとせば、責めては、中立を放棄するが如きことなからしむべく奔走せしめた。イタリアと公私の關係、淺からざるドイツの前宰相ビウローは、此使命を佩びて新にローマに赴いたのであつた。

イタリアの政治家にして、最も熱心に中立の支持を主張したりしは、既に數回、内閣の首班に立ちたりしチオリッチー Giolitti であつた。中立論の論據とする所は、イタリアの戦備の未だ完からぬといふことと、ドイツの仲介により、二元帝國をして平和に領土を割讓せしむるの利なりといふこととにあつた。十二月初、オーストリアの一時、ベルグラードを陥るゝや、ローマ政府は、豫め彼と議することなくして、バルカンを侵せるに抗議し、事のイタリアの政治上、經濟上の利益に接觸せん限り、直に右に關する交渉を開始すべきものたるを迫つたが、ウィーン政府は之に應ぜず、ドイ



ツの周旋により、辛うじて同盟條約第七條の代償に付て交渉を始むることに譲歩した。けれども、オーストリアの、代償としてイタリアに與ふべく提供したものは、アルバニアだつたので、一九一五年三月四日に至り、イタリアは、即時、二元帝國の領土を割くといふ條件を以て行はるゝ談判ならでは、斷じて交渉を繼續すること能はずとてウィーン政府を脅かし、彼をして、遂にトリエントを提供するまでに至らしめた。此間にゲルマン同盟の兩大使の極力、イタリアの中立黨を操縦したりしに拘らず、未回収地回収の愛國説は、日を追うて其聲を高めて來た。イギリス、フランス聯合軍のダルダネルス砲撃の始まつてからは、イタリア人の參戰熱は、別して旺になつて來て、彼等は、大イタリアを建設すること、今を措いて其時なかるべしとした。四月八日には、ローマ政府は、十一ヶ條の要求をウィーン政府に提出した。そこで割地に關するウィーン、ローマ兩政府の交渉の落着を告ぐるに至らん事を虞れた協商三國は、大に氣を苛立ち、敵の談判をして不調に歸せしむべく暗中の大飛躍を試みたので、己が引張り夙たる得意の境遇に乘じ、ローマ政府は、巧に中歐側と協商側とを兩手に操りつゝ、その窮極、最大限度の讓歩をなすに至りしものと握手したのである。

四月二十六日、イギリス、フランス、ロシアの三國は、ロンドンに於てイタリアと密約を結び、イタリアは、出来る丈け早く三國に加擔して戰爭に参加すべく、三國は、之が報酬として、勝利によりて平和を結ぶに際し、自然の境界線に至る迄の全南部チロル、トリエント市、及、その地方、

全オーストリア、ダルマチア、ワロナ、ドデカネソス等をイタリアに與ふべきを約束したのである。かくて月の末、イタリアをして三國協商に赴かしめまじとてのゲルマン同盟の必死の引き留め運動も、今は、最早、其效を奏せずして、五月三日、ローマ政府は、三國同盟條約の破棄を宣した。同時に、全國にオーストリア敵視の示威運動起り、デオリッチー一味の中立運動と睨み合つたため、危機は、一時、内閣を襲うたが、民衆の帝國的要求は、終にすべてを制し、二十四日、政府をして戰をオーストリアに宣するに至らしめた。イタリアの參戰は、オーストリアをして、そのロシアの方面から、大軍をアルプの新なる戰線に割かざるを得ざらしめ、力を協商側に加へたること尠少ならざるものであつた。

## 二四九 海國イギリスの一大陸軍編制

イギリスとフランスとは、イタリアの蹶起によりて大に力を得たけれども、イタリアの困難なる山地戰は、容易に著しき戰果を齎すに至らず、従て、ヨーロッパ六大強國の最後の一國が協商側に參加したと云ふ事も、さしあつては、之に精神上の助けを與へたといふより以上には出なかつた。互に對峙せる長き戰線に於て攻撃の發意を取り、敵を懸濠から驅逐して、全く其陣地を壞亂せんが爲には、壓倒的の大なる兵數を擁せなければならぬのに、西部戰線の聯合軍中、フランスは、已に



その人口との比例上からは、搾收せられ得べき限りの兵員を徴集して居るから、此上の兵力の供給は、残るイギリスに之を須つより外なかつた。然るに、大戦の勃發に際して、イギリスの海軍が、如何なる變故にも應ずべく、間然する所なき準備を有したりしに似もやらず、その陸軍は、徹頭徹尾、不備を極めて居つた。彈藥も、銃砲も、其他の軍用材料の殆んど一として備はれるはなく、初めの程は、兵員の被服すらも缺乏して居つたのである。かゝる危機に際して、八月六日、推されて新に陸相の椅子に就きたりしは、エジプト統監、キチナー將軍であつた。將軍の任務は、實に重いものであつた。彼は、本國の國防を整へ、兵を大陸に出し、植民地の到る處に於て遠征軍を組織しなければならなかつた。全く泥繩的ではあるが、大急ぎで大陸軍の編制に着手し、之を教練し、現代的兵士として恥かしからぬものに仕立て、どしどし戰場に之を繰出し、同時に、此大軍の要する、又、出來得べくば、友軍の要する軍需品を製出しなければならなかつた。キチナーの武名と威望とは、彼をしてかゝる重責を完了せしむべき適任者たらしめ、彼は、その陸相就任の日に於て、直に議會の協賛を得て五十萬の兵を徴集することとなり、一閱月の後には、更に第二回の五十萬を召集したが、ついで十一月十六日には、なほも、一十萬を召集することとなつた。當日、イギリス政府の公にする所によれば、キチナーによりて募集せられたる新陸軍の最初の一十萬は、既に出來上つたといふことであつた。かくて大戦の突發と共に、咄嗟の間に、完全に武装した十五萬の遠

征軍を大陸に派出した。イギリスは、十二月の末には、之を増援して三十萬とし、翌年九月の末には、フレンチ將軍麾下の將卒をして一十萬を數ふるに至らしめた。戦争の持久的たるべき形勢の、益、明になつて來てからは、イギリスの當局者は、層一層に、大なる陸軍を編成するの急に迫られ、兵員の徴集をば、單に、國民の愛國心の發動にのみ須つと云ふことが出來なくなつて來たので、一九一六年五月に至り、終に、斷然、徵兵令を布き、十八歳、乃至、四十一歳の健康なる男子の兵役をば義務的たらしむることにした。この勢に伴ひ、軍需大臣ロイド・ジョルヂは、銳意、すべての工場を動員し、全國を擧げて軍國化せしめ、夜を日につぎて軍需品を製出したので、イギリス陸軍の負うたハンデキャップは、次第に輕減せられ、其強味は加はつて來た。一九一五年、西部戦線に於ける聯合軍の攻勢の失敗に歸したりしは、實に職として武器、及、彈藥の缺乏によるものであつた。西部戦線に於ける戦況のはか／＼しからぬに業を煮やしたドイツは、一九一六年二月を以て、ドイツ人にとつては歴史的に思ひ出の多いウエルダンの堅城を屠つて、一擧、パリを突かうといふ大膽なる作戦を立した。此闘は、最も慘憺たるもので、メツツを根據地として、潮の如くに之に押し寄せ來つた瘁猛なるドイツ軍は、肉彈を以て肉薄したので、之に對するフランス軍の防戦は、世人をして手に汗を握らしめたが、年の夏、イギリス軍は、ソム河の線に作動して之を牽制した。約五個月の永きに亙つたソムに於ける聯合軍の攻撃は、その代價の大なりしほどの効果がなかつたけれども、



兎も角も、之によりてウエルダンの急は救はれたのであつた。爾來、一年有半の間、西部戦線に於ては、大軍隊の花々しき活動を見なかつた。

#### 第四十三章 汎スラビズムの敗退

##### 二五〇 東プロシア、及、ガリチアに侵入したる

##### ロシア軍

大戦勃發の初、ドイツ軍の大海瀟の如くにフランスに押し寄せ來るや、焦眉の急に迫つたるイギリス、フランスが一縷の希望は、自ら彼が東ヨーロッパに於ける大なる與國の上に投ぜられざるを得なかつた。聯合軍は、ロシアの早く西方の戦場に活動して、ドイツ軍を牽制し、以て彼が急を濟はんことを冀つたのである。聯合軍の此の祈願は、絶対にロシアによつて充足せられずにつた譯ではなかつた。ドイツ參謀本部の豫想を聊か裏切つて、ロシア軍の動員、竝に、集中は、意外に、駿速で、ニコラス大公を總司令官に仰ぐロシア軍は、早くも活潑なる運動を起した。ロシアの西方の境は、そのポーランド領を以て、坦々たる東ヨーロッパの大平原の中をば、ドイツの東プロシアと、二元帝國のガリチアとの間に楔の如くに深く喰ひ込んで居る。即ち北と西と南との三つの側面をゲルマン同盟に暴露して居るので、彼が楔の尖端からベルリンまでは、二百哩の隔りを有せざるに拘

らず、左右の兩側面に頓着せずして、ひた進みに西してドイツの首都に薄ると云ふことは、本國からの交通を遮断せらるゝの危険を冒すの虞なしとしない。これ、ロシア軍の、先づ北と南とに動いて、東プロシアとガリチアとを攻略せんとするに至りし所以であつた。これ等の地方は、皆、昔のポーランド王國の所屬地であつた。

三個の集團をなせる五十八萬のロシア軍は、ドイツのロシアに宣戰したる八月を以て、東と南とから、東プロシアに侵入し、往々／＼その占領地を荒してあるいた。ドイツ軍の東プロシアにあるものは、侵入軍の三分の一にすら充たず、大敵の前にケーニヒスベルヒを支持すること能はず、ウイッストラを渡りて後退せんとするの危きに迫つたので、ドイツ參謀本部は、急ぎ、バリ殺到軍の中から二個軍團を割いて東プロシアに回派することにし、又、無能なる東プロシア駐屯軍の首腦を罷免し、以て浮き足立つたる陣容を整へしむることにした。新司令官ヒンデンブルグの、參謀長ルーデンドルフと共に着任するや、彼は、彼の前任者の參謀官が立て、且、徐に追及しつゝあつた作戰の計畫により、ケーニヒスベルヒに後退すべく装ひつゝ、敵の聯絡の通ぜざる中に、俄に起て、その南方の大集團をマズーリ湖畔に邀撃するの策を立て、八月末、タンネンベルヒに之を圍みて、壓殺した。ロシア軍の捕虜となれるもの十萬、死傷七萬と稱せられた。

此大勝利は、東方の戦況をしてドイツに有利なる轉回をなすに至らしめたものだったので、これ



から二週日の後、東プロシアのドイツ軍は、進んでロシア領ポーランドの境を踏えたが、志を達すること能はずして歸還した。爾來、年の末までに、ドイツ軍のワルシャウ攻撃を企つること二回に及んだけれども、ロシア軍、能く之を防ぎ止めた。

カルパチアの彼麓なるガリチアは、軍略的には、極めて不利なる地勢を擁する所ではあるが、二元帝國の軍は、之から逸早くも、ロシアのポーランドに侵入したので、ロシア軍は、ガリチア征略の計畫を立て、九月初、レムベルグを陥れ、年の冬には、カルパチアの嶮を踏破してハンガリアを侵さんことを試むるに至つた。此戰、ロシアの終に成功せざりしは、輸送機關の不完全と、軍需品の缺乏とによるのであつた。

## 二五一 ポーランド席捲せらる

マルヌ役の敗戦後、新にドイツ參謀總長に任ぜられしは、陸相ファルケンハインであつた。彼は、シュリーフェンの作戰計畫を棄て、守勢を保つたまゝ、これからロシアを挫折し、更に、再、西部に向はんことを決し、一九一五年四月、ゲルマン同盟の手で、二百萬の大軍をロシアの境に集中し、六月、先づガリチアを占領し、ロシア軍をば、全くカルパチアの山路から撃攘してしまひ、六月、大舉してポーランドに入り、八月初、ワルシャウを陥れ、北ぐるを追うて、全くポーランドを席捲

し、クルランドの大部分と、リトワニアの一部分とをも占め、ドゥイナ河の線に至つて漸く止んだ。此戰、ゲルマン同盟軍の、其勝利をして決定的たらしむるを得ざりしは、兵力の缺乏によるのであつた。イタリヤの參戰は、此點に於て有利なる影響を東部戦線に與へたのである。

初め、東ヨーロッパの三大帝國が干戈の間に相見え、かくの如くにしてポーランドの問題が、彼ら其獨立を奪ひ、又、之を分割した三國の間に、再、武力による解決を贏ち得べく提供せられんとするや、三國は、交々、此二千五百萬の大民族の感情を融和して、之をば各の側に牽引すべく、如才なく振舞ふことを忘れなかつた。大戰勃發の八月に於て、ウイヘルム二世は、ポーランド民族に向て一の宣言を發して、ロシアを打破るべく、彼等のドイツと結ばんは、これ上帝の聖意なりと言つたし、又、二元帝國も、八月九日の宣言に於て、ポーランド民族の仇敵を以てロシアなりとし、將に再興復活せんとする此重大の時期に於て、彼等の須く、ゲルマン同盟に來り加はらざるべからざるを訴へたのであつた。同時に、ロシア帝ならで總司令官ニコラス大公の宣言は發布されたが、其中に曰、ポーランドの獨立を失つてから一五〇の星霜を閲するが、しかも、彼の精神は未だ亡びては居らぬ。我ロシア軍は、今や、ポーランド國民を分割する國境を抹殺し、ポーランド國民を擧げてロシア皇帝の治下に統一せんことを欲するものである。その宗教、言語、及、地方行政に於て之に與ふるに自由を以てせんことを思ふものであると。由て、一四一〇年のタンネンベルヒの役



に、ポーランド人とリトワニア人との相結んで、ドイツ騎士團體を破り、以て、大ポーランドを興したりし赫々の史實を回想した。三國の中、己が治下のポーランド人に最良の待遇を與へて居るものは、二元帝國だが、彼には此問題に關し、ドイツの友邦を離れて行動するの自由がないし、ドイツには、彼が三百萬のポーランド人を解放するの考がないし、又、ロシアに至つては、唯、ゲルマン同盟からそのポーランド民族を奪回して己の治下に之を統一せんと企てるのみで、之に民族的獨立と自由とを恢復しようとする云ふ様な考は、毛頭ないのである。ゲルマン同盟の大軍のポーランドを席捲せんとするに當つて、ポーランド人のロシアを援けなかつたのは、故なき譯ではなかつた。かくて、ロシア帝國中、富の最も豊にして、産業の最も盛なる西境六萬五千方哩の一大地域は、擧げてドイツの腕力の下に制せらるゝこととはなつた。

#### 第四十四章 ドイツ世界政策の顛覆

##### 二五二 日本の擧兵

開戦後、一年二個月ばかりの間に、西は、ベルギー、及、ルクセンブルグを蹂躪し、フランスの東北部を占領したし、東は、西部ロシアの廣大なる地域を占めて、彼が宿昔の理想たる大「中歐」策の一半をば武力的に實現し得たるが如く思はれたドイツも、イギリスが彼に對して蹶起したばかり

に、彼が三十有餘年、營々として追及し來つた偉大なる世界政策をば、殆ど其根柢から覆されてしまつた。その海軍力に於て、まだイギリスの敵に非ざるを知られるドイツは、彼が大洋艦隊をば、己が軍港内に深くかくまつて置いて、出でて堂々の戦を挑むと云ふことをしなかつたし、従て、彼の商船も、亦、悉く、本國なり、中立國なりの海港に竄入したから、ドイツの貿易は、殆ど、世界の海面から驅除せられてしまつた。今は、海上に於ける彼の脅威とし云へば、イギリス艦隊の目を掠めて、時々、その東海岸に加へらるゝ彼が襲撃を外にしては、膠州灣の根據地から脱出して、太平洋、及、印度洋上の通商を威嚇してあるいた彼の東洋艦隊あるのみであつた。

かゝる場合に於て、大なる陸海軍を擁して極東に屹立せる日本の動靜は、兩交戰團體の刮目を値せざるを得なかつた。時の大隈内閣は、八月四日、とり敢へず中立を宣言したけれども、日本に於ける指導階級の間には、明かに二つの傾向あり、日英同盟の誼に忠實にして、飽く迄も、イギリスと事を共にせんとするもの、傍には、此機會に於て、イギリスの東洋に於ける商權を打破すべく、寧ろドイツと結ばんことを欲するものもあつた。軍閥、竝に、學界には、ドイツ最厚なる空氣が搖曳して居つたし、ドイツも、亦、日本の中立を贏ち得んことを欲し、八月十二日、日本に聲明するに、日本にして、若し中立を支持すべくば、彼の東洋艦隊をして、イギリスに對する敵對行為を停止せしむべきを以てした程だつたが、既にして、大戰の渦中に投じたるイギリスは、頻に擧



兵を東京政府に逡巡して來たので、大局の上から與國と提携するを利なりとした大隈内閣は、三年前に改訂されたる同盟條款の條項により、ドイツの何等、挑發せられざるにイギリスに加へた攻撃のために、東洋の平和は攪亂せられつゝありとし、最後通牒をベルリン政府に與へて、日本、及、支那の海岸より一切の軍艦を撤し、且、之が武装を解除すること、九月十五日以前に、支那よりの租借地を日本に渡すことの二條を求め、八月二十三日、終に、戰を之に宣した。

日本の陸海軍は、直にその活動を始めた。彼が差し當りての仕事は二つあつた。一は、貿易と交通との威嚇を事としつゝあつたドイツの東洋艦隊を撃滅すること、日本の海軍は、イギリス、フランスの友軍と共に、纔に八艘に過ぎぬ敵を搜索すべく、森々たる太平洋の水域を八方から追跡しあるいたが、十一月の初にチレの沖に遭遇せるイギリスの小艦隊を撃破したるドイツ艦隊は、一月の後、終にフォークランド島に於て、イギリスの有力なる派遣艦隊の撃沈する所となつたし、又、印度洋をあらしあるいた東洋艦隊の所屬艦も、オーストラリアの軍艦に破られたから、ヨーロッパの戰場を距ること遠き海洋は、大體に於て平穩に歸してしまつた。

日本の今一つの任務は、ドイツが、極東に於ける軍事行動の策源地たらしむべく汲々として武備を修めつゝあつたる膠州灣を陥るゝことで、日本の遠征軍の之を攻略せしは、十二月八日のことであつた。

ゲルマン同盟の潛水艇政策の兇威を逞うするに及び、日本は、その驅逐艦隊を地中海に派して與國を援助したが、彼が大戦に對する貢獻は、單に、これ等軍事の方面にのみ止まらなかつた。財政上、並に、經濟上に於て、協商列國、就中、ロシアは、日本の助けを須つこと尠からざるものであつた。日本は、製造能力の劣弱なるロシアに供給するに、あらゆる種類の軍需品を以てしたが、一九一六年七月三日、終に、ロシアと協商を結び、極東に於て、恆久の平和を維持せんがために協力すべく決したる兩國の、互に他の一方に對抗する何等、政事上の協定、又は、聯合に加はらざることを、兩國の極東に於ける領土權、又は、特殊利益にして侵迫せらるゝに至りたる時は、之が擁護防衛のために執るべき措置に付、協議すべきことを約束するに至つた。

### 二五三 ドイツ植民地の運命

無線電信によるの外、全く本國からの聯絡を絶たれてしまつた孤立無援のドイツの各植民地は、甚しき困難なしに協商列國の陥るゝ所となつた。日本は、その陸軍を山東半島に上陸せしめたると同時に、その海軍に命じて、太平洋に於ける赤道以北のドイツ領、カロリン、マリアナ、及、マルシャルの諸島を占領せしめた。これ、ドイツの一八九八年に於て、イスパニアから買求したものである。オーストラリアの自治領は、カロリン列島の西南なるカイゼル・ウィルヘルムスランドを初め、



ビスマルク列島、及、ソロモン列島を手に入れたし、ニュージーランドは、サモアを占領した。

ドイツのアフリカ植民地の中では、西南アフリカは、真先に南アフリカ自治領の手に歸したし、トーゴランドとカメルンとは、イギリス、及、フランスの占領する所となつたし、地勢上の關係から、最後まで抵抗を持續した東アフリカは、又、イギリス、フランス、及、ベルギーの協力により、一九一七年一月を以て全く平定せられた。ドイツ人の最近の努力の産物ではあるが、一千二百餘萬の人口を有し、日本帝國の總面積の十一倍強の廣袤を有するドイツの植民帝國は、かくの如くに、一朝にして消え失せてしまひ、海外には、ドイツ國旗の飄るなる一隻の船も、將た、一片の土もなくなつてしまつた。

#### 第四十五章 ドイツ大「中歐」策の實現

##### 二五四 作戰に關する東部論者と、西部論者との論争

腹背、敵を迎ふるに至れるドイツが、フランス征服の企圖に挫折するに及び、參謀總長ファルケンハインは、更に、その鋒先をば東方に轉じてロシアを破つたが、併しながら、彼は、戦争の運命を以て、所詮は、西部の戦場に於て決せられざるべからざるものなりとした。彼は、早くも、戦のドイツとイギリスとの覇權の争に外ならざるを看取したので、ドイツの一切の攻勢は、パリならで此

島帝國の上に注がれざるべからずとし、之がために、大兵をベルギーに集め、大なる犠牲を忍びても、イギリス軍をイーゼル河から驅逐し、以て、海峡の諸港灣を占領せんことを圖つたが、ドイツ海軍の攻勢を執ることを欲せざりしが爲に、之を果すに由なかつた。彼がトルコを己が仲間と捲き込みしは、之によりてイギリスのスエズ運河を脅かし、又、回教世界にイギリス排斥の一大宣傳を行はんがためであつた。彼がウェルダンの攻撃をたくらみしも、之によりて西部戦場に於て、決定的勝利を贏ち得んがためであつた。一九一五年七月、ゲルマン聯合軍の大にポーランドに侵入せんとするや、ファルケンハインが、ロシアに大なる屈辱を與ふるに先つて、之と和するの機會を作らんことを切願したりしは、此際に於けるロシアとの講和の、ロシアの領土を割くにまさるの軍事的價値を有するものたるを見たからであつた。然るに、ドイツの陸軍部内には、かゝる考へ方には嫌らざる一派があつた。ヒンデンブルグの如きは、即、其人で、彼はロシアをさへ征服することに成功したならば、イギリスとフランスとは、強制せられざる平和を基礎として、必ず和議に應ずるだらうと思つた。彼は、ドイツが、彼の國民的敵愾心をして燃えしめて居る所の、彼には傳統的なる西隣の敵に重きを置くの餘りに、東方の強敵とは妥協するの容易なるを輕信するの傾あるを歎じ、西部戦線に於ける決勝は、ロシアを倒すに非ずしては、斷じて之を庶幾すべきに非ざるを固執した。ロシアは終には倒れたけれども、彼を以て之を見れば、これ實に、ドイツの最高統帥府の東部論對西



部論の論争に與ふべき解答の徒に遲疑したるがため、既にして倒るゝの遲きに失したのであつた。之と同じ意見の相違は、協商列國、就中、ドイツに對抗する大系統の牛耳を握り、他よりも多くの發意と資料とを握つて居つたイギリスにもあつた。イギリスの當局者の中で、ファルケンハインの地位を執れるは、フレンチを代辯者とすなる有力なる一派で、此輩は、勝利と、及、勝利から獲らるべき果實とは、ドイツの主力が撃破せらるゝに非ずしては、其甲斐なしとし、假令、東部で勝利を制すとも、西部に敗れては、聯合軍は、結局、得る所なきと選ばざるを斷言した。フレンチは、之がために、ベルギー海岸奪還の計畫を力説したのであつたが、フランスは之を肯んじなかつた。但し、此際、フランスは、別殊の方面に別殊の目的を以てすることならば、之が爲にフランスの兵力を割くも可なる旨の内諾を與へたので、一九一五年一月上旬、イギリスの軍事會議は、之を其議事に附したるも、フレンチは、西部の戰場に於て決定的の結果を得るの外なしといふ意見から動かなかつた。けれども、トルコの參戰は、東方、殊にバルカン、竝に、前アジアの方面に大なる希望の野を開いたるやに思はれ、陸相キチナーの如きは、ベルギーの海岸奪取の畫案に與ふるを吝みたりし同意をば、バルカン、及、西アジアに對する詩的の美はしい新計畫の上に投ずる様になつた。キチナーを代表者とすなる此東方論者とても、もとより西部戰線に於ける守りの重大なるを否定するものではないが、唯、彼等は、殆ど膠着的となつた敵の此地位を動かすの至難なるを認むる所か

ら、新なる東方の天地に於て、大英帝國にとつての一大脅威たるドイツの中歐政策を挫折し、之が陸上封鎖を完成することによつて、究極、敵の死命を制するの賢なるを見たのである。キチナー、ロイド・ジョルヂの兩陸相は、最も、這種の夢を追及したので、兵力と、軍用材料と、精力との分割を愛惜する人々は、概ね之に慊らなかつた。

そは兎も角もとして、政局の發展は、遂に新月帝國をして、ゲルマン同盟に加擔して起つに至らしめた。これ、少くとも、日本の應援に勢を得たる協商側の得意を相殺するものであつた。

## 二五五 ドイツ地中海艦隊のコンスタンチノブル遁竄

### (一) トルコの中立宣言

大戰の初、トルコに於けるドイツ最良の感情は、決して、其國に普かりしとは云へなかつた。少くとも、戰爭の渦中に投ずることを欲せざるものや、心を協商側に繋ぐものは、宮中にも、府中にも尠くはなかつた。けれども、八月三日に於て中立を宣言したる時の青年トルコ黨政府は、已にその前日を以て、遮二無二ドイツと同盟の密約を結び、若し、ロシアが二元帝國、對、セルビアの争に干渉したるがために、ドイツをして、オーストリアを應援するの止むなきに至らしめたる時は、此應援義務は、等しくトルコにも發生すべきものたることを約したのである。本條約は、一九一八



年の末日まで有効であるとせられ、之によりコンスタンチノブル政府は、いつでも、干戈を執つて起たなければならぬ筈にはなつてゐたが、併しながら、ドイツを以て之を見れば、トルコの助けで辛うじて勝利を得るといふ様なことでは、戦後に於ても、トルコ跋扈の原因を作る虞があるので、戦局が迅速に、彼自らに有利に進捗すべき見込みがなければ、俄に、新月帝國の援助を求めると云ふ考がなかつた。更に之をば、協商列國の立場から見ても、彼等は、トルコとドイツとの同盟條約の存在をば知らぬにしても、已に既に、ドイツの勢力で固まつた青年トルコ黨の有力者の把持の下にあるコンスタンチノブル政府をして、今更、協商側に参加せしむるの全然、望みなきを知つて居るので、せめて、どこまでもトルコの中立を保持せしめんことを欲し、僅々、四年の間に三戰することの、國を亡す所以の途たるを當局者に力説した。イギリスの如きは、トルコにして中立を支持せんには、エジプトの靜穩にして、何等、不慮の事變の勃發する虞なからん限り、更に、その現狀を變更することなかるべきを告げたし、フランス、及、ロシアも、亦、トルコの獨立、竝に、領土保全を保證したのであつた。然るに、此際、一つの出來事が起つて、トルコの中立は、事實に於て破られてしまつたのである。

### (二) ドイツ軍艦の竄入

ドイツが一艘の巡洋戰艦に二艘の輕巡洋艦をつけて、之をば地中海に常置することにしたのは、

一九一三年からであつた。大戰の勃發に際し、ゲーベンを旗艦とするドイツの軍艦二隻は、會、イタリヤの海岸にあつたが、彼等は、その快速力を利用し、モルタなるイギリス艦隊の監視の目を掠め、脱兎の如く東して、八月十日、ダルダネルスの海峡に入り、終にコンスタンチノブルに竄入した。ドイツの艦隊の大西洋に脱出するに至らんを期しつゝありしイギリスの地中海艦隊は、あまりに大なる期待を國際法上の中立法規に置いたため、有力なる艦隊を派して、袋の海の唯一の口である該海峡のほとりを警護せしむることを打ち忘れて居つた。いかに速力に於てドイツ艦隊の匹にあらざりしにせよ、數多の艦艇を以て地中海を警邏しつゝあつたイギリス、フランスの兩海軍に取ては、こは實に拭ふべからざる不覺と云はねばならなかつた。

もとより、抗議は、直に協商列國によりてコンスタンチノブル政府に致された。彼等は、規程により、二艦をして二十四時間以内に海峡から退出せしむるか、若くは、その武装を解除せしめざるべからざるを求めたるに、トルコは、ダルダネルスに入るに先つて、已に二艦をベルリン政府から買収したと稱して、之に應ぜず、二艦乗組のドイツ將卒を退艦せしむべき旨の談判に對しても、言を左右に託して、はかなくしく之を實行せんとせざるのみならず、剩へ、その海軍顧問たりしイギリス提督の職までも解いてしまつた。

かくの如くに、トルコが二艦事件で列強もなげに振舞ひ、流石のイギリスをして手古摺らしたの



は、彼にもイギリスに對する大なる苦情があつたからであつた。是より先、バルカン戦争にトルコの無残なる敗北をとりしは、當時、ギリシアが有せし大なる弩級戦艦のトルコの海軍を壓迫したことも少からず原因したので、コンスタンチノブル政府は、機を見てギリシアに復讐し、彼のために失ふ所の諸島嶼を奪回せんものと、イギリスで製造中だつたブラジルの一弩艦を急ぎ買ひ取り、更に今一隻の弩艦を注文した。そこでギリシアも、合衆國から二艦を購求して己が海軍力の劣勢を補ふたのが、一九一三年六月のことであつた。二艦の買入れ、及、建造は、トルコ國民の愛國的喜捨と、極めて高利なる借入金とによるもので、已に其最後の支拂も完済せられ、トルコ水兵、イギリスに渡りて、愈、之を引取り、歸國の途に就かんとしつゝありし所に、大戦が勃發し、海上勢力をいやが上にも強固ならしめんことを切望せるイギリス政府は、十分なる賠償を約しつゝ、突如、二艦を沒收するに至つた。これ、トルコ舉國のイギリスを不満とする所であつた。されば、ゲーベン、及、ブレスラウの買収は、トルコ人を以てすれば、イギリスから加へられた損害を償ふものであつた。ドイツ軍艦は、かくの如くにして、ドイツ、トルコの紙上の同盟をば、一變して實質的の結合たらしめたる紐帯となつた。思ふに、歴史の上に於て、僅々二艘の軍艦にして、彼の如くに國際政局の上に大なる影響を及ぼしたものはなかつたらう。

## (三) トルコの参戦

ドイツ陸軍使節の一行によりてその陸軍を把持せられたるトルコは、今や、ドイツ地中海艦隊の司令長官によりて其海軍までも統べらるゝことになつた。是に於てか、協商列強は、彼をして中立の地位に留まらしむべく、幾多の好餌を提供せざるを得ず、青年トルコ黨の政府は、又、これに勢を得て、彼が國權回收の政策を實現すべく邁往した。九月九日、彼は、彼がゲルマンの兩與國の承諾すらも待たで、恣に、十月一日以降、列國に幾多の特權を許したる降服條約を撤廢すべきを宣言し、ついで、月の末に至りては、ボスフォルス、ダルダネルス兩海峡の封鎖を命じた。ロシアの輸出入貿易の十中の九までが、その往還の路として居る所の、言はゞ、彼が經濟上の動脈たる大道が塞がれてしまつた。三國協商に對するトルコの攻勢的態度は、かくて日を追うて昂じて來て、彼の艦隊は、終にロシアの黒海沿岸に砲撃を加ふるに至つたので、十月末日、三國の大使は、コンスタンチノブルを引上げ、國交はこゝに斷絶した。十二月、イギリスは、イギリスに忠ならざるエジプト大守を廢し、同時に、エジプトをトルコから獨立せしめて、之を己の被護國とし、新なるスルタンを擁立した。

## 二五六 トルコとドイツとの企圖

最近六年の間に於て、アジアでは、ベルシアを分割せられ、アフリカでは、モロッコ及トリポリを



拉奪され、更に、ヨーロッパからまでも驅逐せられんとするに至つたトルコ、竝に、回教世界は、此  
猙獰なるヨーロッパ列強の侵略の前に、拱手して己が最後の運命を俟つことは出来なかつた。殆んど  
化石せるトルコの文化にはぐくまれたる現代のトルコ人も、西ヨーロッパの思想、竝に、慣習から絶  
對に超絶することが出来ずして、中には、随分、極端なる歐化主義に固まつたものも現れる様にな  
つた。何處でも見られる、進歩主義と保守主義との兩極思想對立の現象は、決してトルコをのみそ  
の除外例とはしなかつた。否、西方の侵入に對する反動は、こゝでは、却て、猛烈にして、オトマ  
ニズムをその核心としたる人種的、宗教的の二つの大運動として發展するに至つた。

## (二) 汎トルキズムの運動

汎トルキズム Pan-turkism とは、ツラキアからアルタイ山に至るまでのトルコの諸族をば、オト  
マン・トルコの下に統制せんことを求むる一種の運動で、トルコ人のかゝる妄想の中には、彼が領土  
的に西方に失ふ所をば、東方に恢復しようと思ふ政治上の要求の外に、トルケスタンの綿花や、ア  
ルタイ山の金やらの富資を手に入れたいと云ふ經濟上の要求もある。是より先、トルコ革命後、コ  
ンスタンチノブル政府は、トルコ學藝院 Turk Bilgi Derneği なるものを設立し、之をして、すべて  
西洋先進國の學者の新しい研究やら、學說やらを紹介させたが、ワムベリー Vambery 等の東洋の民  
族に關する研究も、亦、之によりトルコの知識階級の間傳へられて來て、言語なり、土俗なり、

歴史なりに關する討査から、渾然たる人種思想が萌え出る様になつて來た。ヨーロッパに破裂した大  
戦争は、トルコ愛國者をして、大トルコ建立の絶好の機會の到來せるを思はしめた。一九一五年、  
サロニカの一ユダヤ人は、匿名にて「トルコ、及、汎トルコの理想」と題する一書を著し、此好機に  
乗じてロシアを滅し、之に臣屬せる三、四千萬のトルコ諸族を解放して、之をば一千万のオトマン・  
トルコに併せ、以て五千萬の一大國民を作らんことを主張した。黒海は、回教徒、及、オトマン人  
の海なりと云ふ青年トルコ黨の説は、要するに、此意味を述べたものである。されば、汎トルコの  
運動は、初は、アナトリア、及、コンスタンチノブルのオトマン・トルコ人、ペルシア、及、中央ア  
シアのトルコマン人、竝に、南部ロシア、及、カヴカスの韃靼人を包容しようと思ふものに過ぎな  
かつたが、バルカン戦争の起るに及び、運動者は、最早、之だけでは満足せずして、更に、大なる  
汎ツランの大理想を掲ぐる様になつた。彼等は、ツランなる詞の、より多く東洋的の響を有するに  
引きつけられて、ロシアのフィン人、エスト人、ホンガリアのマジャール人から、シベリアの土蕃、  
及、蒙古人、滿洲人に至るまでも網羅する大運動たらしめんとした。之が實現は、もとより、先  
づ、ロシア帝國を撃滅するに非ずしては、期し得られないが、スラブの波のため、絶えず壓迫され  
つゝあるマジャール人は、之に共鳴した。

民度の極めて低劣な、政治思想を缺く維然たる種族を材料としては、汎ツラニズム Pan-turanism



は勿論だが、汎トルキズムそのものすらも、實行難を嘆ぜざるを得ない。が、それでも、之を以て協商列強中、少くとも、ロシアをその内部から威嚇するだけのことが出来る。これ、トルコとドイツとの、益、之が宣傳を怠らざりし所以で、戦時中、彼等のアルメニア人を虐殺し、若くは、虐殺を傍觀したりしは、此基督教民の撲滅によりて、アナトリア、及、アゼルベージヤンのトルコ族韃靼族の間に全く聯絡を通じ、汎トルコの理想實現の第一歩を占取せんがためにほかならなかつた。但し、人種的の運動たる汎トルコ主義は、固より、アラビヤ人や、ベルシア人の賛同を得ることが出来なかつたので、トルコ人は、彼等に對しては、別殊の宣傳を行ふの必要があつた。是に於てか、汎イスラミズムなるものがある。

### (二) 汎イスラミズムの運動

汎イスラミズム Pan-Islamism とは、基督教に對抗する回教世界の一大聯合を起さうと云ふ運動である。かゝる思想の鼓吹者を動かす直接の動機は、必しも、同一に非ず、トルコの如きは、彼が采配の下に、全回教世界を左右し、以てヨーロッパ列強を制しようとするものである。従て、彼は、宗教の假面を被つて、實は、政治上の統一運動を試みるものである。由來、回教では、ハリファは、今日のローマ法皇とは異つたる地位を占め、俗權を離れては、教會も、教權もないのだが、併しながら、回教の永い歴史を通じて、實際、政治的統一の保たれたるは、マホメット歿後の十二年

間だけで、それから後は、彼の門下の間に、彼の正當適法の繼紹者に關する意見の一致を見たことなく、七十三派あると云ふ中でも、トルコとベルシアとは、二大宗派に分れて、宗教的、國民的に相對峙して居る。かくの如くにして、事實、回教君主の宗教上の主權は、彼が俗權の行はるゝ區域内に行はるゝのみであるが、トルコの سلطان は、彼が一五一七年、エジプトを征略するや、アッバヌ朝の最後のハリファから、豫言者の正當の繼紹權を承けついたのであると稱し、全回教世界に於けるハリファたることを主張して止まないのである。ボスニア、ヘルツェゴヴィナ併合事件の起るや、抜け目なき彼は、オーストリアをして、トルコ・ سلطان のハリファたり、世界に於ける回教徒の精神上の元首たることを承認せしめ、ついでラウザンヌ和約の上でも、イタリアをして、亦、同一の精神を認めしめた。

سلطان の此主張は、少くとも、豫言者の子孫を以て自ら居るメッカの君長の衷心、肯んじ得ざる所であつたが、一九一四年十一月十三日、トルコ帝の、愈、正式に戰を協商列國に宣するに及び、彼は、翌日、更に之が不信者に對する神聖戰爭 *Jihad* なることを令して、全世界三億の回教徒をして武装して起たしめんとした。

汎イスラミズムの運動は、之が宗教上の要求を其動因とする限りに於ては、アラビヤ人をして、その民族主義を超越してトルコと握手することを得しむるものであつた。近世に於ける該運動の祖



師は、ジューマル・エッチン Djemal-ed-Din である。ヨーロッパの文明のため、危機の回教世界に迫りつゝあるを説き、そのため、イギリスのためエジプトから逐はれた彼は、アブドル・ハミド帝を動かす、帝の宮殿、奥深く、汎イスラム宣傳局を設けて自ら一切の畫策に當つた。すべて宣傳の組織も方法も、ヨーロッパの方式に則りて、檄文は、祕密に印刷せられ、熟練なる宣傳者は、又、八方に派遣された。

アブドル・ハミドの發意に成れるヘヂズ鐵道も、これ亦、大に彼が汎イスラムの運動を助長するものであつた。彼は、コンスタンチノブルをば、聖地メヂナ、及、メッカと連結する鐵道を布敷せんと欲し、回教世界の喜捨を求めて、一九〇〇年—一九〇八年、ダマスカスからメヂナまでの線を敷くことに成功した。

アブドル・ハミドの位を失ひたる後にも、青年トルコ黨は、依然として此方策を繼續したが、トルコ政府の後に取りて之を支持するものは、實にベルリン政府、及、ドイツの銀行家であつた。ドイツがモロッコの問題に執着したりしは、之を基地として回教世界を煽揚することが出来ると云ふ大なる利益の、彼が考慮の中にあつたからだつたが、トルコの戰渦に投入するに及び、彼は此地に於て大躍動を試みん事を決し、大に汎イスラミズムを宣傳し、イギリス、ロシア、フランスの回教徒をして、蜂起してそれらの自治民族に反噬せしめんとはした。此目的を以て彼のトルコと共に企て

たるは、ヨーロッパ、アフリカの兩大陸をば、前アジアに結び付くるなるカザカスとスエズとの兩地點に兵を出して、前者に於ては、ロシアを、後者に於ては、イギリスを衝かんとする策であつた。若し、この舉にして其效を奏せんか、アナトリアとトルケスタンとの連絡が通ぜられて、ロシアでは、南ロシアの韃靼人と、トルケスタン地方のトルコ人、イギリスでは、ベルシアを経由して、アフガニスタン、及、印度の回教徒が、人種的、宗教的に動搖するに至るべく、又、スエズ運河の占領により、東西兩洋間の通路の杜絶せられたる結果、北アフリカ一帯の回教徒が蜂起して、イギリス、イタリア、フランスの三大敵國をその内部から擾亂する事になるかも知らず、何れにしても、協商列國にとつては、由々しき大事であつた。

## 二五七 聯合軍のダルダネルス肉薄

### (一) ガリポリ攻撃の目的

此危機に際し、協商列強の相議して採りたる對抗策は、二つあつた。一は、兵をトルコに出し、進んで彼の企圖を撃破せんことだつたし、今一つは、利を以てトルコ比隣バルカン列國を誘ひ、之をば、トルコに對する一の對抗的勢力たらしむべく、協商列強に味方して起たしめ、若し、又、兩端を觀望し、ゲルマン風を匂はして、動もすれば、協商列國に背馳せんとする素振りのものゝあ



つた時には、百方、之が、ゲルマン同盟に加擔するを妨げ、出來得べくんば、之をして中立の地位に留まらしめんことである。かくて協商列強の東部論は、遂に、大局を制して、カヅカス方面のロシア軍を除き、三つの遠征軍は編制せられた。一は、ヨーロッパを前アジアに連結する第三の關門たるダネルスを攻撃せんとするものだし、二は、印度を策源地とし、ベルシア灣口から、メソポタミアに派遣されたものだし、三は、又、エジプトを根據地として、シリアを征服せんとするものであつた。

トルコ攻撃の目標を何處に選ぶかといふ事に付て、軍事當局者は、必しも、其見を一にしなかつた。キチナー陸相の如きは、兵をアレクサンドレタに上陸させて、それから十二哩奥のバグダード鐵道を占領しようと云ふ意見に傾いて居つたが、この方は、自國の勢力範圍であると云ふ所から、フランスの同意を得ること能はざりしものゝ如く、遂にガリポリ説が、チャーチル海相によりて十一月五日の軍事會議に提唱され、一九一五年の年始に、ロシアから、そのカヅカス方面に對するトルコの壓力を取り去つて貰ひたいと云ふ切なる願ひの申し出でらるゝに及んで、初めて決せられたのである。ガリポリは、コンスタンチノブルへの通路たるダネルス海峽の西側岸を限る一小半島で、水なき峻險なる山嶺の鎖をなして居る所である。聯合軍當面の目的は、之が攻撃によつて、ロシアのためにカヅカス方面からのトルコの壓迫を除き、又、海峽の開放によつて、ロシアをしてそ

の輸出入の道を得しめようと云ふことであつた。實際、此遠征にして首尾能く運んだならば、その效果の測り知るべからざるものあつたらう。結局、ブルガリアは勿論のこと、バルカンのすべての向背は、之できまつてしまふ譯だし、ドナウへの路も開かれる譯である。

#### (二) 一九一五年三月の協商三國密約

協商列國のガリポリ攻撃、若しその效を奏し、コンスタンチノブルにして聯合軍の手に陥らば、トルコの獲物をば、いかに關係列強の間に分割すべきか。三國は、是に於てか、直に狸の皮算用にとりかゝつた。一九一五年三月四日、ロシアは、イギリス、及、フランスに一の覺書を交附して、大戰の結果、勝利の協商列強に歸したらんに際し、須く、ロシアの版圖を擴張して、悉く左記トルコの領土を之に賦與せんことを求めた。コンスタンチノブル、ボスフォルス、マルモラ海、及、ダネルスの西岸、エノス・ミヂア線までの南ツラキア、ボスフォルスとサカリヤ河との間の小アジアの海岸、マルモラ海の島々、イムブロス島、及、テネドス島等、これである。

イギリスとフランスとは、アジア・トルコに關しては、三國の間に別に協定を結ぶべきこと、回教の聖地を保護し、アラビアには、獨立の回教君主を立つること、一九〇七年のイギリス、ロシア協商中に認められたるベルシアの中立地帯をば、イギリスの勢力範圍中に包容すること等の若干條件を提して之に同意を與へたが、ロシアは、之に對して、更に、二、三の保留を提言した。ハリファた



るの資格をば、トルコ・スルタンから褫奪せざらんこと、回教徒の順禮の自由を保障すべきこと、バルシアの中立地帯をイギリスに與ふるを拒まざるも、之に一、二の小訂正を施すこと等、是である。當時、協商三國の意志の、トルコをば、全然、ヨーロッパから驅除し了らんとするにありしを見るべきである。

二月の後、イタリアの參戰するに及び、彼も、亦、己の要求の容れらるゝを條件として、此三國間の密約に承認を與へた。

(三) 攻撃の頓挫、竝に、撤兵

然るに、かゝる大なる希望もて着手されたガリボリの攻撃は、空しく慘憺たる失敗に終つてしまつた。本來、バルカンに於ける政治上の考量に専念して立せられたる此遠征には、軍事上の研究と準備とが足らず、政治家の助言と立案とが重きをなすに過ぎて居つた。従て、陸海軍の時を同うする協力の存するに非ずしては陥れがたき半島の要塞を攻略すべく、海軍と陸軍とは、脈絡も、系統もない獨立の作戰に、彼等の重要な起手を謬つてしまつた。

イギリスの海相が、軍事會議に諮ることなくして、命をイギリス、フランスの聯合艦隊に下し、開戦勿々の十一月三日に、ダルダネルスを砲撃せしめたるは、償ふべからざるの失策であつた。これがために、コンスタンチノブルの人心、恟々として、トルコ政府は、一時は、その都を小アジア

に遷さんことを思うた程ではあつたが、併しながら、彼は、同時に之によりて敵の攻撃を豫期し、その守りを堅むることを得たのである。一九一五年の二月、及、三月に至り、聯合艦隊の再、大舉して之に迫つたる時には、攻撃軍の損害の重大であつたに拘らず、トルコの要塞の彈藥、亦、正に盡き果てんとしつゝあつたから、聯合艦隊は、今一息で海峡を突破してマルモラ海に入ることが出来たのに、空しく鋒を收めて退いてしまつた。協商二國の作戰は、海軍のみの力を以て之を破壊するにあつたが、この目的が貫徹されなかつたので、四月に至つて、オーストラリア、及、ニューゼーランドの陸軍は、初めてこれに派せられ、上陸して陣地を占めには占めたものゝ、イギリスの畫策のかくの如くに齟齬しつゝある間に、ドイツ士官は、極力、要塞の防備を完成し、之をして文字通り難攻不落の鐵壁たらしめた。されば、イギリスは、之がために、數十萬の陸軍を割き、十二萬に垂んたる死傷者と、十萬に垂んたる病者を出して奮闘したけれども、秋毫も得る所がなかつた。約一閱年にして、彼の意を決して、此不幸なる戦闘を停止し、その兵を撤したのは、攻伐の此上の繼續の、無益の犠牲を投するに過ぎざるを覺つたからであつた。

二五八 メソポタミア遠征

イギリスのトルコに對して採つた方略は、何もかも失敗づくめと云ふ譯ではなかつた。ガリボリ



惨敗の苦き経験は、彼には、却て藥となつて、此後の良果を胚胎した趣がある。

イギリスのメソポタミア遠征には、二つの目的があつた。トルコが、その回教徒擾亂の手を印度に及ぼさんとするを制し、ペルシア灣方面からせらるゝ脅威を断たうと云ふのが一つで、又、その大中歐策の裏を搔かうと云ふのが、今一つである。彼は、そこで開戦勿々の十一月八日、一隊の兵を印度からシャット・エル・アラブの河口に出して、そのファオ港を占領せしめ、半月の後には、バスラをも手に入れしめ、ついで、大なる遠征軍を編制して、メソポタミアの内地に入らしめたが、此軍は、チグリスを溯ること二百哩にして、優勢なるトルコ軍の圍む所となり、一九一六年春、降つたものだから、再、周到の準備を以て、捲土重襲し、翌年三月十一日、終に、バグダードを占領するに成功した。バグダードは、軍略上の要地ではないけれども、ドイツの所謂、二ビー政策の目標とせられたる此地の攻略は、多大の意義なしとはしなかつた。

イギリス、フランスは、ヨーロッパ・トルコの處分案に付てロシアと協商すると同時に、一九一五年三月五日、アジア・トルコの分割方法に關して密約を結び、イギリスは、シリアに於ける優位をフランスに、フランスは、又、メソポタミアに於ける優位をイギリスに與ふことを約束した。該密約には、兩國に歸すべきトルコ領土の境界線は明認されてなかつたので、彼等は、更にメソポタミアに於ける最初の遠征軍の躓いてから幾もなくして、一九一六年五月、大體に於て前約の方針によ

り、一層、細緻なる密約を結び、メソポタミアの大部分をばイギリスに、北の方、小アジアにまでも擴延せるチール・Euphratesよりアレクサンドレッタまでのシリアをばフランスに附することとし、パレスチナをばイギリスの勢力の下に國際化せしめ、更に、メソポタミアとシリアの沿岸との間に横はるなる大背地をば二分して、アレppoからダマスカスまでのシリアの殘部をフランスの、又、モーズル附近のメソポタミアの殘部をばイギリスの勢力範圍とすることにした。かくて、アラビアに獨立の君主を立てようと云ふイギリスのアラビア民族懷柔策により、前年の十月に、獨立を許されたるメッカの君長は、一九一六年六月を以て、トルコから離畔すべきことを天下に宣言するに至つたが、しかしながら、密約の兩大國には、トルコの羈絆の下にありしすべてのアラビア人を、悉くメッカ君長の下に統一すると云ふ様な考はなかつたのである。

## 二五九 ブルガリア、及、ギリシアの嚮背

バルカンでは、交戦の兩大國際團體の間に、中立の三國を引いて各の味方となさんてふ赤熱的の競争が始まつた。此外交上の争は、トルコの參戰この方、層一層に猛烈になつて來た。蓋し三國、殊に其中でも、ブルガリアをして起たしむるに成功し得たものは、優にバルカンの全局を制するとの出来る地位を占取するの見込があるからである。協商列國から見れば、ブルガリアの參戰によ



りてトルコの死命は制せられ得るだらうし、又、ゲルマン同盟から見れば、容易に最後の打撃をセルビアに與へることが出来るであらう。かくて協商側も、ゲルマン側も、新なるバルカン同盟を結成すべく狂奔した。が、之がために、協商列強は、バルカン第二次戦争の記憶、まだ新にして、戦敗の怨と復讐心とに熱して居るブルガリアをして、彼がマケドニアに於て俱に天を戴き得ずとせるセルビア、及、ギリシアの二國と和解せしめねばならなかつた。ブルガリアは、ロマニアからも、トルコからも、前年の割譲地を還して貰ひたいのではあるが、就中、彼の飽く迄も、求めて止まざるは、彼が百五十萬の同胞の住み家たるマケドニアであつた。そこで、協商列強は、半は脅壓により、半は好餌の提供によつて、ブルガリアを誘はんとした。初は、セルビアを犠牲とすることによるものと、ゲルマン同盟に傾かんとするものとの二派があつたが、最近の戦役この方、後者の方、著しく其勢力を加へて來た。時の内閣は、公然、我等は、我等に向て最大の提供をなし得るものに與みすべしと聲明し、以て、誰、憚らず、彼が競賣的の商賈根性を曝け出したのであつたが、けれども、彼がセルビアに對する復讐思想は、日を追うて加はりつゝあつたし、ガリポリ攻撃のだからなき加減は、彼をして十分に協商列強の頼み少きを斷ぜしむるに足るものあつたので、ゲルマン同盟は、其隙に乗じて活躍し、一九一五年七月二十二日、遂に、トルコを説きてマリツァ河畔の地を割

き、アドリアノブル、デデアガッチ間の鐵道をば、全くブルガリアの手に歸せしめた。そこで、協商四國は、九月に至り、再、別殊の利益をブルガリアに提して、彼とトルコとの結合を裂かん事を試みたが、時、既に遅く、ソフィア政府は、十月初、動員を命じて戦をセルビアに宣し、新にロシアを屠りて士氣、益、振へるドイツ、オーストリアの聯合軍と共に、戦に疲弊せるセルビアに侵入し、二閱月にして、悉、之を蹂躪し、一九一六年一月、更にモンテネグロを併呑した。セルビアとモンテネグロとは、僅にセルビアの南端を聯合軍の手に残しただけで、全く敵手に落ちてしまつた。バルト海からボスフォルスまでの鐵道は、之によつて完全に聯絡される事になつたので、一九一六年一月十七日を以て、ベルリンからコンスタンチノブルに至る最初の直通列車の運轉が開始せられた。ブルガリアの誘致に關する協商列強の外交上の失敗は、フランスでは、デルカスセ外相をして失脚せしめたし、イギリスでは、又、グレイ外相をして攻撃の衝に立つに至らしめた。ギリシアも、亦、兩交戰團體が爭奪の目的物であつた。

曩に、一九一三年六月三日の條約を以てセルビアと同盟したギリシアは、大戰の勃發に際し、同盟條約に於ける應援義務は、全ヨーロッパの戦争を之が豫件とするものではないと稱して中立を宣言したものであるから、今や、新なる作戦の計畫を立て、東方に躍動せんとして、あつた協商三國は、別して彼を引致する事に骨折つた。聯合艦隊の最初の砲撃をダルダネルスに加へてから間もなく、



三國は、ワロナを除いた南部アルバニアを提供して、アテネ政府のセルビアを救援せん事を求め、之に對し、時のウニゼロスの政府は、ギリシアがブルガリアの攻撃を受くる事あらん萬一の場合のために、ロマニアから確實なる保證を得ん事を要求したが、ロマニアは、之に應じなかつた。そこで、次で、一九一五年一月十二日、協商三國は、新なる攻撃のセルビアに加へらるゝに際し、セルビアに對するギリシアの援助を得ることが出来たなら、之が報酬として、小アジア海岸の重要な地方を割くべきを申出で、ギリシアからは、右に對し更に若干の希望を提言したので、双方の間に交渉の開始を見ることになつたが、ギリシアの國論は、不幸にして一致を缺き、宰相ウニゼロス、並に、議會は、協商最良だつたけれども、ドイツ皇帝の妹を娶れる國王、及、その宮廷は、ゲルマン同盟に向て同情ある態度を執らんことを希望して已まず、ウニゼロスは遂に斥けられて野に下つた。交渉は、新内閣と協商三國との間に再、開かれ、アテネ政府は、列強のギリシア軍と共にトルコに對する軍事行動を始むること、北部エビルス、並に、エーゲ諸島を除くギリシアの全領土を保全することを條件として宣戦すべきことを申し出でたが、列強は、領土の保全に保障を與ふることが出来なかつたからして、ガリポリ遠征軍の將に敵前上陸を開始せんとしつゝ、あつた重要な瞬間に於ける此提議も、省みられず、ギリシアは、依然たる中立に止まつた。六月の總選舉に大勝利を博したウニゼロスは、八月、再、内閣を乗つ取つたけれども、アテネに於けるドイツ人必死の運動

のため、ギリシア政局の地平線は、相變らず、霽れやらず、遂に、ブルガリアの舉兵を見るに至つた。形勢の此急轉直下に對しては、協商列強の之に應ずべきの策、今は、強力によりて、動もすれば、ゲルマン同盟に投入せんとするギリシアの中立を支持するの外なかつた。イギリス、フランスの聯合軍は、十月五日、急行してサロニカに上陸したが、國王は、甚、ウニゼロスの政策を喜ばず、直に彼を免じ、アテネの政局は、又もやドイツ最良の支配する所となつたから、十月二十日、協商列強は、新にキプロスを提供して之を味方としようとしたけれども、もう駄目だつた。

## 二六〇 舉兵、遲きに失したるロマニアの敗竄

三十年來、ロマニアをば三國同盟に結び付けたる密約は、彼の與國が、挑發せざるに第三國の攻撃を受けたる際に、彼をして、應援を義務的たらしむるものであつた。ホーヘンツォーレルン家から出た國王カールは、彼の郷國ドイツに對し熱烈なる愛着を持つて居たから、その私情に於ては、もとより、之に畔くことが出来なかつたが、兎も角も、彼が二つの與國をして干戈を取て起つに至らしめた大戰爭に對し、急速、彼の政府として執るべきの態度を決せねばならなかつたので、カルパチアの一小山村シナイアに元老大臣の御前會議を召集し、この際、これまで極秘に附せられた同盟條約を初めて正式に披露したる所、集まつたる名士連の多くは、戦が、ロシアの挑發によつて起つ



たものではないと稱して應援義務を拒んだ。八月三日に於けるロマニアのイタリア同様の中立宣言は、かくして發せられたのであつた。

ギリシア同様、ロマニアにも、協商最良とゲルマン最良との強い二つの潮流があつた。こゝでは國債は概ねドイツで募集されたし、ドイツの設立にかゝる學校や協會は、そちこちにあり、ゲルマン的感化は、中々、盛だつた。けれども二元帝國にして、隨意、彼自らの版圖を割くにあらざる限り、彼がゲルマン同盟に参加することによつて得らるべき領土上の利益は、僅に、彼がロシアとの境をブルート河からドニエストル河に移す位に止まるべきに反し、協商列強は、彼のために、二元帝國を犠牲に供することが出来るのである。民間に於ける協商最良の流れの可なり優勢であつたのは、協商三強國の運動の抜かりなかつたためであるが、亦、實際に、ゲルマン同盟の敗戦の、彼に齎すに、最大の利得を以てし得べき見込のあつたためでもあつた。

かゝる狀勢の下に於て、時のブカレスト政府は、出來得るだけ、兩交戰團體を犠牲に供することによりて、最大の利得を彼自らの手に收むるを得べき好機の動いて來るのを待つべく、兩端觀望の政策を執つた。従て、彼が日和見の態度は、戰場の勝敗によつて絶えず左支右吾した。一九一五年春、ロシア軍のガリチアに振ひ、その正にカルパチアの險を踏えんとするの勢を示すや、ブカレスト政府は、一時、之に傾いたが、幾もなくして、ゲルマン軍の大殺到と共に、顧みて媚をゲルマン

同盟に呈するに至つた。セルビアとモンテネグロとの慘敗するに及んでは、彼は、將にその手をゲルマン同盟に與へんとするもの、如く、此往年の兩與國をして、有利なる通商條約を彼と締結せしめ、ロシアをして憂心、仲々たらしめた。人口一千三百萬を算する大ロマニアの實現は、汎ゲルマンなり、汎スラブなりの大氷河に對する有力なる障屏ともなるので、イギリスとフランスとは、寧ろ、喜んで之を歓迎したが、同一の理由は、ロシアの一部人士をして、却て、ロマニアの成功を冀はざらしめた。けれども、一九一六年春夏の候、ロシア軍は、大にロマニアの境に勝ち、ブカレスト政府をして、又もや、協商側に傾かしめたし、同時に、その最高統帥部も、亦、ロマニアの參戰説に賛成するに至つたものだから、列強は、急ぎブカレスト政府と談判し、八月十八日を以て、政治上の條約と軍事規約とを締結し、戰勝の曉、トランシルヴァニア、バナート、ブコウィナを彼がために割き、又、一九一三年のブルガリアとの條約に於て得ざりし黒海のワルナ、及、その附近を之に附與すべきを約した。

八月二十七日、ロマニアは、二元帝國に宣戰し、直に兵をトランシルヴァニアに入れたが、擧兵の時期、少しく遲きに失して、ロシア軍の活動は、最早、止まつてしまつたし、當時、ウェルダンに難戰苦闘しつゝあつた聯合軍の救援は、豫期の通りに到來しなかつた。約八百哩の戰線に互つて配置せられたる其陸軍の實力は、第二バルカン戰爭の勝利のために、買ひ被られて居つた。従て、精銳



なるゲルマン同盟軍の、西と南とより之に侵入するに及んで、一とたまりもなく斬りまくられて、十二月六日、その首都は陥れられ、穀物の産地として、油田の所在地として知られたる彼が沃野の三分の二は、敵手に落ちてしまった。

かゝれば、一九一六年末に於けるバルカン、及、西アジアの形勢は、大體に於て、ドイツの冀ふがまゝに發展し、ギリシアこそ之を誘致することが出来ず、オーストリアが憧憬の地たるサラニカには、敵軍の屯營するありて、動もすれば、マケドニアの野に攻め入らんとするの風あれど、セルビア、及、モンテネグロは、事實に於て滅びてしまつたし、ロマニアは、亡國も同然だし、更に、又、ベルシア灣方面からメソポタミアに派遣されたイギリスの遠征軍も、トルコの破る所となつたから、ドイツが宿昔の大理想たる大「中歐」策は、遺憾なく實現せられたるやに思はれた。攻城野戦の約二年有半の間に、協商列國は、ヨーロッパでは、纔にアルサスの一小部と、ゴリチア、竝にツェルノーウツのあたりの若干村落とを略取し得たに過ぎなかつたのである。

#### 第四十六章 講和の努力

##### 二六一 ドイツ、漸く戦に倦む

ドイツは、元來、完全なる自足自給の國ではない。鐵や、石炭や、肉類やは、豊富ではあるけれ

ど、銅、ゴム、綿花、羊毛等の多くの重要な原料は、彼の全く産出せざる所、若くは甚しく缺乏する所だし、農業の奨励を怠らざる彼も、小麥ですらも、その需要額の一割を外國に仰がざるべからざるの有様である。されば、彼の作戦の計畫のマルヌに挫けて、急速に戦争の形をつける望みの減じて來るや、持久的の覺悟と物資の運営に従事しなければならなくなつた。況や、イギリスが海上から、その他のヨーロッパ諸國が陸上から、嚴重なる封鎖を以て彼に臨みつゝあるに於てをや。

こゝに於てか、彼は、先づ食料品の節約をするために、一九一五年四月中旬を以て、國民各自の麵麩の定量に制限を加へることにして、即、麵麩券を發行し、又、直接に軍需品の製造に必須な若干の原料に對しては、一九一五年の末には、普く銅器の徵發をし、又、ゴムや、皮革の使用にも大なる制限を加へた。政府の執つた這般の政策が甘く圖に中り、敵の殘酷なる饑餓政策を以てドイツ人の膏血を絞り盡さんとしたに拘らず、勝利によつて釣られて來たドイツ國民は、倅にも能くその境遇を堪へ忍んだ。全然、輸入の途を杜がれて居る軍需の原料なども、恐ろしく缺乏すると云ふまでに至らずしてこゝまでやつて來たのである。けれども、戦争も老ゆるに従つて、實際、若干の食料は、著しく不足の度を加へて來たので、一九一六年の初夏からは、肉券の制が創められ、之が忽にして、卵や、牛乳や、その他の日用品にまでも及ぼさるゝに至つた。同年のクリスマスからは、すべての脂肪類の甚しく缺乏を告げたるため、先づ牛酪の消費量が大きな制限を被つたし、クリス



マスの樹に立てる蠟燭は、唯、一本を限りとすることに取りきめられた。火薬に用ゆべき綿花の貯藏は兎に角、あつたけれども、被服の原料は、すべて缺乏したので、一九一六年八月の初からは、衣服券の制が實行された。かくて生活の必需品の品類、次第に減じ、その幸に市場に残存するものも、質と量とに於て低下し、代用品が之に代つて行くのみだつたので、國民的の營養不良は、之が必然の結果として起つて來た。すべての人の物的、並に心的の能力は、著しく減じて來た。藥品、及、衛生材料の缺乏は、疾病と死亡との機會をして多からしめた。

かくの如くにして、一九一六年の秋に於ては、ドイツの食料品問題は、非常に重大となつた。勿論、その人民は、まだ絶體絶命の窮地に追ひ込まれたと云ふではなく、とても、此上の我慢はしきれぬと云ふほど苦痛を感じて居る譯ではないが、しかしながら、戰爭にして何時かは終止されねばならぬ以上、彼等を以て之を見れば、戦局の常に好都合に運んで來た此邊は、きり上げる汐時でなければならなかつた。況や、一九一六年に於ける穀物の作は、作そのものとしては、前年よりは良かつたけれども、一般の地位の遙に不良となりたるに於てをや。又、況や、折角、當てにして占領したロマニアに於て、敵が退却に際して、悉くその貯藏穀物を破毀し去りしがため、占領軍は、一九一七年の收穫期まで待たなければ、勝利の結果を手にすることの出來ぬていたらくたりしに於てをや。

## 二六二 同盟四國の講和提議

一切の豫想を短期の決戦に置きて立せられたる作戰の計畫の大頓挫を來し、ドイツが四面楚歌の間に立つてからは、之を以て、祖國を滅亡の淵に陥るべき持久戦に誘入するものなりと見て取つた具眼者は、皆、齊しく、一刻も早く、平和の機會を促進せん事を冀はざるはなかつた。既にトルコの參戦の當時から、ドイツの駐外外交官の間に此種の運動を始むるものがあつたが、反響は、中々に發見されなかつた。が、二年有半の戦局は、大分、平和の機を進めた。少くとも、中歐系統の四國の間には、機會の正に熟せるを見たのであつた。トルコも、ブルガリアも、バルカン戦争以來の疲れで困憊して居つた。二元帝國も、食料品の問題では、北隣の與國よりも著しく良い境遇に置かれて居る譯ではなかつた。ホンガリアの方は、チスマ首相のマジールの獨裁政治の下に、表向きは小康を保つては居たけれども、ホンガリアとは違ひ、開戦この方、中央でも、地方でも、全然、無國會の政治を持續して來たオーストリアの方では、ドイツ人ならぬ諸民族の運動は、陰にも、陽にも、中々、強烈で、一九一六年十月、首相は、終に、民主黨の犠牲となつて倒れ、それから一月の後には、老帝も亡くなられた。これと共に、大戦この方、どうにか保たれて來たウィーン政府の安定性は、搖ぎ出して、内閣の起倒は頻々となつた。若い新帝は、この間に位に即位したが、彼は、衷



心の平和願望者だったので、登祚勿々、最も早き機會に於て、平和を克復すべく盡力する所あるべきを決し、この意をベルリン政府に傳へたし、又、十二月に至つて彼の同志たるチラヒ人、ツェルニン Czernin を外相に推した。

一騎討の戦であるならば、勝敗とも、數の現れ方が、今少しく明快であり得るかも知らぬが、二大雄國を各の首脳とする四國、對、十國（一九一六年末の狀勢）の天下分け目の決闘だと云ふことでは、戦局の進捗の、しかく、はかどくしかるべき譯はなかつた。兩大陣屋の中心勢力のそのまゝである限り、その中の三、四小國の滅亡も、一、二國の席捲も、以て彼等の屬する一方の窮局の運命を決するには足らなかつた。況や、時間が、殊に一方の陣屋の最も有力なる味方として之に幸するものたるに於てをや。

此の如き事情の下にありて、平和要求の發意が、未、比較的不利益なる地位を脱却すること能はざる協商三國の方面から切り出されるだらうとは待ち設けられない。此運動の一番、望みあるは、有力なる中立國によつてせらるゝものである。そこで、中歐同盟の四國は、最も大なる望みを北アメリカ合衆國に懸けつゝあつたけれども、合衆國も、中々、容易に動かなかつたので、ルーデンドルフ將軍の如きは、ワシントン政府の平和の周旋には絶望したと云つたし、陸海軍部内に、合衆國反對熱の日に日に、まりつゝあるを見たるドイツの副宰相ヘルフェリッヒ Helfferich や、三元帝國の外

相ブーリアン Baurin は、皆、共に、中歐同盟自ら之が發意を取るべしと主張するに至つたのであつた。軍部の要求により、提議の發せらるゝは、ロマニアが平定されてからと云ふことに豫め定められてあつたので、一九一六年十二月六日、ブカレストの陥るや、六日の後、四國は、愈、中立國を通じて、兩交戦團體の、各その代表者を出して、平和の克復に付、交渉を開始せんことを敵國に提議した。提議の辭句は、敵國に對する懇談と言はんよりは、寧ろ、一種の威嚇とも見做され得べきほどに示威的の文字を羅列したものだつたし、又、該提議の翌日、ドイツ帝のアルサスで兵士に述べた演説には、或は、上帝の審判はロマニアに齎されたりと云ひ、又、或は、我等は絶対の勝利者なりと咆吼するなど、實に驕慢を極めたものだつたので、之が敵に對する印象は、甚、不良だつたが、しかしながら、提議の四國內では、到る所、好評、嘖々であつた。

けれども、一九一六年の末から一七年にかけての過渡期に於けるドイツの、如何に重大なる地位に沈淪しつゝありしかは、彼が敵國の當局者には、十分に見抜かれて居つた。十二月三十日を以て四國に與へられた彼等が回答は、協商列國の態度の、いかに非妥協的なるかを明にするものであつた。彼等は、蹂躪せられたる權利自由のための賠償が與へられ、民族主義、竝に、小國の自由存在の承認せらるゝに非ずしては、平和も、到底、不可能であると云ふのである。かくの如くにして、協商列國にして、四敵國の降服を期し、之と直接に平和を談論するを屑しとせぬと云ふならば、四



國の執り得べき途、今は、中立國を起して平和を斡旋せしむるより外ない譯である。

### 二六三 中立國の講和運動

(一) 北アメリカ合衆國の中立と、その大統領の講和周旋

大戰の勃發する、合衆國政府は、その傳統的政策によりて、八月五日、中立を宣言したが、合衆國々々民中のアングロ・サクソンの分子と、ドイツ的分子との間には、民族性や、思想慣習の相違が働いて、前者をしては、イギリスを初め協商側を、又、後者をしては、ドイツ、竝に、その同盟國を最厲するに至らしめ、彼等は、熾に其言論を闘はして互に輿論を制せんといきまいたのであつた。封鎖による中立權侵害の問題で、大統領ウィルソンは、殆んど絶え間なく、イギリス、竝に、ドイツに抗議を提起し、之と争ひつゝはあつたけれども、彼は、どこまでも中立を支持して、戦渦の中に捲き込まれざらんことを欲した。蓋し、彼が、この所謂、注意觀望の政策 *Watchful Waiting Policy* は、又、實際、合衆國の利益とも一致するのであつた。何となれば、メキシコなり、南アメリカなりに於て、常に合衆國に對する經濟上、政治上の大なる競争者たるヨーロッパ列強が、戦争に依て彼等の精力を消耗するは、それだけ、新世界に於ける合衆國の不安の原因を薄弱ならしむるものだからである。彼にとりては、イギリスに勝つたドイツも、將た、ドイツに勝つたイギリスも、その好

ましからぬものたる點に於ては同一であつた。

合衆國をして平和のために周旋せしめようてふドイツ政府の要望は、戦争方法に對する文武當局者の意見の甚しく衝突した一九一六年から、別して熾烈になつて來て、宰相と外相とは、極力、ウィルソン大統領を動かして、一肌、脱がしめようと努めたが、時、恰も、ロマニアの參戰について、大統領の改選あり、十一月に於ける選挙の済むまでは、ウィルソンは、一切の新なる政策に着手することを得ざる事情があつた。かくて、平和促進の運動に手を染むることを肯んじなかつたウィルソンが、大接戦の結果、再選の榮を擔うて已に一閱月にも及んだのに、彼には、まだ中々、發意を取るの模様が見えなかつたので、四國講和提議の突發を見るに至つた次第であつた。所が、十二月の十八日に至り、ウィルソンは、俄に動き出して來て、四國の提議とは獨立に、普く兩交戰團體に向て、彼等の求めんと欲する講和の條件を具體的に展示せんことを求めた。ドイツを初め四國は、之に對して彼等の講和條件を述ぶる事をばしなかつたけれども、直に、一切の交渉に應ずるの準備ある旨を回答したが、翌年一月十日に至り、協商列國は、商議の開始の機、未、到來せずとし、彼等の求める所の、恢復、賠償、竝に、保障の三つにあることを指摘して、尙、之を詳説し、四國をして彼等の征服したる一切の地方を撤せしむること、戦争のための損害に對し賠償せしむること、過去に於て強力により、若くは、其住民の意志に反して拉奪せられたる地方を返還せしむべきこと、民族



主義を認めて、スラブ人、イタリア人、ロマニア人、及、チェホスロヴァク人を外人の支配より脱却せしむること、トルコの虐政の下にある人民を解放し、且、トルコを全然、ヨーロッパより驅除すること、ロシア帝の主権の下にポーランドを統一すること、安定的の制度を立してヨーロッパの改造を保障すること等を求めた。これ、斷々乎として、戰場に於て四國の降服を命ぜんとするものであつた。一月十一日、ドイツは、中立諸國に向つて、民族主義を主張する敵の矛盾と偽善とを指摘したし、翌日、又、ドイツ帝は、その國民に勅して、敵は、正にドイツを亡さんとしつゝあるものであると訴へ、窮地に陥れるの彼は、かくて戦争繼續の責任をば、講和を商議せんことを欲せざるの敵國になすりつけて、大に彼が國民の敵愾心と復讐心とを激發せしめんとした。

されど、此種の征服戦は、決して合衆國の望む所ではなかつた。一九一七年一月二十二日、ウィルソンは、元老院に於て、兩交戦團體の彼に與へた回答を批評しつゝ、將來の平和は、權力の均衡に代るに、權力の共同を以てしたるものなること、組織的の競争に代ゆるに、組織的なる一の共同平和を以てしたるものたらざるべからざるを説き、之が爲に、左の若干條件を指數した。曰、勝利なき平和。曰、大、小、すべての國民の對等權利。曰、被治者の同意を必須とするの政府。曰、海洋の自由。曰、海陸軍備の制限、これである。かゝる考を懷いて居つたから、ウィルソンは、協商列國の拒絶する所となつたに拘らず、敢て、平和に對する周旋を斷念せずして、一月二十八日、ベルリ

ン政府に交渉し、彼が講和條件の内示を求めたものだから、ベルリンでは、之に一縷の光明を得、大急ぎで、左の諸條件を回答したけれども、同時に、豫定の通り無制限潛水艇政策の實行を宣言したることとて、大事、こゝに止んでしまつたのである。

ドイツの當時要求したる講和條件とは、(一)アルサスのフランス軍占領地の恢復。(二)ドイツ、及、ポーランドのロシアに對する軍略上、經濟上の確なる國境線を劃すること。(三)ドイツの人口、及、經濟上の利益に適合することを條件として其植民地を恢復すること。(四)フランスのドイツ軍占領地をば、國防、及、經濟上の國境線と、財政上の賠償とを附してフランスに返還すること。(五)ドイツの安全を保證してベルギーを回復すること。(六)兩軍の互に返還したる地方に相互主義を基礎とし、經濟上、財政上の協商を行ふこと。(七)戦争の損害に對し、ドイツの企業團體、及、私人に賠償すること。(八)平和克復後、一般の商業、並に、交通の妨碍物たるべき一切の經濟上の約束を廢止すること。(九)海洋の自由を確立すること、以上。

## (二) ローマ法皇の平和運動

最大の中立國たる合衆國が、ドイツと外交上の關係を斷ち、全く、望みを平和の運動に絶してよりは、殘る中立國と云ふ中立國は、第二流、第三流のものみに過ぎず、彼等の中、交戦團體とそとの境を接するものは、封鎖による苦痛のために、平和の一日も早く克復せんことを熱望するも、勝



利の獲物による誘惑にそのかされて、ロマニアの轍を覆まんが恐ろしさに、單獨で、若くは同志と相結んで警戒、をさく／＼怠らなかつたし、又、戰場をかけ離れたるものは、對岸の火事に乘じ、食料なり、軍需品なりを賣り込み、濡れ手で粟の巨利を博すべく、狂奔して居つた。國際政治の上に無力なりし彼等には、兩大交戦團體の中に分け入つて、和睦の斡旋をしようと云ふ役目は、及びもなかつたのである。

唯、しかし、こゝにローマ法皇なるものがある。政治の上では、彼の勢力は、零にも等しいが、その精神界に於ける歴史的權威は、之をば世界的と云ふことの不倫であるとしても、少くとも、ローマ・カトリック世界を蔽ふものでなければならぬ。同盟四國からの講和の提議は、ツチカノ廷へも送られたのであつたが、すべての和議の途の絶たれたるやに見ゆるに及び、一九一七年八月一日、ローマ法皇は、蹶然、起て兩交戦團體に平和を勧告し、國際聯盟の組織を説き、海洋の自由を高調し、敵味方共に、賠償、及、戦費の要求を放抛し、ドイツは、ベルギー、及、フランスから撤し、協商列國は、又、ドイツのすべての植民地を返還し、其他の地方の處分は、その住民の希望を參酌し、正義と可能との範圍内に於て關係列國の間に妥協的に之を裁定すべきを論じた。要するに基督教徒たる彼等の無用の屠戮を止め、斷然、兵器を捨て、大體に於て、大戰前の状態に復せんことを主張するものであつた。こは、固より、十全の勝利を以て及を鞘にせんてふ協商列國の決意と背

反するものだつたので、二十七日、ウィルソン大統領は、之に答へて、ドイツ國民を代表せざるドイツ現政府の如き無責任なるものとは、平和の成立の困難なるを明示した。是より先、協商三國は、一九一五年四月二十六日、イタリアと結んだロンドン密約の第十五條に於て、平和の終結、其他、現在の戦争に關連する諸問題の整理を目的とするいかなる外交上の着手をも、ローマ法皇廷の代表者に許すことなかるべく、キリナル朝廷を助くべきを保證したので、もとより、ツチカノ廷の發意には動かされなかつた。毎年、クリスマスに際しては、きまりきつて、而して、又、此外でも、機會ある毎に、ローマ法皇は、交戦國は勿論、弘く世界に向て、平和の促進に力を致さんことを勧告するを怠らなかつたが、彼が八月の提議も、これまでと同じく、何ほどの反省をも交戦國に齎すことは出来なかつた。協商列國の牛耳を握れるイギリスでは、アスキス内閣、優柔不斷の故を以て輿論の難撃を被りて倒れ、ブカレスト陥落の日を以てロイド・ジョージ、後繼内閣を組織し、銳意、敵を仆すの策にとりかゝることとはなつた。

#### 二六四 敗北主義の鼓吹、及、宣傳

ドイツが發したる講和の提議も、中立國の發議も、共に協商列國の顧る所とならなかつたので、今は、ドイツとしては、戰場に於て敵の勢力を挫くことの外には、あらゆる手段方法によつて敵の



隨志を弱め、若くは、沮喪せしむるより爲すべきの術はなかつた。かくて、彼は、一九一六年夏を以て、ドイツ國民が崇拜の的となれるヒンデンブルグを推して新に參謀總長とし、更に、十二月二日には、祖國補助勤務令なるものを發布して、兵役の義務に服せざる十七歳、乃至、六十歳のすべての男子をして、戦時中、愛國的の各種補助的勞役に服せしむることとし、以て大に來るべき大戦闘のために備へた。敵の勢力を弱めんがために、彼の行うたことは三つあつた。敵を援助せる中立國に對しては、彼は、之を攪亂せんことを試みたりし、敵に對しては敗北主義を鼓吹したりし、又、出來得るならば、その一、二と單獨講和せんことを欲した。

中立國の中でも、オランダとか、スウェーデンとか云ふ様なドイツとの關係最も深く、殆どベルリンの把持から逃れられなかつたものは之を別段として、ドイツが之を己のものとなすべく、若くは己の良友となすべく、最も力戰奮闘した所は、ギリシアと北アメリカ合衆國とであつた。協商列強の海陸軍のために大事な中立權を侵犯せられたるギリシアが、これから約二ケ年の後までも、其あふない中立を保ちとほしたのは、ドイツの外交の死もの狂ひの力であつた。ゲルマン同盟は、又、制海權のイギリスの手にあるがため、協商列國が殆んど無礙にあらゆる軍需品を合衆國に仰ぐを得るの地位にあるに堪へられなかつた。彼等は、そこで彼等のワシントンなる大使館を根城として、合衆國の輿論をゲルマン最良たらしむべく、盛に運動費を播き散らし、一面に於ては、軍需品の供

給に邪魔を容るべく、諸工場に同盟罷工を煽揚し、又は、之を搭載せる船舶を破壊せんとたくらんだ。陰謀が漏洩してワシントン政府の抗議に、關係大使館員は、それ／＼本國に召還せられたのであつた。

食料品の缺乏では、協商列國は、ドイツほど苦まなかつたけれども、一般人民は、等しく困憊して居つた。民間には戦に倦んで、心竊に平和を冀ひつゝある者も、少くはなかつた。尤もかゝる平和主義者の中にも、大體に於て二つの種類はあつた。僧侶、平和家、一部社會主義者等から成る感情的、又は、良心的の平和黨は、ドイツ人を以て衷心からの民主主義者であると考へ、此見地から戦争の停止を主張したが、銀行家や、野心政治家などで、己の富の擁護や、己の政治的功名心を充足せんとす不純な動機から出發した輩も、亦、とても、ドイツには勝つ見込はないと言ひふらした。前者に屬すと言ひつべき各國の社會民主黨員は、一九一五年九月、スイスのツィムマーワルドに集まつて、早くも、平和の宣言を發表したが、翌年四月末、更にキエントールに會し、交戦各國の勞働者に檄するに、同盟罷工し、各政府が軍費の要求に協賛を與ふるを拒み、納税を拒絶し、又は、革命を醸發して戦争をくひとむべきを以てした。イギリスでは、勞働黨の領袖スノーデン Bowden の如きは、頻に無勝利の平利を唱へ、ドイツをして彼が行ひし禍害を修理せしめ、再、之をくり返すことなかるべき旨の保證をさへ與へしむれば、こゝに足ると言つて、ローズベリー一派の徹底勝



利説に反対したが、フランスと、ロシアとでは、上記兩種の平和主義者は、殊に活躍して居た。これ、亦、ドイツの敗北主義 Defeatism の鼓吹に、その好ずる機会を提供したのであつた。

イギリスでは、ドイツからの擾亂の手は、アイルランドに入り、一九一六年春の叛亂とはなつたが、ロンドン政府の時を移さず、之を討伐したため、幸にして早く之を消し止むることが出来た。が、ドイツの黄金と敗北主義の福音との、最、其魔力を逞うしたのは、大陸の諸敵國で、其き、目は、殊に一九一七年に於て著しく顯れて來た。同年秋、ゲルマン同盟軍の攻勢に、イタリア軍の一とたまりもなく潰走して、その東北邊境の沃野を敵に委するに至りしは、敗北主義の魔手のイタリア陸軍に及んだからだつた。同時にフランスでは、内相、前首相、若干兩院議員等を連累とせる一大賣國事件が抉發せられ、其ため、秋の僅に二ヶ月あまりの間に、内閣の倒るゝもの二度、十一月十六日、徹底勝利主義の老クレマンソーの、敗北主義の妖氣を一掃し、奮うて起つに及び、年の末を以て人間力の枯渇に垂んたりしフランスは、再、立ちなほして其陣容を整ふることになつた。

ドイツの政界では、保守黨と國民自由黨とは、飽くまでも戰場に於ける勝利により、敵をして和を乞はしめんとす主戦論を唱道したが、獨立社會黨は、之に對して戦争の繼續に反対し、又、ポーランドの再分割説に賛同しなかつた。中央黨と、急進派と、及、多數社會黨とによりて支持されて居た政府は、その中間の道を行き、出來得るならば、自ら講和の機を作らんことを欲した。合衆國

の參戰と共に、一般の政情の、益、ドイツに不利となるや、ドイツの帝國議會は、一九一七年七月十九日、平和の基礎として無賠償、無併合の原則を採るべき旨を決議したが、ベルリン政府、亦、之に賛意を表するを吝まなかつた。かくて、彼は、敵の大團體中の一、二と單獨講和して、彼自らに對する壓迫を軽減すべく、或は、その占領地、及、アルサス・ロレーン二州の恢復を條件とし、スイスを通じてフランスを動かさんとし、又、或は、オーストリアの新帝をして彼のフランスに於ける姻戚に親書を裁し、同じく二州の提供によりてフランスを説かしめんとしたりした。膠州灣を日本に交附し、支那に於けるドイツの鐵道、及、私有財産に付ては、賠償を得べき條件で日本とも妥協せん事を試みた。オーストリアは、一九一七年八月には、イタリアに對して割地の議を提した。是より先、協商三國は、大戰勃發勿々の九月五日を以てロンドンに條約を結び、彼等の友國に議ることなくして、敵國と恣に、單獨、講和を締結するが如き事なかるべきを約し、後、日本、及、イタリア、亦、之に加入した。が、これ等の五國の中、ドイツが單獨講和の目的で誘致すべく、最も好都合なる地位に立ちしはロシアであつた。兩國の地理上、歴史上の密接なる關係は、ドイツに乗せしむるの間隙を與ふるものであつた。そこで、ドイツは、ストックホルムに於て、屢、ロシアの當局者と密商したが、その目的の達せられざるに、革命は、ロシアに爆發し、その結果、兩國は、結局、平和を結ぶこととはなつたのである。



## 第四十七章 ロシアの大革命

## 二六五 戦時に於けるロシアの宮中、府中、並に國會

ロシアとドイツとは、終に、干戈を交ゆるには至つたけれども、ロシアに於けるドイツ的の分子は、元來、極めて濃厚なるものであつた。バルト沿海地方のドイツ貴族を初め、すべてドイツ民族から流れ出たものは、ロシアの政治界、經濟界と言はず、總じて其上流に於て中々に大なる勢力を占めて居つた。更に之に加ふるに、ベルリンとペトログラードとの兩宮廷間には、傳統的な深き關係が結ばれて居つたから、ロシアの内房を中心とするドイツ最員の感化力は、容易に其手を府中にまでも伸ぶることを得たのである。これ等の貴族者流は、高僧と相提携して、多くは、反動思想を代表するものだつたことは、言ふ迄もない。世界戦争勃發の當時、國會に於て、純政府黨を以て立ちし政黨は、十月十七日の詔勅に賛成せず、飽く迄も、君主獨裁制を主張したる右黨の諸政派だつたが、彼等は、實に、衷心に於て、概ねドイツに同情を有するものだつたのである。

けれども、大戰に際しては、一致して政府を輔けた國會も、一九一五年八月、彼が陸軍の、敵の鋭き進撃に潰ゆるを見ては、最早、我慢が仕切れなくなり、極右黨と、及、労働黨、並に社會黨を以て成る極左黨とを除いた一切の進歩派は、大同團結して壓倒的の多數を占め、以て政府に對する

監視を嚴にすることはなつた。かくして新に國會に成立したる民黨の中堅となつたるは、立憲民主黨と十月黨との兩大政黨で、彼等は、協商列國との結合を支持結束し、最後の勝利の我が手に歸するまでは、どこまでも、敵と戦はざるべからざるを固執し、同時に、之がために必須なる民主的の諸改革をロシアの内政上に行はんと望んだから、政治思想に於ては反動的であり、外交上では、ドイツ最員である宮中、府中の諸分子は、既にして此時からして、明白に、多少に拘らず、民主的であり、又、イギリス、フランスとの協商に忠實ならんとするものである民黨と相睨み合ふことになつたのである。

ロシアの政局は、これから刻一刻、切迫して來た。饒舌にして反抗的な國會は、屢、休會を命ぜられた。一九一六年の二月から一閏年の間に、内閣は三度までも更迭した。反動黨と民主黨、ドイツ最員と協商最員との陰然、陽然の抗争は、日を追うて募つて來た。が、フランス大革命時代のルイ十六世をそのまゝの性格者たるツァールの下に在ては、ドイツを里方とする皇后を中心とする反動的、ドイツ親和的の運動の次第にその威力を逞うし來るのも、蓋し止むを得ざる所であつた。大戰初期の陸軍大臣は、敵國に有利なる態度を採つたが、總じてロシアの陸軍部内には、賣國的行爲を演じたもの、數は、尠くはなかつた(該陸相は、後、縛に就いた)。内務大臣は、ストックホルムに出張してドイツと單獨講和せんことをたくらんだ。要路にあるものに、此類のドイツ最員の運動



の行はれつゝあることは、頻々として傳へられて來たが、同時に、當局者の民間の各種運動に對する壓迫の手が加はつて來た。

されど、民黨をして大に政府攻撃の聲を擧げしむべき機會となつたものは、ポーランドの問題であつた。一九一六年十一月五日、ドイツと二元帝國とは、彼等のロシアから略したるポーランドの部分を以て、獨立の立憲君主國となすべき旨をワルシャツに布告し、ポーランドの軍隊を編制して、彼等自らの用に供せんとたくらんだ。こゝに於て、立憲民黨は、ミリュューコフ教授をその代辯者とし、奮起して首相の無能と優柔との敵の致す所となるを責めて之を仆し、尙も政府に對する追窮の手を弛めずして、彼が敵に對する戰意の鈍りたるを詰り、年の末、國會に於て終に一の決議を通過し、若干の暗黒なる勢力の今や國民の精力を麻痺せしめ、政府諸官省を糜爛しつゝある旨を述べ、政府に警告を加ふるに至つた。暗黒の勢力とは、皇后を取りまく反動派、ドイツ派のことであつた。ついで、ロシア政府は、ポーランドの問題、其他に關し、協商列國と豫め協調することとなり、翌春二月一日、イギリス、フランス、イタリアの諸大臣をベトログラードに會して、戰勝の曉、全ポーランドをロシアに附し、且、その西境を定むることの自由を之に與ふる事、アルサス、ローレインの二州と、ザール炭田とをフランスに與へ、ラインの左岸をば中立の緩衝國として、政治上、及、經濟上、ドイツから分離し、ドイツが平和條約の規定を履行し了るまで、フランス軍をして占

領せしむることを密約するに至つたが、されど、此時に於ては、帝政ロシアの運命は、最早、旦夕に迫りつゝあつたのである。

## 二六六　ロマノフ帝業の没落

ベルリンから發せられた敗北主義の宣傳は、ロシアでは、二つの目標に向て行つた。一は、ツァーリ帝國内に於ける諸の異民族に民族主義の謀叛心を吹き込み、之をしてベトログラードから離畔せしめんとすることだつたし、又、今一つは、同じく政府反對を標榜しながら、有産階級の團體たる進歩的の大同團結と事を共にせんことを餘り喜ばなかつた社會黨だつた。併しながら、此際、ドイツの冀ふ所は、かゝる威嚇の手段をだしにして、出來得べくむば、ロシアを協商三國の仲間から脱退せしめ、之と單獨講和せんことであつた。若し、又、此目的にして俄に成功を難んずるの事情があつたなら、責めては、内訌によりて彼を疲弊せしめ、彼が與國に對する支持をば、全然、無みする事であつた。帝政のロシアを顛覆すると云ふ様なことは、斷じて、彼自らの利益ではなかつた。反動的なるドイツは、革命して民主的たらんとするのロシアとは、到底、永く調和し兩立し得べくもないからである。然るに、ロシアの小民族をして解放運動に従事せしめてふドイツの努力は、俄に成功しなかつたが、社會黨、革命黨の煽動の方は、相當に發展して來た。ロシア社會民



主黨の領袖ブレハノフは、ドイツにして敗北せば、革命はその國に起り、ひいてその波動は、ロシアにまでも及んで、革命黨の希望は、居ながらにして實現せらるゝに至らんをば、大戰の初から先見して居たから、寧ろドイツの帝國主義の倒壊を望んで居たが、破綻の緒はドイツならで、却て、彼自らの祖國から始まつたのであつた。

クリム戦争に、一八七八年の役に、將た日露戦争に、常に軍國多事の秋を以て大なる發達を遂ぐるが例であつたロシアの革命運動には、世界戦争は、決してその取りのけではなかつた。否、一九〇五年の血腥き日曜日を以て、その最近に於ける出發點とすとも言ひつべき彼が民主的の運動は、世界戦争に於て獨裁制度に對するその恰適の決勝的機會を握つたものであつたのである。大戰は、過去の何れの戦役にも見ざりしほどに、むき出しに、ロシアの國家社會に蟠れるあらゆる傳統的の弊害をさらけ出した。ロシアの政治機關のいかに紊れて居るか、その綱紀のいかに弛んで居るかを展示した。從て、宮廷、對、民黨の關係の漸く緊張し來りし一九一七年の初に於て、心ある者は、革命の爆發の近く免れがたきを期しつゝあつたのである。社會黨の煽動による労働者の同盟罷工騒ぎは、この頃から頻繁になつて來て、フランス大革命の當時と同じく、麵包騒動は、終に革命の狼火として撃ち揚げられたが、三月八日、かくの如くにして食料問題のために、帝都が騒然たるをば餘所にして、帝は、のんき千萬にも、戦地に向て發轍したのであつた。彼に忠なりし老兵の多くの

陣歿して、少壯の士官によりて率ゐられたる軍隊が、今は寧ろ心をミリュートコフ等の民黨に寄するに至りしことは、御坊ちやんたる彼のあづかり知らざる所であつた。かくて一揆と軍隊とが結合し、而してその後ろには國會が控へて居たので、十一日、帝は、彼が十八番の休會令を發して之を壓迫せんことを試みたが、國會は、之に服従せず、進歩派大同團結を以て準備政府を組織し、皇帝を歸都の途に要して其位を辭せしめた。一九一三年を以て三百年の祝典を擧げたロマノフ家の帝業は、かくの如くにして、これから三年あまりを生き延びたまゝ没落してしまつた。

此平穩なる革命が、ロシアの與國たるイギリスによつてたくらまれたものであつたと云ふ事は、奇しき運命と言ふべきである。イギリスのベトログラード駐劄大使ブキアンは、輓近、ロシアの内政上に大なる勢力を占むる様になつた。立憲民主黨や十月黨は、皆、彼の支持する所となつて居たので、從て、彼を以て一の代表者となすなる協商の與國を憚る宮廷内の反動的分子は、皇帝、皇后を要してドイツと和せん事を欲するに至つた。かゝる不逞なるたくらみの確實なる證據が與國の手に握られたので、ブキアンは、時を遷さず、民黨を使喚してロマノフ家を追はしめたのであつた。

## 二六七 難局に立ちたる準備政府

### (一) 勞兵會の勃興



準備政府は、社會黨の代表者をも加へ、主として進歩派大同團結の領袖を以て組織されたのであつた。彼等の中には、政府、及、官僚に對する今回の挑戰が、無能なる皇帝の排斥を期するに在つて、必しも、ロマノフ王朝を倒さんことをその目的としたるに非ざりしものも尠くはなかつた。が、此上は、兎も角も、大刷新を斷行せざるべからざりしこととて、三月十六日、急ぎ、その政綱とする所を布告し、直に一切の國事犯人に對して大赦を令すること、言論、印刷、結社、同盟罷工の自由を認むること、すべての社會的、宗教的、及、國民的制限を廢すること、普通選舉によりて選出せらるべき立憲會議を召集すべく、即刻、準備に着手することを約束した。かくて政府は一面に於ては、内政上の改革を行ひながら、他の一面に於ては、帝政ロシアの諸外國と結んだ條約を守つて、どこまでも戰爭を繼續し、以て、最後の勝利によりて協商列強の兼ねて彼に許せし獲物を取り入れようと欲した。即、彼が外交上の政略は、帝國主義的目的を以て併合を行はんとするにあつたが、然るに、その間に、別種の勢力が興つて來て、終には政府をも凌ぐ様になつた。それは帝政倒壞の前夕に、一九〇五年十月の舊制に倣ひ、労働者と兵士とで組織された労働會 Soviet なるもので、革命の成功に一種の自覺と力とを鼓吹された彼は、彼がこれまでの主治階級に對する反感と憎惡心とから、革命原理の理想的徹底を求め、すべての階級や、稱號を廢すること、地方制度に十全の改革を行ふこと、及、御料地、並に教會領土を沒收することを主張し、六月の末に至りては、彼

自らに全權力の寄與を求めて、有名無實なる國會を廢すべきことの決議までもした。労働會は、今は、政府以外の、否、政府以上の政府だつたのである。戰爭を以て、資本家有産階級の利己的動機の產物にして、彼の關する所に非ずとしたる労働會は、戰爭目的なるもの、苟も攻勢的たるべからざるを議決し、平和は、無賠償、無併合の主義に據るべきものであると咆吼した。

労働會の此跋扈のため、併合主義の外相ミリューコフ等は、五月、遂に其職を辭するの止むなきに至り、準備政府の社會主義的色彩は、一層に濃厚になつた。猛烈なる革命黨の、労働會をして益、激越ならしむべく煽動しつゝ、ありしに拘らず、宋襄的なる政府には、強力を以て、此禍を防止すべきだけの決心がなかつた。ドイツの高等統帥府は、軍費の賠償や、クルランド、リトソニア割讓の要求をば撤し、ダルダネルスの自由通航、ロシアのコンスタンチノブル放棄、自由のポーランド建國、並に改訂を保留しての一九一四年の舊國境回復等を條件として、六月初、ロシアに向て休戦を申込みんことを試み、準備政府は、終に之に應じなかつたが、併しながら、政府に對する國民の信用をして地に落ちしむべく、反政府黨が、戦線に、銃後に、到る處に振りまき歩いた敗北主義の宣傳のため、及、三月十七日に、労働會が政府には斷りなしに發した軍令第一號で以て、兵士の將校に對する服従の義務が撤せられたため、爾來、ロシア軍の軍紀は、全く弛廢し、戦線の部隊は、事實上、概ね敵と休戦しつゝあつたのである。七月に至り、社會黨以外の大員、悉く退き、政府は、



今は、全く社會黨員を以て組織されて、勝利による平和を贏ち得べく奮闘し、命を戦線の將士に傳へ、之をして、士氣を鼓して攻勢を採らしめんとしたが、到底、狂瀾を既倒に回すこと能はず、之がため、却て、政府自らの地位を弱め、猝猛なる反對黨をして、大事を決行せしむるの機を促したのであつた。

### (二) 列強の對ロシア策

ロマノフ家の没落は、多少に拘らず、ドイツの希望を通り越したものではあつたが、メルリン政府としては、新なるベトログラド政府の屈して彼と單獨講和し、以て戦局の外に立つに至らん迄は、彼が東隣の革命黨と民族黨とに對する煽動を止めることは出来なかつた。而して革命勃發の後には、ロシアの諸小民族に對する彼が解放の宣傳は、著しく奏功して、ユダヤ人、フィンランド、バルト沿海地方、ウクライナ、カザカス等の民族は、陸續として、分化なり、分立なりの旗を翻し初めた。此勢の發展は、又、彼自らの利益からも、ドイツの最歡迎する所であつた。統一ロシアの存續を以て、協商列國に與ふるに彼等が經濟上の勢力範圍を以てするものに過ぎぬと考へたドイツは、出来るだけロシアを支裂せしめ、新に出来た小國と通商條約を結んで、之をば、悉くドイツの利益圏内に收容せんことを欲したのであつた。協商列強の中でも、ロシアに對する最大の債權國たるフランスは、彼が與國の、統一したる中央集權的の國家として留まらんことを冀ふの情に堪へなかつ

たが、イギリスは、之に反し、ドイツと同じく、ロシアの寧ろ小邦分立の状態に陥らんことを望んだ。これ、海上貿易の利に依頼する彼の、之によりてアジア方面に、より自由なる行動を執ることが出来るからである。一九一九年十一月十七日、イギリスのロイド・ジョージ首相の國會に述べた演説は、イギリスは、大なるロシアを望まずと言つたヂスレーリの對ロシア政策を回想せしむるものであつた。

## 二六八 ボリシェウイキー、遂に天下を取る

### (一) ロシアに於ける社會革命黨、並に、社會民主黨各派

翻て、ロシアの内政いかにと見るに、三月に於ける平和革命後、發布された大赦の令により、シベリアの流竄地なり、パリ、ロンドン、ジュネーブ、及、合衆國等の亡命地なりに、永く配所の月を眺め暮しつゝあつた革命黨員は、一、二の例外を除いては、今は大手を振つて郷里に歸參することが出来る様になつたので、その唱道する學說、理論の點から言つたら、大體に於て社會革命黨と社會民主黨との二分野に分たれると言つて然るべき革命ロシアの天地には、それ／＼の理想を實現すべき所以の手段方法に關しては、混然、雜然たる幾多の小黨派の對立を見るに至つたのであつた。世界戦争の當時に於けるこれ等の二大黨派は、少くとも、左の諸分派に分れた。



社會革命黨中の右翼を代表するものは、刻下の戦争そのものに對する彼等の態度として、協商列國が終局の勝利を制し、プロシアの軍國主義を破砕して、永續的な民主的の平和を締結するに至らんまで、ロシアの飽くまでも、その軍事行動を持續せざるべからざるを主張した。此輩は、内政上に關しては、有産階級中の左翼諸派と結びて事を爲さんことを唱へた。立憲會議の召集は、彼等が主たる目的であつた。社會革命黨の中央派も、亦、一日も早く、立憲會議を召集し、之をして政局を指導せしむべきを求むるの點に於て右派と同意見だつたが、戦争の問題に關しては、中央派そのもの、間にも、既にして少數派、多數派の分裂あり、前者は、寧ろ右派と行動を共にせんことを欲したるに、後者は、キエンタールの決議を其まゝに、目的を達せんがために採らるべき手段のいかに頓着せず、即刻、全局の平和を締結せざるべからずと熱説した。社會革命黨中、即刻平和説の實現に對し、最も徹底的の態度を示したりしは、その左派であつた。

ロシアの社會革命黨が執つた恐嚇主義の戰術の、さしたる效果なしに終つたことは、マルタスの唯物史觀の理論に新なる證據を提供するばかりだつた様で、前世紀の九十年代の末、フランスにはサンヂカリスト、ドイツには、修正論者の勃興しつゝありし頃から、ロシアでも、亦、政治的の革命を排して、寧ろ全力を經濟上、社會上の革命に傾注せんとす社會民主黨が起つて來たのであつた。この仲間にも、三つの分派を區別することが出来る。ブレハノフを領袖と仰ぐ統一派 Edinstvo は、

外交上では、協商列國との結盟を持續してドイツを撃滅すべしてふ主戰論に固執したし、又、内政上では、有産階級の諸政黨と相提携すること、立憲會議を召集すること、並に、強固なる統一的政治府を建設することを主張した。

ロシア社會民主黨中の残つた集團は、一九〇三年七月、及、八月に、ブリュッセル、及、ロンドンに開かれた彼等同志の大會で以て二つに分れた。其中の少數派、即、メンシエウキー Menshevik は、地方分權を説き、しばらく有産階級と事を共にすべきを論じたるに、レーニンによりて率ゐられたる多數派、即、ボリシエウキー Bolshevik は、之に反して、中央集權を説き、帝政顛覆のため有産階級と提携することの、却て資本階級の勢力を鞏固にする所以の劣策たるを高調した。メンシエウキーは、更に三つの小分派に分れた。一九〇六年の革命さわぎの當時、社會民主黨中のこれ等の少數派と多數派とを妥協せしめてふ企も、試みられたが、その效がなかつた。

#### (二) ボリシエウキーのクーデター

これ等の革命黨諸派中、最も不敵にして、最も實行的の手腕を有するものはボリシエウキーであつた。ロマノフ王朝が平和の裡に倒れて、勞兵會の所在に設立せらるゝに及び、各革命黨は、期せずして此勞兵會に彼等の勢力を伸張せんことを競うたが、有力なる指導者の下に統率せられ、極めて少數ながら、熱烈の意氣を以て固まつた同志の堅固なる團結で出來たボリシエウキーは、革命の



初期に、殆んどロシアの何人からも認められてなかつたほどの境遇から出發して、倏忽の間に政界の一大實力を發展した。大戰の勃發する、領袖レーニンは、ジュネーブで機關雜誌を發行して纔に彼が胸中の磊塊を披瀝して居たが、一九一四年十月の論文では、彼がロシア社會民主黨員としての立場から、寧ろロシアの敗北せんことを冀つた。彼は、之によつてロシアをば、その奴隸的の隷従から解放し、帝政の羈絆から救出するに至るべき所謂、內的勝利の機を進むるに至らんを期したからである。ツィムマーワルド、及、キエンタールに於ける一般平和の勸説も、亦、實に、彼の周旋に負ふこと尠からざるものであつた。

レーニンの意圖は、彼が同志と共にスウイスを發して歸國せんとするに當り、一九一七年三月、述べたもの、中に明である。彼は、政權の衝に當りたらんに際して、とりあへず、彼の同志の行はんとする四ヶ條の綱領を説き、(一)即刻、すべての交戦國に向つて平和を提議すること。(二)平和の條件としては、即時、すべての植民地と、及、一切の權利を享受することを許されざる、壓制の下にあるすべての人民とを解放することを提示すべきこと。(三)大ロシア人の壓制の下にあるすべての人民をば、未練なく解放すべきこと。(四)されど、ドイツ帝國は勿論、ドイツの有産階級的共和國も、乃至は、イギリス、竝に、フランスの資本主義的政府も、皆、彼等と同一の條件を容れんことを肯んぜざるべきを信するが故に、ドイツの有産階級その他のものに對し、革命戦を行はざるべ

からざることを明にして居る。

かゝれば、立憲民主黨と、十月黨とを中堅とする國會を後援として出來上つた三月の有産階級的政府も、將た、七月を以て改造された社會革命黨右派、及、メンシエウキの聯立政府も、皆、固よりポリシエウキの憚る能はざる所であつた。前者は、その帝國主義的、併合主義的たる點に於て。而して、又、後者は、民族の自決權を基礎とし、一切の併合も、賠償もなしに締結せらるべき平和を主張する段は、よしとしても、依然として、主戰主義の俗論を固執して止まざるの點に於て。ポリシエウキは、すべてこれ等の不徹底なる主張に安住すること能はず、いかなる代價を投じてなりとも、即刻、平和を克復せざるべからずといきまいた。彼等は、直に社會的、經濟的の大革命を實現すべく、現行の一切の政治的、社會的秩序を覆して、之に代るに、無産階級に一切の生産財を附し、且、之を管理せしむる新しき國家組織を以てせんことを欲したし、戦争に關しては、資本家によつて始められた帝國主義的の掠奪戦を即刻、閉止し、直に諸敵國と講和の談判を開かんことを求めたし、更に、これ等大目的の遂行を妨ぐるなる現政府を顛覆すべく、有産階級との提携を排し、己と同じく帝國主義、及、資本主義の不倶戴天の敵を以て自ら居る社會革命黨の左派と握手せんとした。

レーニンは、果敢なるトロツキを彼の同志に回心せしめ、一九一七年七月、一度、事を擧げて



成らなかつたが、之に怯まず、巧妙なる方法を以て首都の軍隊 及、労働者の間に彼の主張を宣傳し、機、熟すると見て取るや、十一月七日、俄に起てベトログラードを占領し、一舉にして主戦的の政府を覆してしまつた。新政府は、ボリシエウキー、及、社會革命黨左派の代表者によつて組織された。ついで月の末、立憲會議の選舉、行はれ、此際、ボリシエウキーは、極力、干渉を試みたが、ベトログラードとモスクワとの以外では、勝利は、社會革命黨、殊にその中央派の掌裡に歸したので、己の意の如くならざるべき該會議の存在を不便としたるボリシエウキーは、之を以て、最早、有権者の意志を代表するものに非すと強辯して、斷然、之に解散を命じ、彼の徒の飽く迄も政局の指導者たらんとするの決意を示した。

## 二六九 無産階級の獨裁政治

ボリシエウキーの天下を乗り取るや、彼は、直に、その宿年の抱負たる社會的革命的實現に着手し、又、一面に於ては、四國同盟に向て平和恢復の談判を開始した。

「ロシア社會主義聯合勞兵農共和國」の新憲法全九十個條は、一九一八年七月十日、第五回全ロシア勞兵農大會を通過して發布された。該憲法は、その劈頭に労働者權利宣言なるものを掲げ、既にして之が歴史上に類例なきものたるを示した。曰、第五回全ロシア勞兵農大會は、人の他人を搾取

し、社會に嚴然たる階級を區劃することを禁止し、容赦なく搾取者を撲滅し、社會の社會主義的編制を實現し、社會主義を以て萬國を制せんことを期し、先づ土地、山林、礦物、及、河川等の一切の天然資源の私有を禁じ、舉げて之を國有に移すことにする。工場、鑛山、鐵道、及、生産運輸のその他の機關も、之を國有とすることの第一着歩として、労働者の管理に委することにする。舊帝政々府、地主、並に、有産階級の起せし一切の公債を破棄し、すべての銀行を國有とする。社會の寄生的分子を亡し、その經濟生活を整理すべく、國民のすべてに對して労働を義務的たらしめる。労働團體の手に權力を確持し、之が、再、搾取者の褻奪する所となるを防ぐべく、労働者、及、農民を武装して、社會主義の赤軍を編制し、全く所有階級の武装を解除せしめる。資本主義と帝國主義との桎梏から脱却すべく、祕密條約を破却し、又、人民自決の權利を基礎として、無併合、無賠償の民主的平和をば、革命手段により、獲得せんことを欲する。アジアや、一般植民地や、小國巨億の労働者を奴隸の地位に陥れて、若干國搾取者の懷を肥さんとすなる有産文明の野蠻なる政策を唾棄する。資本家に對する無産者の此の如き決闘の重大時期に際し、資本家に與ふるに權力の地位を以てするが如きことあるべきではない。全權力は、舉げて之を労働團體、並に、勞兵農代表者の專握に委ねなければならぬ云々。

之を要するに、労働者權利宣言の主張する所は、人間の一切の活動を社會化することである。此



目的を貫徹すべく、一時、無産者のみによりて獨裁政治を行はんとするにある。憲法の以下の條章は、之を敷衍し、其細目を認めただけのものに過ぎなかつた。共産ロシアの當局者は、彼が新政府を以て、資本主義のヨーロッパとは、到底、兩立し得ざるものであると考へて居たから、有産階級に向ては、徹底的挑戰の態度を採つたのであつた。立憲的の運動や、微溫的な改革説や、妥協的平和觀は、彼の斥けて止まざる所であつた。有産階級の政治に於て誠意を認むること能はざりし彼は、資本制度の破壊によらずしては、真正の平和、斷じて望みがたしとしたのであつた。彼は、かくの如くにして、ソウラト(勞兵農會)なる制度をば、彼が新社會の基礎と定め、右に對する選舉、及、被選舉の資格をば、十八歳以上の男女にして、生産的に社會に有用なる仕事に従事し、以て口を糊するもの、前者をしてその業に従事せしめんがために家事を營むもの、工、商、農業に従ふすべての勞働者、及、被傭人、己の利得のために人を使役するものにはあらざる農民、竝に、カザック農民、陸海軍人、前項に屬するものにして勞働力を失ひたるもの等に與ふることにし、すべて己の利益のために他人を使役し、又は、勞働せずして利子に寄食する多くのものをば、公民の仲間から除外した。ポリシエウイキ一の所謂、勞働とは、筋肉勞働のことである。彼等は、すべての富を以て筋肉的勞力によりて成つたるもので、所謂、勞力の價は、一に之がために費されたる時間に比例するものであるとしたから、筋肉勞働以上に、生活のいかなる條件から得られた價格でも、之を認むる

ことを肯んじないのである。

一六八九年のイギリス、一七七六年のアメリカ、一七八九年のフランスの革命は、皆、共に、新に興つた無特權の中産階級を以て、絶對君主と、貴族とに迫つた政治上の革命に非ざるはなかつたが、一九一七年に於けるロシアのそれは、これ等の舊套を踏襲せざる、全くこれまでにない新なる試みであつた。輓近に至り、各國に於ける社會黨の長足の發達を遂ぐるにつれて、イギリスや、フランスや、イタリアでは、社會黨員にして入閣し、若くは、内閣を組織したものの、尠くはなかつたが、彼等は、皆、融通のきかない階級闘争説を排するものにあらざるはなかつた。社會は、到底、互に兩立せず、調和せざる二つの階級に劃然、分れて居るものであると云ふ様な事實を認むることの出来ない連中であつた。然るに、ポリシエウイキ一は、彼等の祖師、マルクスの、社會主義の政治に於て行はれざるべからずとなせし、完全なる無産階級主義、非議院主義、竝に、社會化主義を力行しようとしたのである。

## 二七〇 東ヨーロッパに於ける平和の克復

(一) ロシア、四國同盟と單獨講和す

ポリシエウイキ一の政柄を握るや、彼は、直に、その持説の一つたる即刻平和の締結を實現すべく



着手した。交戦列國に向て三ヶ月の休戦を申込み、且、民族自決の主義に基づく所の無併合、無賠償の民主的平和を締結するの議を提せんとす決議は、已に十一月十日の第二回全ロシア勞兵農大會をも通過して居たので、月の下旬に至り、外務委員トロッキは、ベトログラード駐劄の各協商國大使、並に、現に彼自らと交戦中なる四國同盟に其旨を申入れたる所、ロシアの與國は、直に之に答へなかつた。そこでボリシエウキ政府は、ロシアの前政府の、協商列國と結んだ密約をスツバ抜き、ロシアの國家社會のいかに危険なる外交上のカラクリの中に捲き込まれて居るかを示して、彼の國民の平和に對する要求を増進せしめようとした。

四國同盟の盟主たるドイツは、ロシアの休戦提議に對して、執るべき態度に關し、消極、積極の二つの陣屋に分れた。高等統帥部は、革命によつて已に精神的に頹陶し、事實に於て闘争を失ひ了つたるロシアの、最早、畏るゝに足らざるを見て、暫く之を現状のまゝに放棄し、西方の敵を屠つたる後、徐に東して之が侵略に従ふを利なりと見たるに、議會の多數黨によつて支持された政府當局者は、かゝる樂觀説を採らず、ドイツは、今や、一年前の危機に髣髴たる大なる危機に臨みつゝあるから、此際、ロシアとの友誼を恢復するは必須であるとし、敵を侮りて前回の悔をくり返すが如きことあるべからざるを主張した。政府は、遂に積極主義を以てロシアと折衝することに決し、三與國と議りてその趣を回答に及んだが、然るに、ロシアの與國たる協商列國は、依然として正式

の回答を與ふることをしなかつたので、直に全局の平和を實現せんことを冀つたトロッキは、十月の初を以て、一週間の期限を附した最後通牒を協商列國につきつけて、彼等の平和條件なるものを知らんことを求めた。所が、列國は、彼等の未だボリシエウキ政府なるものを承認し居らざるを理由として之に答へなかつたので、ボリシエウキは、協商列國を以て彼の密約に於て剔抉された様な帝國的的目的によつて戦ひつゝあるものであるとし、今は、斷然、之と絶つて、四國と單獨講和の談判を開始するの外なきを其人民に告げた。協商列國の此講和の要求に應じなかつたのは、止むを得なかつた。一年前、ドイツの講和提議の發せられた時から見れば、戦局は、何程か協商列國に有利なる開展を遂げては居るだらうけれども、協商列國の最前線に於ける地位は、まだくドイッの傲岸と併合慾とを制し得べきまでになつては居らぬ。かくて、大戦開始勿々の九月初旬に協商三國の間に結ばれた單獨不講和同盟は、ロシアの一角から破られ、十二月中旬、ロシアは、四國同盟と休戦條約に調印した。こは、明春一月十四日までを期限とし、その後は、七日の豫告なくば自動的に延長せらるべきを約するものであつた。

ドイッは、講和の根本條件として左の數則を定め、ブレスト・リトウスクに於て二十二日を以て談判を開始した。(一)ポーランド、リトワニア、クルランドに民族自決主義を適用すること。ロシア政府にして承認を與へんには、ドイッ、亦、フィンランド、ウクライナ、カザカス、及、シベリアの



獨立を認むること。(二)舊通商條約を今後三年間、繼續すること。(三)すべての戰時法規を撤すること。(四)捕虜の交換。(五)互に軍費の賠償を斷念すること、以上。東ヨーロッパに對する這般の政策は、已に一九一七年の春から、ドイツと彼の與國との間に話がつけられて居つたもので、ドイツの所謂、民族自決は、體の良い彼が保護權の擴張に過ぎなかつたのである。

講和談判の基礎的條件は、先づ、ロシア側から提出された。(一)戰時中、征服されたる土地を強制併合すべからざること。(二)戰時中、獨立を失つた人民に、その政治上の獨立を恢復すること。(三)大戰前、政治的獨立を得ざりし民族をして、人民投票によりて自決せしむること。(四)多くの民族の混住する地方では、特別法によりて、少數民族の權利に保護を與ふること。(五)賠償金を要求せざること。(六)第一條、乃至、第四條の精神によつて植民地の問題を處分すること、以上。これ、即、無賠償、無併合の主義を適用しようとするもので、四國側も、右の中、第六條のドイツ植民地に關しては、絶対に之が返還を求めたき旨を保留し、其すべてに同意を表した。然るに、占領地處分の具體案に移り、ロシアの全權の、(一)ロシアは、オーストリア・ハンガリア帝國、トルコ、及、ベルシアに於ける占領地より撤兵す。四國同盟も、亦、ポーランド、リトワニア、クルランド、及、其他のロシアの地方を撤すべし。(二)其等の地方の人民には、最も短期間内に、自決することを得しむべしとの二條を提して、彼が前記六原理の徹底を要求したる所、ドイツは、之が贊同に盡り出して來た。

協商列強の抗議も、最早、單獨講和談判の進捗を妨ぐる事が出来なかつた。平和の締結を以て殆ど彼自らの生命となせるポリシェウイキは、ドイツの條件の苛酷なるがために、談判の不調に歸するか、甘く行つても、屈辱的の平和を結ばざるべからざるに至らんを怖るゝこと切であつた。そこで、彼は、彼が是までの與國中、比較的自自由なる地位にあり、竊にドイツとロシアとの商議の破れせんことを冀ひつゝ、あるの合衆國を引いて、ドイツを牽制するの手段に利用せんとし、一面に於ては、突如、會議の地をストックホルムに遷さんことを申出づるに至つた。之に對抗すべく、ドイツのポリシェウイキ政府を苦むるの用に供せられしは、トロツキの所謂、「ドイツ全權の掌裡なるトランプの札たる」ウクライナであつた。ウクライナは、實に、既に前年の七月からベトログラード政府によつて自治を公認され、次で十一月を以て自ら獨立を宣言したりしものである。かくて一九一八年の初からの會議には、トロツキ自ら出陣して、ロシアのために、こゝを先途と力戦したが、同時に、此時から、ウクライナの全權も、亦、會議に列することを許さるゝに至り、ロシアをして解體せしめ、之をば新なるバルカン半島たらしめてふドイツの計畫は、着々として發展の歩みを進めたのである。

是に於てか、窮地に立てるのポリシェウイキは、縦斷的の民族運動に衝るべく、水平的なるポリ



シエウイズムを宣傳して、ロシアに於ける民族自決の運動をば、裏面から叩き潰さんとしたし、又、同時に、ドイツ國內に於て、無併合熱を煽揚せんことをも試みたが、同盟四國は、疑議の結果、二月九日、終にウクライナと講和を締結したので、常に傲然として會議に臨み、恰もロシアの戦敗の國たるを知らざるが如かりしポリシエウイキイは、その對手の致す所となれるを憤慨し、翌日、四國同盟との講和談判を断念すること、但し、軍隊に復員を命じ、戦争状態をして終熄せしむべきことを宣言するに至つた。ポリシエウイキイの意圖は、彼と四國同盟との關係をば、戦争にも平和にもあらざる曖昧の地位に置き、徐に彼が宣傳の利器によりて、敵の侵略主義を覆へさうと云ふにあつたので、軍部の併合論の制する所となりつゝありしドイツは、強硬の態度を採り、休戦の期限は、七日の後には、盡くると云ふ解釋によつて、二月十八日、全線の兵を進めてベトログラードに薄つたので、流石のポリシエウイキイ政府も、遂に屈して、四國同盟の一切の要求を容るゝの止むなきに至り、三月三日、講和條約は、ブレスト・リトウスクで以て調印された。

これにより、ロシアは、クルランド、リトワニア、及、ポーランドに對する主權を放棄し、東部アナトリア、バツム、及、カルスの地方を撤して之をトルコに返還し、二月九日の四國とウクライナとの和約を承認し、エストニア、リウオニア、フィンランド、及、オーランド群島を放棄し、尙、又、ベルシア、並に、アフガニスタンの不可侵を約することとなつた。一九〇四年のロシア、ドイ

ツの通商條約は回復された。間もなく、追加條約の規定により、ロシアは、更にゲオルギアの獨立に對するドイツの承認に同意を表すことになつたから、ロシアの之による損失は、日本帝國の全面積よりも遙に大なる三〇萬一千萬哩の版圖、全人口の三割二分、全鐵道の三分の一、鐵、及、鋼鐵總産額の七割三分、石炭産出額の八割九分、並に、旺なる各種の製造業であつた。ロシアの版圖は、ムスコウアの昔に縮まつてしまつた。宜なり、レーニンの之をチルシットの和約に比して屈辱を痛嘆したりしや。さりながら、レーニンの肚裡、既に已に復讐の計畫の立せられてない譯ではなかつた。彼は、三月五日を以て、その都を不安なる邊隅のフィンランド灣頭からモスクワに遷して後圖を策つた。

## (二) ロマニアの單獨講和

東ヨーロッパの長い戦線の南の端を支持し、彼自らの國土の殘片の上にてたてこもつて、三つの敵國と對峙しつゝありしは、ロマニアであつた。が、ロシア軍の休戦は、當然、彼をしてその戦線を保つこと能はざらしめ、其ため、一九一八年二月、ロマニア開戦の發頭者たりし協商最員の内閣は倒れて、平和主義の新内閣が組織せられ、ポリシエウイキイ政府と同一の外交方針に向ふこととはなつた。協商列國は、固より、之に對して妨害の運動を怠らなかつたから、内閣は、落ち付かなかつたが、四國同盟のウクライナと結び、ついで、ポリシエウイキイ政府と平和條約を締結するに及んで、



ロマニアは、三月の末に至り、勢、協商列國に背きて、その敵と握手するの止むなきに至つた。かくて五月十一日、ブカレストの平和條約は締結せられ、ロマニアは、一九一六年八月の密約による領土上の利益に見切りをつけ、ドブルージュをブルガリアに割譲し、その大炭田や、カルパチアの諸山路を放棄し、彼が鉅多の産穀、及、産油を四國同盟に授けて、僅に敵の、より以上の侵寇から逃れると云ふことになり、表面上、平和は、兎も角も、東ヨーロッパに克復されたのである。

## 二七一 ドイツの大「中歐」系統の完成

これ等の平和條約は、ロシアに對して大なる物質的の打撃を齎すものたりしは言ふまでもなかつた。ロシアは、之によつて、これまで經濟上の關係に於て、彼自らの有機的の部分をなしつゝあつた多くの主要なる地方を失つた。ウクライナは、その小麥を、ドン地方は金屬と石炭とを、カザカスは、又、石油を北部ロシアに供給し、その代りに多くの製造品を之に仰ぐことにし、かゝる補足的の相互補助によつて幸に健全なる發達を營むことを得たのであつたが、然るに、此等の地方は、一朝にしてゲルマン同盟の帝國政策の掌裡に落ちてしまつた。ロシアになくてならぬこれ等の食料品、及、原料は、陸續、ドイツに輸入されて、彼の新なる資源となり、彼をして今一層、戰爭を繼續延長するを得しむるに至つた。ドイツの第一番の心配であつた餓餓は、之によつて、少からず輕

減せられ得る様になつた。

ロシアの損失は、形而下ばかりではなかつた。彼は、新に四國同盟と云ふ友國を迎へ得たけれども、その最有力なる戦友と舊友とは、悉く彼から離れてしまつたから、彼が國際的地位は、甚しく弱くなつた。

ドイツが新に東ヨーロッパに得たる地位は、絶大なるものであつた。乞ふ、尙、これ等の事情に付て細説する所あらん。

### (一) ポーランドの獨立

ポーランドは、昔から朋黨比周の國として知られて居る。彼の國土の大と民衆の饒多とを以てして、しかも、遂に滅亡を免れざりしは、職として黨弊の外寇を防ぎきれなかつたからだつた。一九一七年には、此國に於て、少くとも、十八個の政黨を數ふことが出来、此等は、一九〇五年のロシアの改革以後に、公然、其結社を許さるゝに至つたものだが、其中、最も有力なるものは、主として有産階級、及、農民を代表する國民民主黨と、勞働階級を代表する社會民主黨との二つであつた。大戰の勃發するに及び、ポーランドにも、協商側によつて志を遂げんとするものと、ゲルマン同盟の力を藉りて目的を達せんとするものと、自ら二つの思潮が分れた。前者にも、之を詳に觀察すれば、フランス的解決を期するものと、ロシア的解決を期するものとの二つの要求があつた。フ



フランス的解決とは、ナポレオン以來に於けるフランスの國家、竝に社會との密ならぬ關係に鑑み、フランスの力に依頼せんとするもので、ウエルサイユ和約以後のポーランドの現状は、正にこゝに歸着したるものである。然るに國民民主黨は、ロシアの支配權の下に、ポーランドの内政上に於ける完全なる自治を得るに満足し、即ち、ロシア的解決こそ、ポーランドの當然の目標でなければならぬと主張したし、又、之に反して、社會民主黨その他のものは、親ユダヤ人主義を標榜し、ゲルマン同盟と結ばんことを欲した。ポーランド社會民主黨の此要求は、毎年三百萬の人口を増殖し、其ポーランドの西境によりて絶えず、ヨーロッパの中原を窺察しつゝあるやに思はるゝなる畏るべきロシアに對し、此カトリックの友邦をば、一の障壁たらしむべく、軍事的、政治的、竝に經濟的にゲルマン同盟と結合せしめんことを要とする西隣の兩大帝國の満足する所であつた。そこで、兩帝國は、この意味に於てポーランドの民心を收攬せんことを欲し、一九一六年、それまでペトログラード政府の許さなかつたポーランド大學をワルシャウに恢復することにし、年の秋には、ロシア領ポーランドの一王國たるを宣言し、ポーランド人を以て組織された準備政府を設けさせたし、ついで、一九一七年の秋からは、三人の攝政と、西ヨーロッパ流の内閣とを置きて、庶政を統べさせることにしたが、これより先、二月の初、ワルシャウの國會は、獨立のポーランド陸軍を編制するの案を否決したため、此新建國は、一方に於て、ゲルマンの兩帝國に向て、己が自主權を迫りながら、他の一方に

於ては、國家の獨立を擁護すべき強力を缺くの始末となつてしまつた。當時、ゲルマン同盟、少くとも、オーストリアの意圖は、ロシア領ポーランドをば、彼がガリチア領に併せたる一王國とし、オーストリア帝、之が王位を兼ねんことにあつたらしいが、ポーランド人の中には、獨立の要求が中々、熾烈だつたので、ドイツは、之を牽制すべくリトワニアとウクライナとをして獨立せしむるの策を講ずるに至つたのであつた。

## (二) バルト沿海地方、竝に、フィンランドに於けるドイツ

バルト沿海地方は、ドイツの騎士團體の中世に拓いた地方なので、ドイツ人は、今、尙、依然としてその上流の地位を占めて居る。此地方は、ロシアの防禦軍のために第一に荒されたが、ついでドイツ軍の侵入する所となり、更に、ロシア革命の後には、ドイツ貴族を中心とする反動黨とポリシェウイキーとの相争闘する所とはなつた。

ドイツに隣するクルランドの地方は、已にブレスト・リトウスクの談判最中に獨立を宣言して、リトワニア王國なるものを作り、翌夏、ウルテンベルヒの王室からその王を迎へることにした。

リトワニアの北に隣するリウオニア、及、エストニアの地方も、亦、平和條約により、ポリシェウイキー政府の軍隊の撤退を見るに至つたので、ドイツ軍は、直に之に代つた。右兩地方の代表者は、こゝに立憲君主を戴く一の聯合國を興すの議を定め、ドイツの使曠の下にプロシア王をその王と仰



ぎ、以て之をば、身上合同の關係によつてドイツ帝國と結びつけようとしたが、協商側は、之に邪魔を容るべく、エストニアをして彼が半身たるラトヴィアから獨立せしめた。

エストニアと相並びてロシアの窓を北方に扼するフィンランドは、永くスウェーデンに属したりし關係から、南方のマジール國と同じく、夙に白人大陸に於ける基督教社會をなし、新教に歸依して居つた。輓近に至つては、スウェーデンの後へにあるドイツの此地方に於ける勢力は、心的に物的に駸々として發達し、ドイツの學問は、フィンランド人の宗とする所となつたし、又、ドイツの貿易も増長して、一九一四年には、全輸入額の四割を占むるの有様とはなつた。ポリシェウイキーの革命に及び、フィンランドは、直に獨立を宣言し、ポリシェウイキー政府をして之を承認せしめたから、一九一八年三月七日、ドイツは、早速、ヘルシングフォルス政府とベルリンで和約を結び、赤軍の新政府を覆さんとするや、四月、兵を遣りて之を驅逐せしめ、ドイツ皇帝の妹婿を之に封するの計畫を立てた。

### (三) ドイツの大「中欧」系統の一陪星としてのスウェーデン

スウェーデンは、イギリスが中世に行うた大陸政策を近世に試み、一時は、バルト海を中心とする海洋帝國を築き上ぐるに成功したのであつたが、しかし、こは所詮は、その國民の實力不相應の大事業だつたので、之が繁榮も、英雄の一代の間に止まり、十八世紀には、彼がドイツの海岸に獲

得した領土は、逐次、奪回され、十九世紀の初のフィンランドの喪失を以て、再、もとの默阿彌に返つてしまつたのである。爾來、ドイツは、頻に平和的の浸漸を以て彼の勢力をスウェーデンに及ぼしたから、汎スラビズムと汎ゲルマニズムとは、又、この北ヨーロッパのバルカン半島でも相角逐したが、けれども、一九一四年に於ては、バルト海上に於けるロシアの軍略上の地位は、今は到底、ドイツの匹ではなかつた。人種的、宗教的、經濟的、政治的、文教的に、關係のドイツと極めて密なるのスウェーデンでは、クロバトキンの如くに、露骨なる政策をフィンランドに適用して、其バルト對岸の隣邦を威嚇する様な物騒なる人物を有するのロシアは、あまり好感を以て迎へられなかつた。大戰の初に於て、恐露熱のスウェーデンに逼かりし所以のものは、實に止むを得なかつたのである。

國民的政策を要求する聲の輓近に於て、大にスウェーデンに起りしは、一九〇五年のノルウェー分立の刺戟によるものであつた。タクラマカンの大探險家スウェン・ヘデン Sven Hedin は、ノルウェーのナンセン Nansen と駢んで、最も熱心に之を叫んだのであつた。大戰の破裂するに及び、彼は、ドイツを以てスウェーデン唯一の良友なりとし、ロシア患を高調し、ドイツの多くの學士の口吻をそのまゝに、東洋の野蠻から西洋文明を防禦すべく、ロシアを膺懲しなければならぬと熱説したのである。史家チエレン Kjellen 亦、之に同じて大にドイツの大を頌美した。總じてドイツ最良の言論は、ストックホルムの宮廷や、上流社會や、保守黨によつて代表され、彼等の最も急進的なる者は、



直に干戈を執てドイツを援けんとまでも唱へたし、穏和なる輩でも、十分に武備を修めて中立を持続せんことを求め、ロシアに對する不信の情は、下層階級、自由派、及、社會黨の間にも一般であつた。ドイツの無制限潜水艇政策を宣言するに及び、合衆國は、各中立國に向て、即時、之と斷交すべきを説いたが、ストックホルム政府は、彼がスカンデナヴィアの二友邦と同じく之に雷同しなかつた。かくの如くにして、スウェーデンのドイツに寄せたる同情ある態度は、終にはドイツをして、が秘密の通信のために、スウェーデンを利用するまでも至らしめたのであつた。ペトログラード彼に起つた革命は、その民主的波動をバルト彼岸の王國に及ぼし、一九一七年九月に於ける總選舉の民主黨の勝利に歸して、ストックホルム政府の多少に拘らず、これまでよりも、ドイツに不利なる政策を執るの止むなきに至りたりしに拘らず、兩國親交の事實は、大體に於て動かなかつた。

ゲルマンの兩帝國は、此の如くにして彼等が最も得意なる王朝的政略を以て、ポーランド、及、バルト沿海の四新建國を掩有せんとせるのみならず、亦、スウェーデンを自家藥籠中のものとして、バルト海をば、彼が大なる「中歐」系統の北方の内海たらしめんとした。かくて、バルト海から北極洋に至るまでの交通線を彼等の掌裡に收むるは、これ實に、ロシアを西ヨーロッパと連結せしむべき北方の門戸を杜絶すものに外ならなかつたのである。彼等がロシアに對するの封鎖は、此方面ばかりではなかつた。

(四) ウクライナ、及、ゲオルギアに於けるドイツ

ウクライナのロシアから獨立し、ドイツと和約を締結するに及び、ポリシェウィキは、彼の同志を煽動してキーエフ政府を顛覆せしめたので、ドイツは、一九一八年四月、ウクライナ民族の解放を名として之に干渉し、兵を入れてポリシェウィキを驅逐した。曩日の和約により、ドイツは、ウクライナから、廉價でその食料品なり、原料なりを買ひ入れ、ドイツ官吏の管理に委せられたる其鐵道によつて、自由にドイツなり、オーストリアなりに之を輸出することが出来ることになつた。そこで、ウクライナの農民は、之に憤慨して一揆を起したし、鐵道従業員も、亦、之が輸送に妨害を加ふべく同盟罷工したが、もとより、ドイツを逐ひ拂ふことが出来なかつた。

黒海東端のカヴカスの地方も、ロシアの革命以降、その駐屯軍は、解體し、ついで一時、ポリシェウィキの物興を以て、秩序が甚しく紊亂したので、ドイツは、又、兵をゲオルギアに上陸させ、ここにゲオルギアを初め、アゼルベージャン、及、アルメニアの三國を建つことにした。屢、コンスタンチノブルの問題で蹉跌したロシアは、世界戦争の前夕には、別してアルメニアに彼の力瘤を入れて、此山地からクルヂスタン、及、東アナトリアを經由し、以てアレクサンドレッタに到らんことを夢るに至つた。アルメニアは、實に、前アジアを東西に貫徹する交通線上の要衝に位して居るから、ロシアにして、一度、之に占據せんか、彼が軍略上に於ける地位のいかに堅固を加ふべき



や測るべからざる所であつた。然るに、バルカンに於けるドイツの勝利と、ブレスト・リトウスク條約とは、黒海をして大なる「中歐」系統の今一つの内海たらしめ、ボスフォルスと、カザカスとの南下の二つの關門は、全く塞がれてしまつた。一九一五年、ドイツの一議員ナウマンは、西ヨーロッパの記者の所謂、汎ゲルマニズムをば、「中歐」系統なるものを以て現はし、之をばドイツの目標として掲示したが、この膨脹的理想は、今や、正に遺憾なく完成せられたるやに思はれた。轉じて、ロシアの内部を見るに、ドイツとの平和は、更に新なる波瀾を喚起したのであつた。

## 二七二

### ボリシエウイキーの平和主義と、社會

#### 革命黨左派の主戰主義との衝突

ボリシエウイキーが大なる犠牲、大なる屈辱を忍んでまでも、平和に戀々たりしは、平和によりて十分に革命の目的を遂達し、之を出發點として、世界革命の實現に徹底せんがためであつた。然るに、彼は、此點に於て、はしなくも、社會革命黨の左派と衝突した。社會革命黨の左派は、十一月の革命以來、ボリシエウイキーと相提携し、人民委員會の中では、農務委員を初め七個の席を彼等の一手に占取したし、又、全ロシア中央實行委員會でも、可なり勢力を占めて、土地の國有なり、國家、教會の分離なり、多くの重要な改革を行つたのであつたが、然るに、此調和は、永く持續

せられず、内外の政策に關し、破綻は、幾もなくして彼等の間に起つて來たのであつた。

衝突の一つの原因は、内政、特に、農政に關するものであつた。社會革命黨左派は、其傳統的の政策として、農村の革弊に最大なる興味を寄せて居たから、工業上の労働者を以て材料とし、己が主張の據り所ともして居たボリシエウイキーとは、初からその行き方を異にするものであつた。従て、すべて革命は、麵麩を興ふることの出来るものによつては惹き起され得るけれども、之に反して、饑饉にして、一度、到らんか、革命の事業も、たちどころに滅落を遂ぐるに至るべきを知れる前者は、兎角に、都會の労働者のために、農民を犠牲に供するが如き後者の依怙の沙汰に慊ること能はず、特にボリシエウイキーが、農民をば貧富の二つの階級に分ちて、その中の貧者をして富者を抄掠し、誅求せしめんとした新政策に不満であつた。

確執の今一つの著しき因子は、ドイツとの和約であつた。此屈辱的の平和條約に對しては、勞農ロシアにも紛々たる異論がない譯ではなかつた。レーニンとても、もとより、ドイツの帝國主義に屈するの無念を思はざるに非ざるも、彼、及、その一味徒黨の敗北主義の福音は、既にして博く軍隊のすべてに行き互つて居つて、戦はんこと、絶対に不可能の状態にあつたので、彼は、次回の戦のために、しばらく、兵士に休養を與へよと説き、彼の同志を動かしたのであつた。然るに、レーニンほどに遠望のきかなかつた儕輩は、どこまでも、國民主義を翳し、戦争の續行を要求して聽か



なかつたので、一九一八年二月二十三日、ブレスト・リトウスタの和約の中央實行委員會の議にか  
けらるゝや、一一二に對する八六の批准拒絶の投票があつたほどであつた。勿論、反對側の大部分  
は、社會革命黨の左派だつたのである。

かくて、ドイツとロシアとの間には、平和の克復を見るに至つたので、ドイツは、四月を以て、  
愈、其外交官をモスクワに駐劄せしむる事となり、ドイツ大使は、新に其任に就きて、平和條約に  
よつてロシアから離れた地方を初め、到る處にドイツの勢力を扶植することにとりかゝつた。それ  
のみならず、ロシアの反動黨なり、反政府的の革命黨なりも、亦、ドイツとの和好の修められたる  
を奇貨、措くべしとして、ドイツ人と結びて陰謀をたくらむの虞れもあつた。そこで、社會革命黨  
左派は、ポリシエウイキを以て、ドイツ大使の犬であると罵り、竊に社會革命黨右派、及、メンシェ  
ウイキの曩に企て、成らざりしポリシエウイキの驅除策を講じた。彼等は、彼等の最も得意なる革  
命戰術により、ロシアに渡來して資本家的の方法で以てロシア人とすべて商工業上の取引を行はん  
としつゝあるドイツ人をば、死を以て脅嚇して、之をして、ロシアに安居するに堪へざらしめんと  
した。これ、ドイツ人に對する社會的の不規戰闘で、之を緒として、ドイツとの戰端を開き、ポリ  
シエウイキ政府を倒さうと云ふのであつた。彼等は、そのクーデターに着手するの時をば、七月四  
日、モスクワに召集された第五回全ロシア勞兵農大會の時にと定めた。該大會の選舉に際しては、

ポリシエウイキの大に干渉を試みたるに拘らず、社會革命黨左派は、全員の約三分の一を選出する  
事を得たのであつた。彼等は、此際、起つて大會にポリシエウイキの失敗を攻撃し、同時にドイツ  
大使、及、その軍司令官を暗殺したし、更にポリシエウイキの首領を仆さんと迄もしたが、その恐  
嚇主義の組織的でなかつたために、全く敗れてしまつた。是に於てか、ポリシエウイキは、非常委  
員を任じて、すべて反革命の徒を宥逐して、之に臨むに峻刑を以てしたので、彼等の政治は、往々  
にしてロマノフ帝政の獨裁政治に足かけた様な壓制政治となつた。地方の自治機關はすべて破壊  
された。印刷も、辯論も、集會も、結社も、すべてその自由を失ひ、ポリシエウイキの天地では、  
今は、彼等に對する批評の一語も、反對の一挙も、擧げられぬ様になつてしまつた。

### 二七三 ポリシエウイキの帝國主義

一切の反對黨を驅除撲滅し、彼等の同志のみで内部を堅めたポリシエウイキは、これから全力を  
盡して、彼等の主義主張を外に向て宣傳せねばならなかつた。彼等がブレストで執つた平和の態度  
は、勿論、決してトルストイ流の無抵抗を旨とするものではなかつた。戰爭は、帝國主義者によつ  
て始められたもので、之に付て責任を負ふことが出来ぬと言つた彼等は、遂に思ひ切つて敵と  
和睦したけれども、次には、彼等の爲さねばならぬ資本家に對する征伐戰が控へて居つた。ポリシエ



ウィキの領袖は、勞働階級には祖國なしとて、すべての國の無産者をば世界的に結合せんとし、熱心に彼等が社會的理想のための戦争を勧め、恰もドイツの帝國主義者の國際戦争を彼の國に鼓吹して止まざりしが如くに、内亂を慫慂したのであつた。従て、彼等には、彼等を擁護し、以て、その福音宣傳の任務に當るべき十字軍人がなければならなかつた。此意味に於て、ポリシェウィキ政府が、ブレスト談判の最後の瞬間に復員の命を發せしは、失策で、彼は、之がため、幾もなくして、更に、新なる大陸軍の編制に従事しなければならなかつた。此仕事は、イギリスのキチナーと並んで、世界戦争が生んだ最大の陸軍編制家の一人たるトロツキの手に委ねられ、かくの如くにして短時日の間に徵募教練された勞農ロシアの赤軍は、頻に邊境の各地に進出して、ドイツ軍、並に、その援護の下にある多くの白軍と衝突するには至つたのである。

協商列國は、今や、此東ヨーロッパ崩壞の機會に於て二重の脅威を感ずるに至つた。一は、言ふまでもなく、萬國の無産者よ、一致團結せよとてポリシェウィキの世界的宣傳だつたが、今一つは、勝てるドイツを後楯としたトルコの汎トルコ、乃至は、汎イスラムの宣傳であつた。勞農ロシアの帝國主義は、ドイツの帝國主義とは、主義として相容れないとしても、少くとも、そのアフリカ、及、前アジアに重大の利害關係を有するイギリス、フランス、イタリア等の協商列強を相手とする限りに於ては、トルコの國民的、乃至、宗教的運動と合致する所なしとなかつたので、獨立で、

若くは、聯合の勢で、往々にして、世界戦争に於けるドイツ以上の新なる恐怖の目的物とはなつたのである。そこで列強は、急ぎ之が對抗策を講ぜざるべからざるに至つたが、しかし、東部戰線の全く撤せられたりたる今日となつては、彼等が新なる運動の策源地に供し得べきは、南に於てイギリスの制する所となれるメソポタミア、及、バルシアを經由しての裏海、北に於て白海の沿岸、東に於てウラジオストクを門戸とするシベリアあるのみであつた。

イギリスは、カウカスに於けるドイツの異圖と、ポリシェウィキの革命運動とを防遏すべく、一九一八年八月を以て、兵をバクーに遣つた。彼、及、協商列國は、同時にロシアの反政府黨を助け、北極洋岸のムルマンと、白海のアルハンデルとに獨立の政府を建てしめ、聯合軍は、直に之に上陸し、こゝにロシアの國民軍を組織するの仕事にとりかゝつた。

ブレスト和約の結ばるゝや、勞農政府は、約により、すべての締約國に其捕虜を引渡すことになつたが、然るに、二元帝國の軍隊を脱して、隨意、ロシア軍に投降し、ロシアの所在にありしチヒ兵、及、スロヴァク兵の一萬あまりは、之に従はず、獨立の部隊を結びて、捕獲のために之に向つた赤軍を撃ち破つた。此風は、シベリアに配置された同一捕虜にまでも傳染して行つた。協商列國は、チヒヒ人の民族的要求に應じ、その獨立を認むる考だつたので、これ等、ロシア、及、シベリアのチヒヒ兵、スロヴァク兵を助けて、之をば、西部戰線に輸送するの道を講ずべく、日本、合衆國



を初め列國の聯合軍をウラジオストクに上陸せしめ、シベリアの各地に起つたポリシェウイキーに對し之を援護することにした。そこで、列國の此干渉に勢を得て、シベリアの所在には、ポリシェウイキー反對の各種政府が起つて來たのである。

ロシアの崩壊せる大有機體の殘址の上に完成されたドイツの偉大なる「中歐」系統は、バルト海と黒海とに完全なる制海權を握るに拘らず、その基礎は、まだく安全であるとは言へなかつた。蓋し、此大系統の眞の弱點は、他の大海に在つて存するからであつた。ドイツにして、最後の勝利を贏ち得んとする、是非とも、此弱味を矯正して、こゝに敵を擊破すべき間隙を作らなければならなかつた。

#### 第四十八章 兩大海軍國の封鎖戰

##### 二七四 北海を挾んで相對峙せるイギリスとドイツ

(一) 世界の交通線上に於けるイギリスとドイツ

今日の世界に於て、最歴史的な大陸であるとは云へないけれども、活動の最旺盛なるものは、言ふまでもなくヨーロッパである。ヨーロッパの利害と興味との世界大となつたのは、其住民の他の大陸の人民とは比べものにならぬほどに進取的にして、どしどし他の大陸に押しかけて行き、之を利

用したためて、かくてヨーロッパと、及、ヨーロッパから獨立に、固有の文明系統を發展した所の、乃至は、文明系統上、ヨーロッパに依存する所の諸大陸との間には、極めて有機的な密接なる關係が結ばれたのである。ヨーロッパを此等の諸大陸に結び付けるものは、西部アジアを外にしては、悉く海に非ざるはない。海洋的なるヨーロッパは、歴史の初よりして海とは淺からざる關係を有するけれども、恐らくは、之に依存すること現代を以て最とせねばならぬ。

往時は、海洋には自由と云ふことはなかつた。大抵の海國には、公海の若干の部面をば、之が使用を己の漁夫や商人のみに限るの風があつたが、十九世紀に至りて海洋自由の原則は立せられ、海峡などに於て、その沿岸國が、通行税をすべての船舶から徴收すると云ふ様なことは廢されて了つた。即、今日の世界では、沿岸三哩以外の公海は、すべての正しき船舶の自在に航行する事の出来る所である。けれども、之は平時の事で、戰時に於ては、交戰國は、他の自由通航の權利に制限を加ふることが出来ることになつてるので、從て交通上の大道を制するに好都合な地點に蟠踞し、有力なる海軍力を以て之に臨むの準備を有する國は、かくの如きの利益を有せざる敵國に對して、直に海上に於て壓迫を加ふることが出来るのである。ヨーロッパを他の諸大陸と連結する海としては、アフリカ、及、アジアに對しては、地中海、紅海、及、印度洋あり、アメリカに對しては大西洋があるが、イギリスは、實に、これ等世界の大交通線上の要所々々を己が一手に堅めて居るから、ヨ



ヨーロッパ大陸に事あるに際しての彼が地位は、他の大陸諸強國の企及し得ざる有利なるものである。翻てドイツは如何、バルト海、及、北海に濱するの彼は、その海岸線の延長に於て、フランスのそのの四割、イタリアの二割に過ぎざるに拘らず、フランスやイギリスと同じく、大西洋上の海國たるを失はざるものである。しかしながら、彼の沿岸を洗ふものは、開いたる大西洋そのものではない。彼の有する海岸線の大部分を占めて居るバルト海は、地中海同様の内海ではあるけれども、これは大陸を結び付くものではないから、地中海が有する様な世界交通上の大なる意義をば持つて居らぬ。キール運河の開鑿は、バルト海をば北海に直繋し、ドイツをば、より多く大西洋に結び付くるものではあるが、ドイツにして世界の大道たる大洋に向つて乗り出さんとせば、どの道、オランダ、ベルギー、フランス、イギリスの海岸なり、デンマルク、ノルウェー、スコットランドの沿海なりを經由せねばならぬ。此意味に於て、北海のドイツに於けるや、彼が大動脈として、他の國の有せざる重大なる意義を有するものであると言はねばならぬ。これを經由するの必要の存するだけ、ドイツの他の大陸に至る距離が大きくなり、其危険も、亦、多くなる譯である。戦時に於て、イギリスの如き海上の雄國のその前路に立ちはだかるが如き場合には殊に。

### (二) イギリスの對ドイツ封鎖

大戰の勃發する、バルト海では、キール運河の存するがため、ドイツの海軍は、初からその質、

並に、量に於て、ロシアのそれを壓倒して居つた。デンマルクの水路は、敷設水雷で塞がれて居たから、敵の艦隊は、容易にこれに闖入することは出來ず、バルト海に於けるドイツの制海權は確實なるものであつた。之と同じ程度であるとは言へないが、有力なるドイツ地中海艦隊の統制の下に立ちしトルコの艦隊も、これ、亦、ロシアの黒海艦隊を凌いで居つた。

然るに、この二つの内海を除いた世界のすべての水面では、イギリス、並に、彼の與國は、全くドイツの行動の自由を抑束し、ヨーロッパに於ては、ゲルマン同盟に對して先づ嚴重なる軍事上の封鎖を行つた。即ち、イギリスの艦隊は、スカパ・フローとロシストンによつて北海を、その南岸の港灣によつて海峡を制したし、イギリス、フランスの聯合艦隊は、モルタ、及、ムードロス（一九一六年以降は、サロニカ、及、コルフ）をも之に加へて）によりて地中海を制した。紅海は、完全にイギリスの制する所となつて居つた。イタリアの參戰に及び、地中海に於ける協商側の重さは、一層に加はつた。従てドイツの艦隊は、ウィルヘルムスハーフェン、及、キールに、オーストリアの艦隊は、ボラ、及、カッタロに隠匿して、空しく爲すなきの月日を送らねばならなかつた。

協商列國の筆頭に立てるイギリスは、此嚴重なる封鎖をば、又、通信、並に、通商上にまでも及ぼした。ドイツの海底電線は、東洋では、彼が南洋の領土と、支那大陸との間、ヨーロッパでは、彼の本國とノルウェーとの間のもの、以外には、大西洋に三線あり、その第一は、イスパニアに至り、



第二は、アフリカの西岸を経てブラジルに走り、最後のものは、ニューヨークまでを繋いで居る。これ等の線は、イギリスを初め、敵國の手に占領されてしまつたから、ゲルマン同盟には、南北の兩内海上を除き、海上の一切の通信機關(無線電信は格別だが)が亡くなつてしまつた譯である。延長二十五萬キロメートルの海底電線を有するイギリスは、三大洋を縦横する電線網を彼が一手に壟斷し、隨意、通信文の上に己の筆加減を加ふることが出来たのであつた。

イギリスの軍事的封鎖は、敵の海軍をしてその軍港内に蟄伏せしめたばかりではなく、海外に於けるドイツ人の歸國を偃止めて、それだけ、多少に拘らず、その兵力を制したのであつた。けれども、最もきつめの著しかりしは、通商上の封鎖で、五五〇萬噸のドイツの商船は、一朝にして世界の海上からその姿を没し、バルト海以外、貿易の道は絶たれ、外國貿易中の七割を占めし大洋貿易はふいになつてしまつた。ドイツの製造品を輸出すべき手だても、亦、食料、及、原料を輸入すべき道も塞つてしまつた。此封鎖をば一層に嚴にして、ドイツの活路を絶つべく、一九一四年十一月二日、イギリスは、全北海を軍事區域 Military Zone と宣し、ドイツが専恣に公海上に水雷を敷設するがため、イギリス海軍が指定する航路以外を通行することの危険なるを一般に公示した。

(三) ドイツ、國を擧げてイギリスを咀ふ

イギリスの北海封鎖の此宣言は、甚しくドイツと中立諸國との通商を妨ぐるものだつたので、オ

ランダは、之を以て海洋自由の原則を蹂躪するものであるとし、とりあへず抗議を提出した。同時に、その他の中立國民の間にも、海洋は、すべての人類の貿易のために自在に利用し得べきものでなければならぬ。すべての國民のものでなければならぬと言ふ所から、イギリス一國の之を制せんとするに反對な議論が勃然として沸いて來た。

此喧しき海洋自由論は、要するにイギリスの海上に於ける横暴を抑制せんとするもので、最大の中立國たる合衆國にも、此種の有力なる説を提唱するものが尠くはなかつた。是に於てか、ドイツの海軍記者も、亦、筆を揃へて之に迎合したが、しかしながら、此場合に、ドイツ記者の狙つた眞の目標は、イギリスの絶對的海權に對抗し、戦時に於て、商船のイギリス海峡の自由通行を保證し得べき方法を獲得せんと云ふに外ならなかつた。彼等は、かくて、ベルギーの沿岸をドイツの手に把持し、以てイギリスと海上權力を争はんことを求めたのであつた。従て、ドイツ人の所謂、海洋の自由なるものは、海上に於てイギリスを拘束し得べき所の、出來得べくむば、イギリスを排して之に代り得べき所の、ドイツの海權の下に保證せらるべき自由の謂に外ならなかつたのである。

けれども、ドイツのイギリスに對する攻撃も、非難も、要するに空言たるに過ぎず、三叉戟を手にするイギリスの地位は、之がためにビクともしなかつた。それだけ、イギリス憎惡の感情は、ドイツに蔓り、且、熱して行つたのであつた。大戦爆發の前後のドイツでは、その東西隣の兩大國に



對する敵愾心も、中々、旺んではあつたけれども、イギリス憎惡熱の極端なるには及ぶべくもなかつた。イギリスの起つや、ドイツ宰相は、殆んど氣相を變へてイギリス大使に突つかゝり、彼を以て決死の戦に臨めるドイツに對し、後へより、やにはに、打擲を喰はすものであると言つたが、實にイギリスの擧兵は、その瞬間に於て、早くも、ドイツから勝利の希望の少からずを拉し去つたるものであつた。これ、ドイツの國を擧げてイギリスを咀ひ、之を目するに不俱戴天の敵を以てするに至りし所以であつた。教壇でも、講壇でも、牧師、教師の聲を絞つて一齊に呼號する所は、イギリスに對する咀ひの辭であつた。文人騷客の詩に賦し、文に屬する所は、イギリスに對する敵愾的の文字であつた。是等の中でも、最、ドイツ、竝に、彼の與國の人口に喰炙したりしは、「我等ドイツ人は、唯一の憎惡を有す。我等は此點に於て舉國一致である。イギリスこそ我等が唯一の敵である」と歌つた詩人リ、サウエア「*Southey*」のイギリス憎惡の賦なるもので、彼が此軍歌は、塹壕では、與國の兵士の最も愛吟する所となり、大に士氣の振張を助けたのであつた。

#### (四) ドイツのイギリス空中征伐

海上勢力に於てイギリスの敵に非ざるドイツの、直接でも、間接でも、イギリスに打撃を與へ得べき道は、空中か、否らざれば、海中から行はるべきもの、外にはなかつた。

大戦中、ドイツのイギリスに向つて空中攻撃を加へたること百回以上に及んで居る。初め専ら此

用に供せられしは、ツラペリンであつた。大戦争の始まると共に、ツラペリンは、大洋艦隊に附屬することになり、ドイツ海軍の補助機關として、敵に對する偵察の任務に服することになつて居つた。船體の巨大なると、速度の比較的遲緩なるにより、敵の砲火の目標となり易い所から、襲撃は、薄暮、又は、夜間にのみ行はれたが、彼に期せられたる破壊の目的を十分に果し得なかつた。六十一隻あつた此種の空中船の中、十七は敵の破壊する所となり、二十八は、漂流その他の原因で失はれ、六は、用をなさずして非役となり、結局、十隻を残すのみとなつた。

ツラペリンの多く其用を爲さざるに及び、ドイツは、更に水上飛行機隊を用ゆることにした。この方は、ツラペリンよりも以上に敵の人命を毀つたが、しかしながら、もとより軍事上に於て決定的の大損害を及ぼすと云ふ様なことは出來ず、僅に敵國の非戦闘員を威嚇して、之をして精神上の恐慌を惹起さしむる位に止まつて居つた。陸を以て海を制するの難きと同じく、空中を以て海を制するも、亦、至難だつたのである。

## 二七五 潜水艇を以てするドイツのイギリス

### 封鎖の發端

窮餘、ドイツのイギリス征伐の武器として採用したりしものは、潜水艇であつた。元來、潜水艇



の始まりは、フランスとアメリカ合衆國とで、こゝには、前世紀の九十年代から之が拵へられてあつたし、イギリスは十九世紀から二十世紀への過渡の年に之を建造した。ドイツは、これよりも遙に後れて、一九〇六年に之を造り始めたものだが、それでも、大戰開始の時に於て、イギリスの十七隻を有したりしに對し、二十八隻を持つて居つた。當時、世界に於ける強國と云ふ強國の海軍當局者は、一人としてイギリスのフィッシャー提督の天才に魅せられざるはなく、大艦巨砲主義に夢中になつて居つたので、潜水艇は、一般に海岸防禦以上の用をなし得ざるものであると考へられて居つた。蓋し潜水艇の航程、まだ短小にして、母艦の之に伴ふことなくしては、到底、遠き航海に堪へ得べくもなかつたからである。政治家は勿論だが、海軍士官すらも、潜水艇を目するに玩具を以てしつゝあつたのだから、ドイツが潜水艇の製造を怠つたのも止むを得なかつた。一九一三年の年始から世界戰爭勃發の月までの二十個月の間に、ドイツは、唯、之が三艘の起工を命じたのみであつた。此點に於てドイツ以上に懈怠の著しかりしは、イギリスで、世界戰爭の前夕に、其海軍部内の一老先覺の警告を發して、潜水艇の、今や海軍に革命を齎さんとしつゝあるを叫び、ドイツの該艇製造に注意を拂ふの要を熱叫するものありしに拘らず、その大聲も、遂に俚耳には入らなかつた。所が大戦勃發の後、間もなく起つた出來事は、潜水艇に關するドイツ海軍當局者のこれまでの考へ方を一變さした。九月の月上旬に、ドイツの一潜水艇は、イギリスの一小軍艦を仕留めたが、つい

で、其下旬、ウラヂーゲン *U-19* 中尉の指揮せし一艇は、イギリス海峡に忍び寄り、その北口を守つて居つたイギリスの三大巡洋艦をば、僅々二時間の間に魚腹に葬つてしまつたのである。此一舉によつてドイツ當局者の頭の中には、潜水艇の最早、玩具にあらず、軍事上の目的にも、將た商業破壊の目的にも、十分に供せられ得べきものであると云ふ確信が浮んだのである。ベルギー沿岸のドイツの占領する所となるに及びて殊に然り。そこで、ドイツの海軍當局者は、とりあへず、彼の潜水艇を以て敵の軍艦に不意撃を加へ、その勢力を縮減するの計畫にとりかゝつた。これ、かくの如くにして、敵の海軍力を殺ぐことによりて、我が大洋艦隊をして、敵の主力と雄雌を争ふの機會を攫取するに至らしめんがためであつた。けれども、いつでも柳の下に鱈が居るとは言へなかつた。實際、大戰の初の程は、イギリスの北海沿岸の海軍根據地は、スカパ・フローを初めとして、殆んど潜水艇の來襲に對して無防禦の状態に置かれてあつたのだが、その海軍當局者は、艦隊の休養地、練習地をば、スコットランドの西海岸からアイルランド海のあたりまでに定めて、之を掩護すべき方法を講ずることを怠らなかつたので、ドイツ潜水艇のイギリス軍艦狩りも、漸にしてはかばかしき効果を擧げ得ざるに至つた。

ドイツは、更に潜水艇を以て敵の商船を破壊せんことを考へた。一九一四年十一月、イギリスの北海封鎖を宣言するや、ドイツ大洋艦隊の各司令官は、連署して軍令部長に進言して、イギリスの



饑餓政策に衝るべく、潜水艇を以てする商業破壊を敢行し、汽船も、乗員も、容赦なく悉く魚腹に葬らざるべからざるを力説したし、同時に海相チルビツ、亦、商業破壊戦の可能なるを公言した。實に、イギリス四千五百萬の生命を支ゆる食料と、その工場が要する原料との供給の道にして、杜絶せらるゝこと數旬に及ばんか、イギリスは、戰場に敗れざるに、早くも、饑饉と失業のため、ドイツの軍門に降服せざるを得なかつたのである。

一九一五年一月二十五日、ドイツは、持久の戦争を覺悟して、すべての物資を節約するの大方針から、先づ第一に穀物を國有とすることにした。そこでイギリスは、穀物をも絶對的禁制品の品目中に加へることにしたものだから、越えて二月四日、ドイツは、イギリスが、正當なる中立商業を不當に妨害せんとするは、明にドイツの兵力を破壊せんとする以外に於て、ドイツの經濟的生命を壓迫し、延いてドイツ國民の全體を餓死に瀕せしめんとするの目的を有するものであるとし、之に對する報復手段として、イギリスが北海を軍事區域と宣言したりしに倣ひ、イギリスの周圍の水域をば、海戰區域 *Seekriegsgebiet* なりと宣言し、二月十八日以後、之を通行する敵船を破壊すべきを述べ、同時に中立船にも危険を警告した。これ、ドイツの所謂潜水艇を以てする饑餓政策戦の發端である。そこで三月十一日、イギリスも、亦、これに應ずべく、一切の商品のドイツに發着するを防止するの目的を以て、令を發して一層に封鎖を嚴にした。イギリスも、ドイツも、敵の糧道を

絶たうと云ふ目的に變りがないが、唯、その方法に於て、前者の眞綿で首の流義なるに對し、後者が、段平を振りまわしたまでなのであつた。

## 二七六 北アメリカ合衆國の干渉

イギリスは、ドイツに宣戦した日を以て、大體に於て、ロンドン宣言により、戰時禁制品の品目を公にした。ロンドン宣言は、イギリス政府の批准する所とならず、結局、成立しなかつたものだから、之を改廢することは、必しも、海上法違犯であるとは言へぬけれども、戦局の開展するに従ひ、イギリスは、逐日、禁制品の數と種目とを増加し、條件付なりしものもとより、自由品すらも絶對的禁制品の中に加へ初め、一九一六年四月二十日に至りては、終に禁制品に條件付と絶對的との取扱上の區別を付けない事にまでもした。彼は、又、中立國搭載の郵便物までも取り押へた。これ等の行爲は、全くこれまでの海戦法の法規慣例に違背し、甚しく中立國の權利を犯すものだったので、北アメリカ合衆國は、多くの中立國と共に、盛にイギリスに抗議したのであつた。合衆國の海洋自由論は、イギリスの我がまゝを制せんがための一の方便でもあつた。

併しながら、合衆國のイギリスに對する抗議も、その激越さに於て、到底、ドイツに對するものには及ばなかつた。と云ふのは、合衆國とドイツとの争は、物に關するよりは、多く人命に關する



ものであつたからである。ドイツの潜水艇政策の宣言されてから六日にして、ワシントン政府は、直に之に抗議し、合衆國は、ドイツの潜水艇のために失はれたる合衆國の船舶や國民に對しては、ドイツの嚴密なる責任を求めなければならぬと言つたが、ドイツは、依然として海戰區域を通航するものに向つては責を負ふことは出來ぬと嘯いた。

かゝる間に、ドイツの商業破壊戰は進捗して、二月より五月までにドイツの毒手にかゝつて撃沈せられたる船、六十艘、之により失はれたる生命、約二五〇を算するに至り、三月の末には、合衆國の一市民が此難に斃れたし、それから一月餘りにして、合衆國の國籍に屬する一船も撃たれた。が、眞に世界を聳動した慘事は、五月七日に於ける客船ルシタニアの無警告雷撃で、此際、溺死した約一千二百の乗客の中には、百餘の合衆國民もあつたので、合衆國の輿論は、忽にして沸騰し、ワシントン政府からの嚴重なる抗議がベルリンに申し込まれた。此戰慄すべき出來事に對して、合衆國民中のアングル・サクソンの分子とドイツの分子との間は勿論だが、當局者の中にも、亦、紛々たる議論は闘はされた。在野黨なる共和黨は強硬外交を主張したが、民主黨は已にして二派に分れて、國務卿ブライアン Bryan を領袖とする平和黨は、交戰國の武装商船を選んで、一身を之に託したる合衆國民は、自ら好んで己の生命を賭したるものに等しとし、かゝる問題によりてドイツと衝突するは、合衆國を戰爭の渦中に誘入するの凶事であると言つて、ドイツからの回答に満足せんと

したが、大統領ウィルソンは、列國が大戦前に定めた原理をば、劇然として變更し、合衆國人、當然の權利までも縮小するの非なるを高調し、飽く迄も、主權國民としての合衆國の面目を主張せんといきまいた。是に於てブライアンは、職を辭して野に下つた。協商列國は、彼等の商船の自衛のために武装を之に施すことにした。ウィルソンは、相變らず、合衆國をして戰爭の埒外に立たしむること、但し、合衆國の性格、及、歴史の基礎となつて居るもの、害せられんとするに際しては、此限りにあらざるを説き、ブライアン一派の平和黨の、一九一六年三月初旬、合衆國民の、交戰國の武装商船に便乗するを禁ずるの動議を提出するや、下院に於て終に之を否決したのであつた。

所が、一方に於ては、ルシタニア號の善後に關するワシントン、ベルリン兩政府間の交渉の繼續せられつゝある間に、ドイツ潜水艇の商船の無警告撃沈は、斷續、行はれ、交戰國武装商船便乗禁止の動議の合衆國下院に阻まれてから十餘日にして、又もや、客船がイギリス海峡に於て無警告に撃沈せられ、二人の合衆國民も此難に遭つたので、合衆國政府は、今は耐へ切れずして、強硬なる談判を試み、ドイツにして客船、及、貨物船に對する現行の攻撃方法を放棄すべきことを、即刻、宣言し、且、實行するに非ずしては、合衆國は、向後の國交を斷絶するより外なしと言ひ放つた。そこで、五月四日、ドイツも、終に之に屈して無警告主義を止め、中立國の權利は勿論だが、敵船上の非戰闘員にも保護を及ぼすべきを誓つた。但し、これには、合衆國からイギリスにかけ合ひ、



之をしてドイツの潜水艇政策を促した動機となつて居る、イギリスの國際法違反を矯正さして貰ひたいと云ふ一つの條件が付いて居つたが、合衆國は、もとより、此條件に應ずるを拒んだ。これから後、年の末までは、合衆國とドイツとの間に格別、大きな談判が行はれなかつた。

## 二七七 潜水艇政策に關するドイツ當局者の

### 意見の分裂

ドイツが行つた様な無慈悲なる商業破壊の戦術は、已に一八八六年にフランスのオーブ提督の主張する所だつたから、必しもドイツ人の創始とは言へぬが、しかし、提督の之がために用ゐんとした武器は水雷艇であつた。潜水艇の利用は、全然、ドイツ人の新工夫で、之に先例のないだけ、同じくその用を説くもの、間にも、之が見込に付て完全なる一致を期することが出来なかつた。ベルリン當局者の意見は、早くも二つに分れたのであつた。海相チルビッツは、硬論の先頭に立つたが、保守黨、及、國民自由黨は、専ら之を擁護し、彼等は、何れも、海を制するもの、結局、形勢を制し得べき地位にあるを見、勝利を手にすべきの道は、唯、それ忍んで持久するにあるけれども、海にして閉鎖せられんには、其望なしとした。彼等は、敵の困難を以てドイツ以上であると見積つた。フランスとイタリアとは、イギリスから石炭の供給を仰がねばならぬのみならず、又、イギリ

スと共に、新世界から、穀物や、肉類や、金屬や、綿花を輸入せねば、一日も、立ち行かないのである。そこで、まつしぐらに勝利に徹底すべく、一切の手段を顧慮せない潜水艇による敵國封鎖を行ふことは、此際に於ける焦眉の急であると彼等は考へた。戦争に於て生温き人道を唱道するは、却て戦局を永びかし、それだけ、無用の犠牲を投ずるものだから、結果に於て、却て短期の殲滅戦以上の残忍の行たるを免れざるものであると云ふのである。一九一五年六月二十六日、ドイツ大洋艦隊司令長官の軍令部長に説きしは、又、此方針であつた。

宰相ベートマン、及、外相ヤーゴーによつて代表された軟説は、議會では、急進黨、中央黨、多數派社會黨の支持する所となつた。ワシントン駐劄の大使も、亦、最熱心に硬論の無謀に反對し、ドイツにして、若し無制限の潜水艇戦を採用するに至らんか、合衆國の擧兵は、免れがたき運命であるとして、當局者を警めたのである。

警告を與へ、人命の救助に餘暇を與へようと云ふ所謂、巡洋艦戦術を非とし、無拘束、無制限に撃沈しようと云ふ硬論は、初め、海軍部内だけの意見で、一九一五年八月二十七日、ベルリン政府の、今少しく潜水艇による貿易破壊戦を差し控ゆべしと令するや、チルビッツは、即日、辭表を提出して退かうとした。けれども、此意見は次第に陸軍部内にも浸漸して行つて、參謀總長ファルケンハインの如きが、一九一五年九月、ブルガリアのゲルマン同盟に與して起つと共に、上書して潜水艇に



よるイギリス征伐論を主張するに及び、歴すべからざるの一大勢力となり、陸軍省は、一九一五年の年末から翌年の始にかけて、此點に關して凝議し、參謀總長、軍令部長、並に陸海の兩大臣は、一齊に無制限戦を唱へ出した。彼等は、一九一六年三月一日を以て之が決行の期となさんとし、二月、海相は、右に關する覺書を宰相に提出した。彼等は、現行の海上法に違背して商船を武装し、以て軍艦の攻撃に之を利用することは、當時、一般に是正せられて居らぬのみならず、一九一六年の初に於ける合衆國の議會は、大體に於て平和説に傾いて居つたから、假令、ドイツが無制限戦を宣言しようとも、大統領選挙前のウィルソン大統領は、ドイツに對する宣戦を斷行し得べき地位にあらざりしものと推測した。否、彼等は、終に、合衆國参戦の事實を見るに至るに拘らず、此新しき敵の援助のヨーロッパの戦場に到るに先ち、一九一六年の秋には、イギリスをして屈せしめ得べしと見込を立てた。ドイツに於ける六大經濟團體も、亦、此意味の建白書を上つた。そこで、三月六日を以て御前會議が開かれ、硬軟兩説に最後の決をつけることになつたが、カイゼルは、文官側の意見を採用し、無制限潜水艇政策の實行をば無期延期することにとりきめたので、チルビッツは、彼が二十年蟠居の海相を辭することとなり、問題はこゝに一段落を告げた。但し此失敗は、別の方面に於て大にドイツの海軍を奮起せしめたのであつた。

## 二七八 ユートランド大海戦

大戦の開始せられてから二年にも垂んとするに、ヨーロッパの方面では、イギリス巡洋艦隊のヘリゴランドを襲へると、一九一五年の初に彼がドイツ巡洋艦隊と遭遇戦をなしたることとの外に、海戦らしい海戦と云ふものはなかつた。かくてドイツの大洋艦隊の無爲に打すぎつゝある間に、その潜水艇の方が次第に戦局に於ける有力なる因子たる役目に服する様になつて來た。

潜水艇政策のはじまつた一九一五年の初から、翌年の六月までの間に、ドイツ大洋艦隊の司令長官は二度も迭任し、又、その軍令部長も、大臣も、皆、更つてしまつた。就中、ドイツ海軍政策の大黒柱たるチルビッツの退職は、無制限潜水艇政策論者の鼻柱を折り、少くとも、ドイツ海軍將卒の士氣を沮喪せしめ、それだけ敵に勢づけたものであつた。そこで、一九一六年一月を以て新に大洋艦隊司令長官の職に就いたフォン・シーア Von Scheer は、大に鬱結せる海軍部内の惰氣を一掃せんとし、春漸く深き五月三十一日の曉霧を破つて、ヘリゴランドを以て底邊の一點とすなるドイツ北海岸なる三角形の入江から、その全艦隊を擧げて出動した。彼の目論見は、又、あはよくば、敵の商船、及、巡洋艦をも狩らんとするにあつた。これ、西部戦線では、ウエルダンの戦正に關し、東部ではロシア軍は活動を試みんとしつゝあり、又、外交上に於ては、ドイツと合衆國との交渉の、



ドイツの屈服を以て落着した時であつた。

艦を根據地に解きしドイツの大洋艦隊は、巡洋戦艦の新鋭を先頭として、ユートランドの海岸を北上し、スカゲラクにさしかつたる處、端なくもイギリス巡洋戦艦隊の發見する所となり、兩艦隊は、こゝに合戦、數合に及んだ。その間にジェリコー Jellicoe の率ゆるイギリスの主力艦隊は、馳せて戰場に到り、一一三萬餘噸を算するイギリスの此大艦隊は、五十九萬噸のドイツ大洋艦隊と對戦することになつたが、既にして暮色蒼然として到り、戦争は水雷戦に變つた。ジェリコーは、彼の艦隊に夜戦の準備なしとて甚しく敵に薄らさず、更に翌朝に至るも、之に追撃を加ふることをしなかつたため、前日の戦に尠からざる瘡痕を負うたドイツ艦隊は、九死に一生を得て本國の領海に還ることを得たのであつた。ジェリコーの作戦は、甚しく果敢の分子を缺いたが、しかしながら、こは彼に在ては、豫定の行動であつた。彼は、一九一四年十月三十日、海軍省に交付せし彼の意見書に於て、兩大艦隊の戦を交ゆるの時、敵にしてその本國の海面に退くに會せば、之を追うて危険なる水雷敷設區域に突入することを回避すべきを告げたのであつた。

此戦闘は決定的のものではなかつたが、イギリスは依然として海上を制し、相變らず、自在にその兵員と兵站とを輸送することが出来た。しかしながら、兩艦隊の被つた損害を對較せんか、イギリスの失ふ所の十六萬九千噸なるに對して、ドイツは纔に六萬噸に過ぎないのだから、戦闘そのもの、

の、關する限り、ドイツの成功を認めざるを得なかつた。イギリスの巡洋戦艦隊の、最大の犠牲を忍びて、主力艦隊の到來せんまで戦闘を持續しつゝあつたに拘らず、ジェリコーに邁進の意氣を缺いたため、敵を撲滅すべき絶好の機會を逸したのである。此戦のドイツに對して大なる精神上の効果を及ぼしたりしは言ふまでもなく、之によりドイツ政府は、重大の時期にその地位を堅固にするこゝが出来たのであつた。大洋艦隊の幸にして撃沈を免れたため、これは、この後とも貿易破壊戦の戦士の供給所となつたし、イギリスは、これまで通り、之を監視せねばならず、ドイツの海岸近くにその封鎖線を接近せしむることが出来なかつた。

## 二七九 ドイツ、遂に、ルビコンを渡る

心から無制限潜水艇戦の成功を信じて居つたドイツの海軍當局者は、今は、只、彼等の、再、旗を擧ぐべき好機を待ちつゝ、雌伏して居るに過ぎなかつた。一九一六年中頃の戦局は、ドイツに向てあまり有利に開展して居るとも言へなかつた。ウエルダンの包圍戦は、豫期の如く進捗しなかつた。ロシアのガリチア、ブコウイナ方面に於ける戦線は、大に振うた。イギリス、フランスの兩軍は、ツム河の戦線に於て活躍した。況や、兩端を觀望したりしロマニアの、動もすれば、彼の永く握手したる三國同盟を棄て、奔らんとするの狀ありたるに於てをや。是に於て、大洋艦隊の司令長官フ



ン・シェーアは、七月四日、曩日の大海戦に關する最後の報告をものし、上奏して曰、我が艦隊は、八月中旬には、二隻以外の全力を擧げて新なる行動を採り得るの地位にあるが、併しながら、我等の不利なる地理上の位置と、敵の大なる材料上の優逸とのため、敵を封鎖する事は至難である。従て、若しあまり遠からぬ中に、勝利を以て戦を終結せんとせば、潜水艇を以てイギリスの貿易を破壊し、彼が經濟生活を挫くことの外には斷じて良法がないと。彼は、同時に、宰相に向ても、無制限政策の斷行を説いたし、軍令部長、亦、之に倣つたので、八月末、プレスの大本營で、文武の要路にある者は、此問題を凝議したが、恰も、參謀總長の任に就いたヒンデンブルグは、當時、兵を擧げたばかりのロマニアの處分を了へてからのことにして貰ひたいと言つた。この間に、十月の初に至り、國會に於ける中央黨の一部から、潜水艇の問題では、宰相の之を軍部の裁量に委せんことを求むる旨の要求あり、宰相、亦、之に従ひ、自ら己の地位を弱めたのであつた。十月二十三日、イギリスの外相グレーは、戦争停止のための國際聯盟を設くべしと説き、彼の議論は、大分、中立國民を動かしたが、ベートマン、亦、之を讀みて、所詮は、グレー所説の政策の外には立ち得ずと感じ、イギリスを怒らし、之をして決死の闘を覺悟せしむるが如き戦争方法の採用を遠慮せざるべからざるを知つたのであつた。

然るに、軍部の硬論は、一方に於て、又もや大に其勢力をもち返して來た。一九一四年八月から

翌年四月までに、ドイツの潜水艇によりて撃沈された船舶の噸數は、毎月十萬臺以下にあつたが同五月から一九一六年の八月までは、十萬臺に上り、九月に至りては、初めて二十萬を越え、次で十月には、一躍して三十五萬噸に上つた。此好成绩は、無制限論者の鼻息を荒くしたと少くはなかつた。一九一二年この方、外相として内外の機務に參し、殊に合衆國とのきはどい談判に手腕を揮ひたるヤーゴの職を免ぜられたのは、潜水艇問題の決定を軍部に委したる宰相の長縮に次ぐ行政部の敗退で、かくしてサーベル連は、歩一步、其嘴を政治上に容るゝ様になつて來たのである。

ドイツの帝國議會では、合衆國反對の傾向が次第に加はつて來た。彼が一九一六年冬に於ける平和の提議の、協商列國の峻拒する所となるや、ドイツ國民は、擧げて悲憤慷慨し、わけても、敵國團の中堅なるイギリスを惡んだ。ロマニアも、已に征略を了されたから、今は陸軍當局者も、海軍當局者と相提携して無制限政策の採用を宰相に迫り、協商列國は、西部戦線に於て大攻勢に轉ずべき準備に怠りなければ、之に對抗すべく、海上に於ける新活動を要すと論じ立てた。これがため、十二月の末に、プレスの大本營に文武大官の會議あり、ついで翌一九一七年一月八日、その續會を催したが、カイゼルは、この際、迫られて、終に、二月一日以降、無制限政策を行ふの議を決するに至つた。

かくして己にルビコンを渡つたドイツは、一月二十日、更にウィーンに兩帝國の當局者を會議し



て、彼が決議を二元帝國の當局者に強要した。ウィーンでは、皇帝を初め、外相も、將たホンガリアの首相も、皆、此政策の成功を危ぶんだけれども、ベルリン軍部の堅き決心の前には爲すべきの術もなかつた。一九一六年の春には、ドイツの有せし潛水艇の數、百艘、一年の後には一二〇艘で、その中、三分の二は、休養中、若くは、歸航の途上にある割合だつたから、實際、海戦區域に出征するものは、精々、四十艘位に過ぎなかつたけれども、ドイツの海軍當局者は、之をば、彼が北海の十五の根據地から發して、イギリスをば立ちに饑餓に陥れしめんといきまいたのである。首尾よかりし戦局に意、驕りて、傍若無人となれるドイツ海軍の當局者は、合衆國を以て到底、起ち得ざるものであると見くぶり、その海相の如きは、假令、合衆國にして兵を擧ぐるとすとも、彼の參戰は、何等の影響をも戦局に及ぼし得ざるものであると放言した。敵に對する此輕侮心は、ドイツの海軍當局をして、多々益々辨すべき潛水艇の建造を怠らしめたのであつた。

かくて合衆國のウィルソン大統領の講和のために斡旋しつゝありたるに際して、一月三十一日、ドイツは、突如、合衆國に交付するに無制限潛水艇政策に關する通牒を以てしたので、萬事、こゝに窮まつた。二月二十七日、ドイツ帝國議會は、政府の執りたる此處置に承認を與へた。

#### 第四十九章 北アメリカ合衆國の參戰

##### 二一八〇 合衆國、洞が峠を下る

ドイツに於ける合衆國反對の思潮の漸く勢を得るに及び、一九一六年季秋、ドイツの一潛水艇は、大膽にも、遠く大西洋を横航して合衆國の沿岸に活動し、之が威嚇を試むるに至つた。此際、彼は正式の巡洋艦戦により若干の商船を撃沈したが、合衆國人と合衆國貨物との之がために害せられなかつたに拘らず、合衆國の輿論は大に興奮した。けれども、ドイツとの衝突のために、合衆國をヨーロッパの戦争の中に捲き込むと云ふことは、なべての合衆國人の望まざる所であつた。大統領の候補者として主戰的、否、寧ろ挑戰的と云つても然るべきルーズヴェルトが排せられて、共和黨は新顔の候補者を立し、以て再選を期するのウィルソンに對抗せしめたる所、ウィルソンの遂に勝を制し得たるは、實に平和に傾いて居つた合衆國の中西部、及、極西部地方が、彼の中立政策に賛し、之に投票したからだつた。實に、ウィルソンは、飽くまでも、無勝利の平和を希つて居つたのである。

然るに、一九一五年二月の宣言を改め、遙に合衆國の四周、竝に地中海に於ける海戦區域を擴大して、交戦國の船舶は勿論、中立國船舶の之を通航するものに對し、保護の責を取ることを能はずと言へるドイツの新政策は、平和に戀々たりしウィルソンをして忽にして回心せしめたのであつた。



最近十数年の間にカリベア海の沿岸を制し、ハワイ、フィリピンを併せたる膨脹合衆國の國際政局に有する大なる利益は、彼をして殘餘の世界から孤立することを得ざらしめた。そのみならず、世界戦争は、さなきだに壓倒的なりし合衆國の工業をして跳躍せしめ、彼の貨物は、今や、ヨーロッパ列國に代つてその市場を侵略して行つたし、又、彼の資本は、高い利率で各交戦國に貸し付けられて、世界金融市場の中心は、ロンドンからニューヨークに移つて行つた。中立の合衆國の利害は、ゲルマン同盟に對するよりは、協商列國の方に、より多くの共通點を持つて居つた。若し、ドイツの果敢なる潛水艇政策にして順調に開展の歩武を進めて行つたら、四ヶ月半を支へ得べきだけの食料の貯藏あるのみであるイギリスは、最大の忍耐を以て之が使用を節約すとも、年の秋には、絶體絶命の境地に谷まるべきは必然であつた。かくの如くにして、勝利が、終にドイツの手に握らるゝこととなつたら、合衆國は、二つの意味に於て、極めて高價なる中立を味はざるを得ざることとなるのである。彼の協商列國に貸し付けた資金の回收の困難になることが、その一つで、戦後、ドイツの鋭鋒の、益、新世界を侵し、極東の日本と相策應して、合衆國の畏るべき競争者となるだらうことが、その二つである。

一九一七年二月三日、合衆國は、遂にドイツとの國交を斷ち、ドイツ大使は、旗を捲てワシントンを引き上げた。そこで、ウィルソンは、取りあへず、二十六日を以て武装中立の政策を立し、下院

の協賛を経て、悉く彼の商船に武装を施すことにした。恰も、此際、合衆國にして參戦せば、須くメキシコに説き、日本、ドイツ、メキシコの三角同盟を組織し、以て合衆國に當るべしてふ、ドイツ外相からそのメキシコ公使にあてた密電がワシントン政府の手に入り、公表されたので、合衆國民のドイツ排斥熱は高まり、四月六日、終に、其ドイツに對する宣戰の布告となつた。合衆國は、世界をば民主政治のために安全ならしめざるべからずと高調した。ゲルマン同盟の殘る三國に對しては、合衆國は、國交を斷絶しただけに止めて置いたが、年の末に至り、二元帝國も、亦、合衆國から戰を宣言された。

合衆國の一度、參戰に決するや、必要な軍費を支出して、銳意、之が準備にとりかゝり、五月には、徵兵令を布きて二十一歳、乃至、三十一歳の壯丁を徵集することとし、新兵を教練し、ドイツ潛水艇政策の果實たる船腹の缺陷を填充すべく、その造船能力のすべてを傾けて船舶の建造にとりかゝつた。ルーズヴェルトや、將軍ウッパの鼓吹した尙武思想は、民主政治の合衆國をして、倏忽として、一大軍國を實現せしめんとするものであつた。

協商列國は、皆、その有力なる政治家、軍人を特派使節としてワシントンに派し、とりあへず、彼等の心からなる敬謝の情を合衆國の上下に致さしめた。實に、合衆國の此危機に於ける舉兵の決心は、協商列國をして地獄に佛の思ひあらしめたのであつた。



## 二八二 名と實とに於て宛然たる世界戦争の實現

最大の中立國たる合衆國の擧兵は、層々たる多くの小中立國をして、彼と其の向背を共にせしむる機端となつたもので、合衆國を後見國と仰げるキウバ、パナマを初めとし、中アメリカ、南アメリカの共和國は、續々としてドイツに宣戦し、然らざるも、之と外交上の關係を絶つた。ラテン・アメリカのエー、ビー、シー三大國の中で參戦したものは、ブラジルだけだつたが、ヨーロッパの方面では、これまで他の中立國の思わくを憚つて、斷乎たる處分をギリシアに加ふることが出來ず、之をして永く曖昧なる中立に彷徨せしめたりし協商列國は、六月を以て終にドイツ最良の王に迫り、その位を次子に譲らしめ、ついでドイツに宣戦せしめた。東洋に於てはギリシアの參戦に次で、暹羅、及、支那も新に戦渦に投ずることになつたから、日本の崛起によりて東洋の局面にまでも波及した全ヨーロッパの大戦争は、今や新世界をも掩有して、名實、共にまごふ方なき世界戦争とはなつた。今は、地球の全局面を以て戰場とする此曠世の大戦亂に於て、中立を保ちつゝあるもの、ヨーロッパでは、その交戦諸國と多く擇ばざる程度の辛苦を嘗めつゝあるのスイス、及、スカンディナヴィアの三王國、並に、戦争の成り金國の一たるイスパニアの五個國と、アメリカに於ては、メキシコ、チレ、アルヘンチナの數國あるに過ぎざるに至つた。

ドイツの諸敵國、就中、イギリスと合衆國とが、多くの中立國に説きてドイツに宣戦せしめたるは、必しも、之によりてドイツに對する新なる戦友を得んがためではなかつた。蓋し、彼等の多くは、その資源に於て、大に協商列國を援助するに足るほどのものではなかつたからである。協商列國には、列國參戦の此好機に乗じて、ドイツが經濟的、財政的、政治的に淺からざる關係を有する南アメリカ、及、支那に於ける敵の勢力を蕩掃しようとする目論見より外なかつたのである。

## 二八三 ドイツ無制限潜水艇政策の發展

無制限潜水艇政策は、明なる軍部の勝利で、それだけ、行政部の統制がきかなくなり、武人がドイツの政界に跋扈跳梁する様になつて來た。今はカイゼルの威力を以てするも、兎も角も、戰場に大なる過ちを演ぜずに、國民の信用をこれまで繋いで來たサーベル連を制することが出來なくなつた。ヒンデンブルグとルーデンドルフとは、ドイツ國民の偶像で、祖國をば刻下の困難から救出し得べきもの、二人を措いて外にはなしとされ、全國の新聞紙は、筆を揃へて彼等の功業を頌揚し、之をば勝利の徵象と仰いだ。別して、天性の司令官たる剛毅果斷のルーデンドルフの性格は、著しく彼の人となりを國民の前に顯露し、國民そのものをして、益、彼から逃るゝこと能はざらしめたのであつた。かくて軍部は、着々として彼等の意の如くならざるものをば政府部内から驅除し、無



制限政策の敢行されてからまだ半年にも満たざるに、サーベル連に阿附して、徹底的武力主義に雷同することを肯んぜざりしペートマンを逐ひて、彼等の傀儡に過ぎざる一官僚を宰相の椅子に据ゑた。これからは、行政部内に於て、軍部の武力主義を阻まんとするものは容赦なく排斥され、軍閥の號令政治が實現された。

さりながら、極端なる併合主義者たる汎ゲルマニストと結んだる此軍部の横行は、ドイツをば、益、全世界の憎まれものたらしむるものだったので、議會の穩健者流は、之を憂ひ、七月十九日、終にドイツの求むる所のもの、無賠償、無併合の平和に外ならざるを決議するに至つたのであつた。陸海軍の將軍連は、最も議會の此行動に慍らず、彼等は、これ徒に敵をしてドイツの内訌を見透さしむるの愚擧であると非難した。同年のセダンの戦勝記念日に、チルビッツ、及、ドクトル・カッブを領袖とするドイツ祖國黨のケーニヒスベルヒに興されたりしは、平和黨に對する反動でもあつたのである。

ドイツ政府が無制限戦によりて撃沈を期したりし噸數は、毎月、六十萬噸であると云ふことだつた。一九一五年の春、初めて潛水艇戦を宣言した時には、最初の三ヶ月間の撃沈噸數は、約十四萬噸だつたが、無制限戦となつてからの最初の三ヶ月間のは、之が十餘倍に達して居つた。即、一九一七年の二月と三月とは、五十萬噸を越え、之につぐ、四、五、六の三ヶ月は、各六十萬を突破し

たから、此率で行けば、イギリスの勘忍の程度は、遅くも年の十一月を過ぐる事はあるまいと云ふことで、イギリスは、一般に憂色に包まれたのであつた。獨り首相、ロイド・ジョージのみは、極めて前途を樂觀しては居たけれども、それですら、八月には、イギリスの大戦前に有せし船舶の噸數の其四分の三に減じたるを告白し、形勢の重大を認承せざるを得なかつた。けれども、七月以降、撃沈噸數は、大體に於て月を逐うて低下し、えらい意氣込みで始められた無制限戦も、ドイツ陸海軍の當局者の目論見通りに甘くイギリスを屈服せしむることは出来なかつた。一九一八年一月に於て、ドイツの所有潛水艇數の一四三隻であつたと云ふに、同年の四月には、イギリスの危険期は全く過ぎ去り、四月十七日、時のドイツ海相は、帝國議會の委員會に於て、無制限戦によりて、近き將來に戦争を終了せしむる事の見込なきを白狀するに至つた。ドイツの此失敗は、色々の原因、色色の事情による。元來、潛水艇戦では、ドイツは、彼の與國から大なる助力を期待することが出来なかつた。破壊艇の修繕補缺でも、乗組將士の教練でも、彼は、大體、自分の一手で之を引き受けて行かねばならなかつた。然るに、之に反して、中立の海國の参戦のために、協商列國の海的位置は、次第々に鞏固になつた。ギリシアの中立は、一九一四年十一月のダルダネルスの砲撃この方、協商列國の陸海軍によりて幾度となく破られたが、彼が参戦この方は、列國は、公然、その沿岸、及、島嶼を根據として、ゲルマン同盟の地中海に於ける潛水艇戦に臨むことが出来た。飛行機、驅



逐艦等、潜水艇の恐るべき敵の外に、防禦網なり、偵察船なり、水中彈なり、「潜水艇驅除船」なり  
の案出も、これ、亦、ドイツの此貿易破壊器に對する有力なる新武器たるを失はなかつた。而して  
ドイツの潜水艇に對する此對抗戰に於て、最大なる助力を協商列國に與へてくれたものは、言ふま  
でもなく合衆國の海軍であつた。

### 二一八三 合衆國海軍の援助

合衆國のドイツに宣戰するや、ワシントン政府は、とりあへず、シムス Sims 中將をヨーロッパ出  
征艦隊の司令長官に任じ、イギリスに渡らしめ、シムスは、直に司令部をロンドンに設けることに  
した。元來、合衆國は、其地理上の關係から、近時に於て、ヨーロッパ列強ほど、海軍の擴張に熱中  
しなかつた。従て一九〇九年から一一年までには、毎年二隻づゝの弩級艦を、一二年、一三年には、  
一隻づゝを、一四年には、三隻の起工を命じたに過ぎなかつたが、世界戰爭の勃發するに及び、銳  
意、海軍の擴張に努力して、最新式の弩級艦、十四艘を有する迄となつた。彼には、此外に、百を  
以て數ふる水雷艇、及、驅逐艦あり、六十を超ゆるの潜水艇があつたから、此絶大の勢力を擧げて  
の彼が救援の、ドイツに對する脅威を加へたりしは、言を須たなかつた。此大海軍の中、最初にヨ  
ーロッパの海面に渡りしは、水雷艇、驅逐艦、砲艦等の小艦艇のみだつたが、一九一七年の末には、

大艦の數々も其後を追うて行つたから、ドイツとの休戰條約の締結された一九一八年十一月には、  
シムス中將の指揮の下に立ちし合衆國海軍の將卒は、士官、約五千、卒、七萬六千を數ふるに至つ  
たのであつた。

けれども、參戰の最初の六ヶ月の間、合衆國の海軍省は、協商列國とまじめに協力することを避  
くるの風があつた。シムス中將の政府の命によりてヨーロッパに渡らんとするや、海軍當局者は、彼  
に向て、イギリスのために徒に火中の栗を拾ふことを爲さざれと訓令し、宣戰、半歳の後に至つて  
も、その因循を改めなかつたので、シムスは、屢、海軍省に督促して兵力増援の手段を講じて貰は  
ねばならなかつたが、兎も角も、合衆國海軍の來援があつたばかりに、協商列國の運送船は、  
初めて十分の護送船を付けることが出來、それだけ、潜水艇の急襲を被る機會が減じて來て、一九  
一七年五月二十日には、最初の護送船は、合衆國から初めて無事にイギリスに渡つたのであつた。  
これぞ潜水艇戰の歴史に一回轉期を劃するの出來事であつた。合衆國の水雷艇、及、驅逐艦の獨立  
の活動も、亦、大にドイツ潜水艇の暴行を制したもので、これがため、最多く潜水艇のあはれある  
いたアイルランド海、ブリストル海峡、並に、アイルランドの西の沖合での遭難船の數が段々と減  
じて來た。合衆國海軍の當局者の、合衆國海軍の協力なくしては、協商列國は、此戰に勝ち得な  
かつたらうと言つたのも、必しも、誇張の言ではないのである。



## 第五十章 ドイツ軍、最後の決死戦

## 二八四 イタリアの陸軍、潰ゆ

ロシアに革命が起り、労兵會の權力を己が一手に壟斷せんとしてから、平和宣傳の彼が國際的運動は、大分、各方面にその波響を及ぼして行つた。一九一七年八月のローマ法皇の講和の提議も、此意味に於てイタリア人を動かしたること尠からず、別して、此國の工業上の中心地では、賃銀上の不平に本づくストライキが起つて、他の地方にまでも傳播して行つたので、政府は、之に嚴重なる壓迫を加へ、罷工に加擔した労働者をば、罰として戦線に送ることにして之を防がうとした。けれども、此處分方法は、ロシアの労兵會や、ドイツの旨を受くるものゝ、イタリアの労働者に對する宣傳と共に、却て、敗北主義をイタリア兵士の間に鼓吹する武器となつたに過ぎず、困難なる山地戦で、漫然、一進一退をくり返すのみにて、二年有半にも及んだ戦局の上に、何等はかばかしき發展を示すに至らず、漸く戦に倦みたる將卒は、和を想ふ様になつて來た。而して一面に於て、ゲルマン同盟は、東部戦線に有する彼が兵力の餘剰を利用すべき方面に關し、機密に畫策しつゝあつたから、交通上の支障から、西部戦線の聯合軍より俄に大なる援助を待ちまうくることの出来なかつたイタリアの陸軍は、彼自らの安全に付て掛念せざる譯には行かなかつたのである。

ドイツは、先づイタリアに打撃を與へんと欲し、有力なる援軍をイタリアの戦線に派出した。一九一七年十月二十四日、イタリアの陸相は、議會に於て、彼の戦線の安固をうけ合つたるに、その夜、ゲルマン同盟の聯合軍は、カポレット Caporetto の町を目標けて強襲し、大にインソンの戦線を突破し、ポリシエウイキのクレーダターの後二日、ピアヴェ河の線に到つて初めて喰ひ止められた。敗北主義の病患は、殆んど遺憾なく、イタリアの塹壕にしみ込んで居たこととて、全軍の潰亂は、蕩盡的で、イタリア軍の失ふ所、將士二十六萬、砲二三〇〇門、彼が各種の軍用材料の少くとも三分一は、その最も豊沃なる數州と共に敵手に落ちてしまつた。内閣は、忽にして瓦解を遂げた。イギリス、フランスは、急ぎその陸軍を割いて友國を救ひ、十一月六日、ラバロに協商列國文武の大官を集めて善後の策を講じた。カポレットの潰敗は、協商列國の合致に一步を進むるの動因となつたものだが、此後、五ヶ月と立たぬ中に、西部戦線に於ける聯合軍の危機は、彼をして、愈、その指揮の統一を斷行せざるべからざるに到らしめたのであつた。

## 二八五 西部戦線に於けるドイツ軍の大躍動

イギリス、及、フランスは、西部戦線に於けるソムの戦の後、一九一六年秋冬を以て大に再舉を謀り、前線に數條の新道路を築き、汲々として攻勢準備に怠る所なかつたので、ドイツの新參謀總



長ヒンデンブルグは、之が裏を掻き、此等の準備をば無効に歸せしむべく、翌年三月を以て、周到なる用意の下に、彼がフランスに於ける占領地の八分の一を撤去、攻防、共に地の利を得たる所謂、ヒンデンブルグ線に退いた。ドイツ軍は退却に際して、此等の占領地に於ける一切の生物を盡し、敵の用に供せらるべき處あるすべてのものを破壊し、一本の樹木も、一戸の建築物もなきに至らしめたから、聯合軍は、宛然、荒涼たる沙漠の中に入るの感なきを得なかつた。かくてドイツは、大陸の戦線に守勢を採りながら、同時に宣言せられたる無制限潛水艇政策を以て、大に海上に攻勢を採つたのである。

けれども、合衆國海軍の赴援は、ドイツの將に握らんとせし勝利の月桂冠をば、無残にも、彼の手から振ぎ取つてしまつた。かくて海からの攻撃によりて、協商列國、就中、イギリスを屈するところが出来ぬとすれば、ドイツには、再、大陸に歸り、陸を以て海を制するより外に採るべき道はなかつた。彼には、こゝに唯一の希望と光明とが存するやに思はれた。ロシアの陸軍が潰亂し、ゲルマン同盟のロシアと單獨講和することとなつたるは、此大計畫の幸よき發展をドイツに保障するものでなければならなかつた。西部戦線に於けるドイツ軍の指揮に任じたルーデンドルフは、彼が大飛躍に先つて、先づイタリアに攻勢を採つたのであつた。

西部戦線に於て攻勢を採るべく、ルーデンドルフが彼の幕僚に命じて初めて案を立てさせたのは、

彼がイタリアに於ける攻勢の前夕たる一九一七年十月二十三日のことであつた。其目的は、もとより、我が數の優勢に乘じ、合衆國陸軍の到來に先つて、決戦を敵に挑み、之を壓屈しよう云ふに外ならなかつた。之に付ては、ウェルダンの兩側を撃たうと云ふ案や、イギリスの戦線に迫らうと云ふ案があつたが、ルーデンドルフは、後案を採り、之が決行の時機を來春二月の末、乃至、三月の初と云ふことに定めた。イギリスの戦線のどこに攻撃地點を擇ぶかは、これからまだしばらく疑議された。何は兎も角も、砲門と兵とに於て壓倒的の優勢を持せざるべからざることとて、十一月の初から、ドイツは、東部戦線の軍隊の西送を初め、翌春三月の末には、無慮二一〇個の師團をこゝに蒐集した。内、一一〇個は前線にあり、残る一〇〇個は豫備隊として保存され、ドイツ軍は、聯合軍に對して、少くとも五十萬の優勢を保ち得たのであつた。

ドイツ軍の壯舉を決行するの時期は、遷延して、一九一八年三月二十一日とはなつた。イギリスの司令部では、已に是より先に、敵がイギリス軍の右翼を伐つ準備を完うしたるを偵知し、彼の攻撃の二十日、若くは、二十一日を以て開始せらるべきを豫期して居つた。ルーデンドルフの此際計畫は、他なし、イギリス軍とフランス軍との接合點に猛烈なる攻撃を加へ、一つには、アミアンに向ひ、イギリス軍を海峡方面に壓迫し、又、二つにはパリを目標とし、フランス軍を南に壓迫しよう云ふにあつた。ドイツの砲弾は、先づ雨の如くにイギリスの戦線に注がれ、次で歩兵の突



撃を以て、大にイギリス軍を破り、攻撃開始の第三日には、世人は、早くもパリ撤退の危機を口に  
する迄とはなつた。二十三日からは、七十五哩の遠きに据ゑつけられたドイツの長距離巨砲のバリ  
砲撃も始まり、フランスの民心に大なる威嚇を及ぼした。當時、ドイツにして若し騎兵の大集團を  
ば、敗れたるイギリス軍の右翼に放つを得んか、戦争の運命は實に測り知られなかつたのである。

ルーデンドルフの西部戦線に於て採つた攻撃方法は、彼の東部に於て採つたものとは少しく選を  
異にした。東部で、一時に戦線の二つの地點を伐ちたりし彼は、今回は、一ヶ所に限り、三月から  
六月までの間に、月毎に一回の大攻撃を敵に加へて行つた。かくてイギリス軍は、四十哩の深さを  
追はれ、五月の攻撃では、ドイツ軍は、再、パリから四十哩の所まで肉薄し、六月の初には、聯合  
軍の地位は、危機、一髪に薄つたのであつた。しかしながら、敵の攻撃の一時に一地點に限られて  
居つた所から、聯合軍には、彼のやがて喫すべき次の攻勢に對して、豫め準備を立てるの餘裕が與  
へられたのであつた。

## 二八六 聯合軍、攻勢に轉ず

### (一) 聯合軍の指揮の統一

曩にイギリス兵のフランスに渡るや、イギリスのキチナー陸相は、フレンチ主將に訓令して、彼

の指揮權の、全然、獨立にして、いかなる場合、いかなる意味に於ても、他の協商列國の將軍の命  
令の下に立つが如きことなかるべきを告げた。イギリスの大陸出征軍は、カイゼルの嘲弄して、フ  
レンチの見すばらしき小軍隊と呼んだ所のものですら、尙、且、獨立の國軍であつた。況や、その  
増長に増長して、數百萬を數ふるに至りし一九一六年のイギリス軍に至ては、之を他國司令官の統  
制の下に置くべく廣大に過ぐるものであると言はねばならなかつた。一九一七年の重要な時機に  
於て、西部戦線の聯合軍は、名を聯合軍と稱するも、ベタン *Beaumont* を司令官とするフランス軍と、  
ヘーグ *Hague* を主將とするイギリス軍とから成り、二つのものを結びつくる何等常置の機關もなか  
りしは、かゝる事情によるのであつた。これ實に十八世紀の初のイスマニア戦に於けるオラン  
ダのユージェニスと、イギリスのマールボローとの關係、及、是から一百年の後のウォーテルロー戦  
役に於けるプロシアのブリュッヘルと、イギリスのウェリントンとの關係を繰り返すものであつた。

かゝる作戰の方法の、決して速に究極の目的に達すべき所以に非ざるを憂ひたりし人々は、屢、  
指揮の統一を唱へたが、之が實現は、中々、容易の業ではなかつた。一九一七年二月、イギリスとフ  
ランスとは、カレー會議の結果として、一九一七年度、西部戦線にとるべき攻勢作戰の指揮をば、  
フランス軍司令官の手に委ねることにしたが、彼の失策のため、折角これまで開展した指揮權統一  
の問題は、俄に頓挫してしまつた。従て年の七月、パリに催されたイギリス、フランス、イタリア



の參謀總長會議でも、作戰統一の重要なことが認められたに拘らず、聯合軍を統ぶべき總司令官の任命を見るに至らなかつた。十一月、イタリアの大敗戦に及び、急ぎラバロに會議した上記三國の首相も、總司令官を設くるの案を審議したけれども、ロイド・デルジョヂは、之に同意を濫つたのでものにならなかつた。されど、作戰上に於ける統一の缺乏の、屢、各方面に於ける失策の原因たりしは、否むべからざるの事實で、バルカン方面での多くの不首尾は、就中、之を證明するので、イギリスと雖、或種の統一機關を設くるの議をば阻み得ず、終に、最高軍事會議なるものを置き、西部戰線關係國の首相と、各一人の内閣員とを以て之を組織すること、及、同盟列國總參謀部を新設し、フランス、イギリス、イタリアの三將軍を之が委員とすることを定めた。但し、かくしてヴェルサイユに設けられた此機關には、執行權が賦與せられてはなかつたし、又、之に列する各員は、一一、訓令を本國に仰がねばならん不便を有するのであつた。

かゝる機關は、ないには優るけれども、極めて不完全だつたので、合衆國の參戰に及び、彼は、特に熱心に、計畫、並に、指揮の統一を求めて止まず、彼の一九一七年十二月一日に於ける最初のヴェルサイユ最高軍事會議にその代表員を列せしめてからは、層一層に、此議を唱道した。

一九一八年一月三十日、乃至、二月二日、クレマンソーを議長として、ヴェルサイユに第三回の最高軍事會議が開かれ、此會議では、近く期待せられつゝある西部戰線に於けるドイツ軍の大攻勢に

備ふべく、フランス、イギリス、合衆國、及、イタリア各一人の將軍を出し、之を以てフランスのフォーシュ Foch 將軍を長とする軍事執行會議を組織すること、此方法によりて各國軍司令官をして協同せしめ、一般的の豫備隊をば、該軍事執行會議の命令の下に置き、必要に應じて之を用ゆる事の權限を會議に附與することを定めた。此際、イギリスの委員の中には、委員制度では、假令、之に指揮の權を與へたにした所で實效不能であるとして、反對を唱へたる者があつたが、イギリスの一軍事記者も、亦、右の趣を洩れ聞き、二月十一日の新聞に之をすつば抜き、イギリスの當局者の、自ら大陸出征軍司令官の權限を殺ぐに至つたるを尤めた。イギリスでは、ヴェルサイユ軍事會議の此決定は、體面論やら、憲法論上の見地からして、例に仍て不評判だつたのである。ドイツは、以上のすつば抜きにより、聯合軍の計畫、及、指揮の次第に統一の方針に向ひつゝあることを知つた。幾もなくして、三月下旬、ドイツ軍の大殺到は襲來し、此非常重大の秋に臨んだる聯合軍は、今は、小我の主張に拘々たること能はざるに至つたので、イギリスの陸相は、急ぎフランスに渡り、彼の軍司令官と共に、三月二十六日、ドーラン Doullens の小市に、大統領を初めフランスの諸星と會商し、意を決して新に聯合軍の總司令官を置き、フランスのフォーシュ將軍を推して之に任ずるの議を定むるに至つた。

## (二) 合衆國陸軍の渡來



西部戦線に於ける聯合軍は、その號令の一途に出づるに至りしと同時に、合衆國陸軍の大舉來援を得て、大に其強味を加へた。合衆國のドイツに宣戦したりし當時に於ては、彼の有せし正規軍は十萬五千あり、その中の三萬五千は、遙にフリビンに派遣されて居つたが、合衆國議會は、とりあへず、正規軍をば三十萬、ナショナル・ガードをば四十三萬とし、尙、又、ナショナル・アーミー六十萬(後一一八萬に増した)を作ることを決した。かくて、三月に於けるドイツ軍の大攻勢に接し、フォーシユ、新に總司令官の印綬を佩び、合衆國出征軍の之が麾下に統べらるゝこととなるや、合衆國將卒のフランスにあるもの、僅に三十四萬三千を算するに過ぎず、數の點に於ては、それらの國民に向て、既に最大限度の誅求を強ひたるイギリス、及、フランスは、最早、此上、兵員を徵收するの餘裕がなかつたので、戦線に於て、敵に對して優勢を持せんとせば、新手の合衆國をして之が供給の任に當らしむるより外なかつた。これ、危機の一髮に迫るに及び、三月二十七日、ロイド・ヂョルヂの急電をワシントン政府に發して、彼の一日も早く援兵をヨーロッパに派せんことを求むるに至りし所以であつた。そこで、合衆國は、大急ぎで派兵の員數を増加し、四月から七月までの間に、百萬に垂んたる大軍を送り、休戰條約締結の時に於て、ヨーロッパへの出征兵士をして、無慮、二〇〇萬二千餘に膨脹せしめたのであつた。これ等の兵士の中の四割以上は、合衆國の船舶を以て、又、その六割二分は、合衆國驅逐艦の護送によつて送られたのであつた。

この俄か造りの合衆國陸軍の幾多の缺點を免れざりしは、止むを得ざる所であつた。彼等の中には、前科ものが少からず居つたし、目に一丁なきものが全數の七分以上を占めて居ると云ふ有様だつた。合衆國陸軍の効果は、戦線の上に直接に實現せられるまでには至らなかつた。彼の影響は、寧ろ精神的の方面にあつたのである。

(三二) ドイツ常勝軍の破綻、並に、その退却

ドイツは、西部戦線に攻撃を開始してから一一八日に至り、七月十五日に至り、又もや、攻勢を採り、數ヶ所に於てマルヌを渡つた。時に、ルーデンドルフ麾下の師旅は、數回の突進に少からざる損害を被り、今は、餘す所、僅に一四五個師團と、豫備隊十五個師團とに過ぎなかつた。そこで、これまで陰忍して、敵の伐つに任しつゝあつたフォーシユは、敵の銳氣の次第に銷盡せるを見て、乗すべきの好機、正に、到れりとし、十八日を以て、エーヌ河からマルヌ河に至るの線に於て攻勢に轉じた。これ實に、四年前のマルヌ役をくり返したもので、之がために、側面を脅されたドイツ軍は、再、河を渡つて退却するの止むを得ざるに至り、かくて八月の初に至つては、攻防、所を異にして、ドイツ軍は、守勢に立つこととはなつた。

こゝに於てか、フォーシユは、八月八日、更に命をヘーグに傳へて、之をしてソム河の線に敵を伐たしめたが、此後、ドイツ軍の士氣は、全く弛廢して、再、收拾すべからざるの地位に陥つてしま



つた。そこでルーデンドルフは、具に軍の状勢を述べて、ドイツの向後に於て採るの外なき守勢作戦では、平和を實現し得る見込なきにより、今は、外交上の手段により、戦争停止の方法を講ぜざるべからざる旨を政府に具陳し、よつて十四日、御前會議をスバーに開くこととなつた。この際、オランダ女皇に仲裁を乞はんなどの説も出たが、ともかくも、今は是非なく、ベルリン政府は、各黨の首領を集めて和議實現の急なるを告げ、由てロンドン、及、パリに空中攻撃を行ふことを停止したが、その間に、聯合軍は、一旦、逃げ足のついたドイツ軍に追撃を加ふことを止めなかつたので、九月の末には、ドイツ軍は、終にひた押しに押されてヒンデンブルグ線に至り、十月の初には、終には、この堅き防禦陣地からまでも追ひ出されてしまつた。今は、ドイツ軍を本國に追ひ込むは、唯、時間の問題たるに過ぎなかつた。

常勝のドイツ陸軍の、此いかにも急激なる頽陶は、色々の原因によるのである。今其一、二を擧げんか、大戦の際、ロンドンに駐劄せしドイツ大使、リヒノウスキー Michnowsky のものせし手記の影響は、その一つである。リヒノウスキーは、彼が此小き備忘録に於て、大戦前に於けるドイツ外交のいかに權變を弄せしやを露白し、ドイツの膨脹主義者、及、軍閥の陰謀の實狀をさらけ出したのであつた。一九一六年春の彼が此秘書は、夙に漏洩して世上に行はれつゝあり、事に迂なるドイツ國民をして、往々にして、我、欺かれたりの感を懐かしめたのであつた。東部戦線から、ポリ

シニウイキーの洗禮を受けて歸り、以て西部の大攻勢に加はつた將士の平和主義の鼓吹は、その二つである。一九一八年二月に、ノースクリフを長としてロンドンに設けられた、對敵宣傳局の周到細心なる組織的宣傳の効果は、その三である。就中、この最後のものがあらゆる方法を盡して、ドイツ、並に、その與國の兵士、及、人民に、戦線、並に、一般政局の真相を告ぐるに努めたるは、敵國民心の沮喪に貢獻することの尠少なからざるものであつた。政府から虚報を吹きこまれたり、さなくも、事實の報道を隠蔽せられたりした各國の人民も、ドイツ潜水艇政策の成功の見込なきを耳にしたり、合衆國二百萬の大軍の續々としてフランスに渡來しつゝあることを聞いたりしては、勝利の機會の、絶對に、四國同盟の手から逸せられたるを感づかすには居られなかつたのである。

## 第五十一章 大「中歐」系統の崩壞

### 二八七 ブルガリア、先づ「中歐」同盟を脱す

「中歐」の敵である所の、アングロ・サクソンのでもあり、ラテン的でもある協商の大系統は、最近の危機に至つて、漸にして作戦不統一の非を覺つたほどに、雜駁の諸要素から成るものだつたが、此點に於ては、四國同盟は、軍事上は勿論のこと、經濟財政上にも、外交上にも、殆んど遺憾なきまでに統一されて居つた。然るに此美事なる軍國的の「中歐」系統も、軍事上の敗北が緒となつて、



俄然、外交上の破綻を實現し、ブルガリアの脱退を見るに至つたのであつた。戦局の遷延による國民の困憊は、何處も同断ではあつたが、一九一八年の旱魃は、わけても、ブルガリアの國民に煩ひを及ぼした。ロマニアの降服によりて出来上つた一九一八年五月七日のブカレストの平和條約に關しては、ブルガリアは、國境の改訂に付て、はしなくも、彼の與國たるトルコと相争うた。問題となつた所は、ドブルーチアとマリツァ河とで、ブカレスト條約では、ブルガリアは、彼が一九一三年の條約によりて失つた南部ドブルーチアだけを恢復し得たるに過ぎず、殘るドブルーチアの北部は、ロマニアから四國同盟が譲り受けると云ふことになつて居つた。ソフィア政府の希望の、北部ドブルーチアをも彼の掌裡に併吞するにありしは勿論だつたが、トルコは、もとより、之をブルガリアに與ふるを欲せず、ドイツは、之が調停に困り果て、之をばトルコとブルガリアとの共同の領土たらしめようかと考ふるまでになつて居つた。アドリアノブル附近なるマリツァ河の右岸と、それから下流の同左岸の地とは、ドイツが一九一五年秋、ブルガリアをして「中歐同盟」に加擔せしむるため、トルコを要請して割かしめたる所だが、トルコは、今や、之が恢復を欲して止まないのである。之を要するに、ロシアとロマニアとの潰敗は、トルコをしては、バルカン、竝に、西アジアに於ける彼が舊地位の復興を念とせしめ、又、バルカンに於けるスラブ民族の唯一の勢力家たるブルガリアをしては、敗竄のセルビアや、ロマニアを犠牲に供して、大ブルガリア建設の理想を實現せんことを冀

ふに至らしめたのである。然るに、ドイツは、マリツァ河に關する要求に關しては、却てトルコを支持して、中々に、ブルガリアの要望を充ててくれなかつたので、ブルガリア國內に於けるドイツ最員の旗色は、漸にして振はず、一九一八年六月には、久しく政權の衝に立ちしドイツ黨の内閣は倒れて、平和主義を標榜する反對黨、之に代ることとなつた。同時に、サラニカに屯せる聯合軍の勢力も加はつて來た。そこで、ソフィア駐劄のドイツの使臣は、此まゝに推移することの危険に寒心し、本國に向て、頻にブルガリア方面の兵力を増加するの急務たるを説いたが、西部戦線の大殺到にすべてを打ち込んで居つたドイツ陸軍の首腦の、これを顧るに至らざりし中に、早くも、破綻の緒が始まつた。サラニカの聯合軍は、之に力を得て、九月中旬、大にブルガリア軍をマケドニアに破つたので、ソフィア政府は、月の末、惶惶、「中歐同盟」と絶ちて、協商列國と休戰條約を結び、武器を引き渡し、その陸軍を復員し、一切の占領地を撤退し、聯合軍のブルガリアに入り、又、その鐵道の支配權を占取することを得しむることにした。十月初、ブルガリア王は、在位三十有一年にして、その位を皇太子に譲つて退いた。

聯合軍は、今や、南方から二元帝國を脅し得るに至つた。トルコは、ゲルマン同盟との聯絡を斷たれてしまつた。さきに「中歐同盟」と單獨講和したロマニアは、再、ゲルマン同盟に背きて協商列國との續りを戻すことになつた。



## 二八八 トルコの降服

次に進退を決すべきは、トルコの番であつた。ブレスト・リトウスクの平和條約は、彼に向て大なる前途を開いたものであつた。ロシアの解體により、トルコは、黒海を彼自らの湖水となしたりし偉大なる往時を回想し、此機に乗じて、アルメニア、及、カザカスを制し、尙も進んで新建のウクライナからそのクリムの地方を回收せんことを欲するに至つた。ドイツのトルコに期する所は、寧ろイギリスをば、メソポタミア其他の地方から驅逐して貰ふことにあつたが、トルコは、多難なるこれ等の遠征よりも、黒海沿岸の經營に當り、新なるトルコを此方面に築き上げんことを欲したのである。トルコの興味は此の如くにドイツの要求と齟齬して、専ら黒海や、バルシアの方面に傾注せられたため、トルコに對するイギリスの壓迫は、自ら次第に加はつて來て、一九一八年七月の頃からは、イギリスの飛行隊は、頻々としてコンスタンチノブルを威嚇するに至つた。

トルコのアジアに於ける領土の中、アラビアは、獨立したし、メソポタミアも、已に敵手に落ちた。エジプトを策源地としてバレスチナに派遣されたイギリスの遠征軍は、一九一八年の末を以てエルサレムに入つたが、しばらく休養したる後、翌秋、再、その活動を初めて、行く／＼シリアの各地を略し、十月下旬には、終にアレppoを陥れ、北ぐるを逐うて、ムルタンが覇業の基地たりし

小アジアを侵さんとするに至つた。會々與國たるブルガリア、先づ、盟を破つて敵に降つたので、十月の初には、流石の青年トルコ黨政治家も、その多年、把持せし政權を委棄して、コンスタンチノブルを脱走するの止むなきに至り、主和的内閣、之に代つて政局に立つことになつた。かくて、月の末、トルコの外交官の、ベルンに於てイギリス、及、フランスと將に單獨講和を締結せんとしつゝ、ありし間に、トルコは急ぎ、イギリスの艦隊司令官と休戰條約を締結し、即時、全く復員し、その一切の軍艦を引き渡し、その一切の軍略上の要地を聯合軍に委し、兩海峽の自由通航を許し、各地の屯兵を撤し、捕虜を解放することを條件として降服することになつた。聯合艦隊は、是に於て、十一月十三日を以てコンスタンチノブルを占領した。コンスタンチノブルの東ローマ帝國の首府たりしこと一〇〇年、トルコの首府たりしこと四七七年である。イギリス、フランスは、とりあへず、共同の宣言を發して、一、トルコに壓制せられたる總ての人民をば解放すること、二、シリア、及、メソポタミアに土着の政府を建つること、三、地方的自發、經濟的發展、並に、教育、及、公平なる司法行政を奨励すべきことを約束した。

## 二八九 何をか來るべき平和の基準とはする

此の如き有様で、同盟四國中、一番弱き道連れであつたブルガリアとトルコとは、遂に力、耐へ



すして、早くも落伍したものだから、免るべからざる最後の運命の漸く近づき來つたること、これ實に、ドイツと二元帝國との共に覺悟せざる能はざる所であつた。戦線の非況は、彼等をば、益、平和に向てあせらした。

愈、敵味方をして講和談判を開始せしめんがためには、双方の共に依據するを肯んする平和の原則基準の豫め與へらるゝを要する。戦争目的に關しては、兩大陣屋それ〴〵己の求めんとする所のものを並べ立て、は居るけれども、何れも、手前味噌で、之では話を纏めることは勿論、之を進めることすらも容易の業ではない。所が、此點に關し、合衆國は洵に恰好なる標準を立て、くれた。ゲルマン同盟に向て宣戰しては居るけれども、自ら聯合國 Associated Power と稱し、協商列國と同列たる事を欲せざるの彼は、彼の中立的地位からして、屢、大戰を終局すべき平和の基礎たらざるべからざる諸原則を揭示するを怠らなかつた。就中、一九一八年一月八日に於ける合衆國大統領の所謂十四條項と、二月十一日、國會に述べた四個條と、及、九月二十七日の演説とは、其最も重要なものである。十四條項左の如し。(一)秘密の協商、乃至、條約を排すること。(二)國際的行動によりて閉鎖せらるゝものを除き、平時にも、戦時にも、領海以外の航海を絶對自由にする事。(三)一切の經濟上の障礙を出来るだけ撤し、貿易の條件を均等とすること。(四)軍備縮小の適當の保障を立すること。(五)植民地の要求をば、すべて公平に處理すること。關係人民の利害は、之に

對して權利を主張する政府の要求と對等の意義を有すべきものなること。(六)すべてのロシア領より撤兵し、ロシアに自治の十分なる機會を與へ、列強の之を助くべきこと。(七)全くベルギーを恢復すること。(八)フランスより撤兵し、アルサス・ローレーンをフランスに返還すること。(九)民族主義に則りて全イタリアの國境を改むること。(一〇)オーストリア・ハンガリアの人民に自主的發展の機會を與ふること。(一一)ロメニア、セルビア、モンテネグロを撤兵し、セルビアには海への出口を與へ、バルカン列國の關係をば、服従と民族主義とによりて定むること。(一二)オトマン帝國のトルコ人ならぬ諸民族に自主的發展を確保し、ダルダネルスをば、永久に、一切の船舶に開放すること。(一三)獨立のポーランドを建つること。(一四)すべての國家の政治上、領土上の獨立を保障し、これを以て、國際聯盟を作ること以上。これ、民族主義の適用によりてヨーロッパに大改造を加へ、且、民主的平和の理想を徹底しようと云ふに外ならなかつた。が、合衆國大統領の兩院に於ける二月十一日の演説は、更に此永續的平和に説明を加へたものであつた。彼は、之に四つの原則を設けて居る。第一、すべての最終決定は、公正を基礎とせざるべからざること、第二、國土人民をば、漫然、交換的に一の主權より他の主權に移すと云ふが如き事あるべからざること、第三、すべての領土上の裁定は、競争國間に於ける折衝を主とするものたるべからず、關係人民の利益を本位とするものたらざるべからざること、第四、すべての妥當なる國民的要望には、之が爲に平和を擡



亂すべき争因を發生せしむるの虞なからん限り、出来るだけ之を充足せしむべきこと、即、是である。大統領の九月二十七日、ニウヨルクに於ける演説は、平和實現の方法に關して一層、具體的に突き込んだもので、彼は、殊に國際聯盟を結ぶことはいかに根本的の要件であるかを其中に高調した。彼は、本問題に關連して五つの條項を擧げて居る。(一)すべての人民に對等の權利を認め、公正不偏を以て事に當り、苟も彼此の間に依估の沙汰あるべからざること。(二)一の國民、乃至は、數國民の特殊利益を以て、平和整定の基礎となすべからざること。(三)國際聯盟の共同家族の中には、同盟、又は、特別の協商の存すべからざること。(四)國際聯盟内には、利己的の經濟的結合あるべからず、聯盟自らが統御の必要上、一の刑罰として行使するもの、外には、經濟上の排斥、又は、ボイコットあるべからざること。(五)すべての國際的協定、及、條約は、そのいかなる種類のものたるを問はず、これを公にせざるべからざること以上。これ實に、堂々たる宣言で、原則としては、敵も、味方も、之が承認に吝なるべからざる筈のものである。合衆國が交戦國の中に投入しつゝあるに拘らず、戦争に於て何等物質的に求むる所なきを公言し、極めて公正なる態度を以て平和を克復せんことを期したるは、ゲルマン同盟をして之に依頼し、直に彼の平和條項を承認するに至らしめた所以であつた。

## 二九〇 二元帝國の四分五裂

### (一) ハブスブルグ帝國の瓦解

一九一六年末、二元帝國の皇位更迭後のウイーンは、軍閥全盛のベルリンに對して、實にゲルマン同盟内に於ける平和運動の中心たるの觀があつた。一九一七年四月、二元帝國の外相ツェルニンは、已に五人の頭から王冠を拉し去つたる世界戦争を以て世界革命の先驅であると洞破し、ドイツに勸告して、年内に平和を實現するに非ずしては、オーストリアを自ら殆しとて、かゝる状態を促進せんことを努めた。ドイツ帝國の諸政黨中、此方向を執つたものは、民主的の諸團體を外にしては、カトリックの信仰に於て、オーストリアと肝膽相照らすの中央黨で、七月十九日に於けるドイツ帝國議會の平和決議は、かくして得られたのであつた。が、北方に於ける軍閥の勢、猖獗にして、之を奈何ともすることの出来なかつた中、西部戦線のドイツの常勝軍は破綻を遂げたので、二元帝國としては、今は、責めては、潰裂と瓦解との彼が窮極の運命に陥らん先にちて、講和の機をす、めるより外に爲さん術なきに至り、九月十四日、俄に、單獨で以て、講和の非公式の會合を中立國に催さんことを合衆國に提議した。此提議は、平和の要項は、已に繰り返し言明せられあることとて、今更、これが究明沙汰でもあるまいとて、ワシントン政府の拒絶する所とはなつたが、實に二



元帝國の此一騎駟け抜き行動は、これまでウィルヘルムストラーセに於て統べ括られて來て、大體に於て、一絲、紊れなかつた四國同盟の外交上の統一を破つたるものであつた。外交上に於けるドイツの堅實なる把持の手は之によつて覆へされた。二元帝國によつて演ぜられた單獨行動の此先例は、これから間もなく、ブルガリアの四國同盟からの脱退を誘致するに至つたのである。されば、十月五日に至り、ブルガリアに見棄てられた四國同盟の三國は、再、その亂れたる足並みを揃へ、合衆國大統領に申し込むに、十四條項、竝に、二月十一日、及、九月二十七日の彼が演説を基礎とする一般的休戦を結ばんことを以てしたけれども、大統領は、平和に誠意あらば、須く、その占領地より撤退せよと答へて、容易に動するのけはひなかつたので、トルコも、今は、我慢が仕切れずして、同盟條約を裏切り、又もや、協商列國と單獨講和することとなつた。

かくの如くにして形勢、最早、一刻の猶豫をも許さなかつたので、オーストリアの當局者は、ウィルソン第十條の精神により、帝國內の各民族に、自主的發展の機會を與へんとし、十月十六日を以て、少數のドイツ人とマジアル人とを以て、他の多くの民族を制する一八六七年の二元主義憲法を斷然、廢棄し、オーストリアの帝國議會に代表されし十七州の區劃を廢し、新にオーストリアをば、ドイツ人、チラホスロヴァク人、ユーゴスラブ人、及、ルーテン人の四個の自由民族より成る聯邦に改造し、各民族には、民族的議會を與ふる事とすべき旨の勅令を發布したが、然るに、此等の

諸民族は、今は之に満足することが出来なかつた。これより先、四月初、ローマに催されしスラブ民族大會は、彼等の二元帝國と俱に天を戴き得ざる旨を決議したが、越えて十月二十七日に至り、「中欧」の十八スラブ團の代表者は、フィラデルフィアの獨立閣に會して、飽く迄も、獨立の素志を貫かざるべからざるを論じ、かくてオーストリアのチラヒ人と、ハンガリアのスロヴァク人とは、率先して獨立を宣言し、相併合してチラホスロヴァキア共和國を建てたし、オーストリアのスローウェン人、クロアチアのクロアチア人、竝に、ボスニア、ヘルツェゴヴィナのセルビア人は、同じくユーゴスラブ民族に屬する南隣のセルビア王國と併合し、十一月末、セルボ・クロアト・スローウェン國を獨立する事となつた。更に、又、トランシルヴァニアは、ハンガリアから、ブコヴィナはオーストリアから、何れもロマニアに併合して、その民族的統一を完成すべく脱離し、ガリチアでは、ポーランドとウクライナとは、交々、オーストリアを排して、彼等各の同胞民族の上に己の勢力を及ぼさんとした。オーストリア帝國の解體は、今は彼が麾下に屬せる諸民族と、彼と隣接せる多くの國民とを擧げての要求であつた。そこで、ワシントン政府は、彼の十四條項の宣示せられてから、二元帝國内に於ける形勢の著しく推移せる事實に鑑み、少くとも、第十條をば、文字通りに、チラホスロヴァク人とユーゴスラブ人との二つの場合に適用し得ざるをウィーン政府に指摘し、オーストリア帝國も、今は此嚴然たる事實から逃れることが出来なかつたが、イタリア軍は、敵の此困惑をば得た



り賢しと、彼がカボレット敗戦の一週年記念日に、全戦線に互つて攻勢を採り、大にオーストリア軍を撃ち破り、全く、その闘志を挫いてしまつた。十月二十七日、オーストリアは、彼が聯邦組織の計畫を斷念して、廉く前記兩大民族の分立に承認を與へ、合衆國の要求せる一切の條件に服して和を乞ふこととなり、十一月二日、休戦條約は締結せられた。その條件は、動員を解除すること、古領地、竝に、イタリアの要求地から撤すること、捕虜を解放すること、軍艦を引き渡し、軍路上の要地を聯合軍の占據に委すること、半ヶ月内にドイツ兵を撤せしむること、二元帝國の水陸に於ける運輸系統を協商列國に開放すること等であつた。皇帝は、ウィーンを亡命し、社會民主黨の政府は、新に組織せられた。

### (二) ホンガリアの獨立

滔々たる解放分立の潮流は、ホンガリア王國にも及んで行つた。こゝには、一八六七年の憲法の精神を持続しようとする現狀維持黨と獨立黨とが相對立して居つた。前者は、ハブスブルグの君位によりて、オーストリアとの身上の合同を保つて行かうと云ふので、時の内閣は、此政綱を採つたが、獨立黨は、急進黨、及、社會黨と相提携して、縱横、政界を濶歩し、十月十七日、國會をして遂に、オーストリアとの友好的の關係を保つことの外、ホンガリアをば、全く獨立せしむべき旨を議決せしめた。そこで内閣は倒れ、月の末、獨立黨は、無血の革命によりてブダペスト政府を乗つ

取り、ホンガリア王たるハブスブルグ皇帝を逐ひ拂つて、共和政府を樹立した。新政府は、十二の綱領を發布した。ホンガリアの完全なる獨立、その領土保全、講和談判の開始、議會をして和戦を督せしむること、兩性を通ずる普通選挙、ウィルソンの主義による民族の自決、出版、及、集會の自由、社會上、農政上の改革、ホンガリア軍隊の召還、外國軍隊の撤退、是である。二元的政治は、かくて五十年の生命を保つたまゝ、亡びてしまつた。

### (三) ハブスブルグ皇國滅亡の意義

かくの如くにして、その包括する主要なる人種を數ふれば十二、その國語の數は十、その宗教は七、立法議會は、無慮、二十有三に及ぶハブスブルグ皇國の混沌體は、遂に瓦解を遂げてしまつた。オーストリア皇國にしてなからんか、之を創置せざるべからずとは、史家バラツキの有名な辭で、世人、多くは、ハブスブルグ皇國の存在を以てヨーロッパの安全と幸福との爲に缺くべからざる所であるとするに傾いて居つたが、併しながら、東方問題の解決に近づきたるの時は、これぞ、ヨーロッパが、否でも應でも、新にハブスブルグ皇國の問題を迎へざるべからざるの時だつたのである。此東方の舊き藩鎮は、トルコに對する基督教世界の障壁たる役目に服するもの三百年だつたが、トルコの國勢の陵夷するに及んでは、新に東南政策を採つて之を逆襲した。回教世界からの脅威が失せてからのハブスブルグ皇國は、その存在の理由をば、西方のフランス、否、それよりも強き意



味に於て、東方のロシアに對する對衡的勢力の必要の中に有するのであつた。が、かくしてジャコベ  
ンなり、カザックなりの強隣に接して、徐に彼の民族、及、國家を結束すべき新奇有效の方法を發見  
せざるべからざりしウィーン政治家は、徒に半上落下の不徹底政策に因循するのみだつたから、彼  
の、愈、窮迫して二元中の一半を改造して、四元の聯邦となさん決意を固めたる時には、時、已に  
遅かつた。「中欧」、別けても、ドナウ流域の地方は、全くバルカン化せられた。ロマノフ帝國の解  
體も、亦、「中欧」の此羸弱に投合する所以のものであつた。之を以て一部の觀察者は、中古のヨー  
ロッパに於ける世界的帝國の名残りたるハプスブルグ皇國の滅亡を以て、霸權の夢のヨーロッパに失  
せて、歴史の正に大西洋のあなたに移らんとしつゝあるを諷するものであると言うたが、フランス  
は、今や、大陸に生き残つた唯一の歴史の勢力として、新に「中欧」に群起せし小民族、小國家の上  
に彼が權力を及ぼし、以て、大陸の覇者を以て自ら居らんことを欲するに至つた。

### 二九一 世界戦争と、ドイツの社會民主黨

民主的革命の潮流は、終にドイツをも掩有するに至つた。かゝる變化の此保守的國家の上に齎ら  
ざるゝに至りしは、その社會民主黨の運動と最大なる關係を持つて居る。初め一九一四年七月、バ  
ルカンの風雲の急を告ぐるや、ドイツの社會黨は、大に示威運動を行ひて、百方、平和を保持せん

ことを努めたが、已にして戰禍の爆發するに及び、政府を支持することに決したから、従て大戰の  
初の間は、舉國一致の平和 *Burgfrieden* は、完全にドイツ國內に行はれ、各政黨の間ばかりでなく、各  
の政黨の内部をも支配したのであつた。國民自由黨と中央黨とは、彼等の舊き争鬭を中止したし、  
社會民主黨の内部でも、その正統派と修正派とは、互に彼等の反目を止めることにした。けれども  
這般の平和も、無制限、無期限に存続することを許されなかつた。

元來、ドイツの社會黨は、二つの源流をその出發點として居る。一は、一八四七年の共產黨宣言  
に現れて居るマルクスの主張を宗とするもので、之は、より多く國際的の傾向を帯びて居るが、今  
一つ、ラッサルから生れて來た方は、より多く國家的で、この二つの流れを合して社會民主黨なるも  
の、結黨を見るに至りしは、一八七五年のことであつた。即、社會民主黨は、マルクスの理論に據  
りながら、その活動の方法をラッサルに執らんとするもので、これから十六年後のエールフルトの宣  
言も、要するに此二つの源流を妥協せしめたものに外ならなかつた。輓近に至りてマルクスの學說  
を金科玉條視することに慊らずして、之に修正を加へんことを欲する異論者も起つては來たが、併  
しながら、ドイツの社會民主黨は、依然として一個の統一せる政黨としての努力を吝まなかつたた  
め、その國の工業の發達に伴ひ、驚くべく膨脹し、世界戦争の二年前には、終には議會の最大政黨  
たるに至つたのであつた。ロシアに對する感情の著しく働いたために、一九一四年八月四日の議場



では、社會民主黨は、開戦に關しては、責を政府と分つことの出来ぬ旨を揚言しながら、尙且、戦費の支出に賛成したが、けれども、此時、已に國際主義的見地を固執して戦争を否認せんとするもの十有四名を數へ、彼等は、黨議の束縛のために、止むなく賛票を投じた迄であつた。見るべし、戦争は、精神的には、社會民主黨をば、既に已に國際的傳統の支持に忠なるマルクスの舊流と、目前の急に應ぜんとする國家的なるラッサルの舊流との二つに分裂したることを。十二月の議會では、非戦黨は、更に三名を加へたが、その中、リープクネヒト Liebknecht のみは、黨議を無視して、公然、反對の投票をした。戦局の遷延は、政府に盲従するに嫌らざるものをして次第にその聲焰を加へしめ、或は、議場に於て公然、同志を難詰するものあり、はては、黨紀に服して賛票を投ずるに忍びずと稱し、軍費の採決に際し、相率ゐて議席を去るものを見るまでとはなつた。

イタリアの参戦は、戦局を廓大し、より多く平和の到り得べき機會を疏遠したるやに思はれたので、これからは、社會民主黨の黨争は、一層に激しくなつて來た。國家的、主戰的なる多數派の、ドイツの社會民主黨の飽く迄も防禦のために起たざるべからざるを叫ぶや、六月、少數派は、二個の宣言を發して、正當防衛から發足した戦争は、今や一轉して征服戰となつて居ると攻撃し、之がために、議論、紛然として起り、甲論乙駁、底止する所を知らざるに至つた。其結果、年の末の議會では、二十人の少數派議員は、軍費の協賛に反對を試み、そのため、其領袖ハイゼニヒツは、院

内總理を辭することになつた。かくの如くにして、内訌は、益、募るばかりで、一九一六年一月には、リープクネヒトは、社會民主黨から除名され、ついで刑事の追訴を以て懲役に處せられたが、三月二十四日、ハーゼを首將とする十八名の少數派も、終に、公然、軍費に反對したため、多數派から除名處分を受くることになり、此派は、翌年四月上旬、ゴータにその一味徒黨の大會を召集して、全く多數派との關係を斷ち、獨立社會民主黨なるものを組織することになつた。獨立社會民主黨は、多數派よりも、一層、極端なる主張を懷いて居ると云ふ譯ではなかつた。彼等の領袖の多くは、反對に、熱心なる修正論者に屬して居つた。唯、彼等に著しきは、戦争に對する根本的反對の態度であつた。此徒は、政府の酷烈なる窘逐のため、初めあまり振はなかつたが、戦局の持久と、封鎖による生活難の遞加とのため、潛勢的に次第にその力を増して行つた。

當時に於てドイツの社會民主黨は、雜然たる幾多の小集團に分れて居つた。少數派の中でも多數を占めて居る所の、多數派社會民主黨に一番近いハーゼの獨立派の外に、修正派も居つたし、又、極左端に位すべきバルタクスと稱するリープクネヒトの一派も居つた。多數派社會民主黨の中にも、八月四日の政策を支持し、勝利を以て戦を終らんとするものと、及、極めて帝國主義的、併合主義的の見を持つるものとの二つがあつた。



## 二九二 軍國ドイツに於ける民主的の運動

獨立社會民主黨を初めとし、少数派に屬する社會黨の各團體が、政府の羈絆に縛られながら、尙且、自由なる立場に立ちて之を監視せんとしつゝありし所、革命がロシアに勃發し、そのとばしりは、大にドイツに於ける民主的潮流に助勢したのである。

ドイツの現代に於ける民主自由の運動は、少くとも三月革命の古までも溯らなければならんが、帝政ドイツの反動的政治組織の成功は、大分、この潮流の進みを妨げたのであつた。一八九一年のエールフルトの宣言で社會民主黨の求めし所は、男女を問はず、二十歳以上の國民に平等の選舉權を付すること、立法、及、課税は、すべて人民の票決によるべきものたること、一切の官公吏を民選すること、和戦は國會の決定を要とすること、言論、集會、結社の自由を立すること等にあつたが、一九〇〇年後に、社會民主黨のみならず、ドイツに於ける一般自由派の等しくその力を集注したるは、責任内閣の制を樹立しよう云ふことと、プロシアに於ける古怪なる三級選舉の制を廢止しよう云ふことであつた。けれども、ドイツ民族の政治的に大に興つたるは、もとプロシアの軍國主義の力であるし、又、プロシアの軍國主義は、五百年にわたるホーヘンツォーレルンの治道、從て、その王朝的權威の下に培はれて發達して來たもので、此意味に於ては、ドイツ國、及、其民族

の今日ある所以は、畢竟するに、ホーヘンツォーレルンに傳統的な保守制度の御蔭であると云ふも大過なきやに見做され、此因襲、久しき階級制度、及、獨裁制度を撃ち破らんは、中々に容易ではなかつた。

所が、大戰の齎し、舉國一致も、漸にして動搖しかけて來たので、宰相ベートマンは、民論を懐柔すべく、一九一六年の初、大戰後の實行を條件として、プロシアの選舉法を改正すべきを宣言したが、革命は、其東隣の專制國家を覆してしまつたので、一九一七年三月十五日、ベートマンは、あわてふためきて、再、プロシアの國會にその選舉法の改正を約束したのであつた。けれども、もとより、一時の氣休めを言つてのみで、即刻、之が實施にとりかゝると云ふ考がなかつたので、帝國議會の自由派は、相聯合し、プロシアの選舉法のみならず、帝國憲法中の超然的内閣の制度にも改正を加ふべきため、大多數を以て、二十八人の調査委員を任ずるの議を決したのである。四月七日、大詔、煥發し、大戰後、憲法改正の行はるべきことの明言せられたのは、かゝる事情によるのであつた。所が、ベルリン政府の誇揚せし潛水艇政策が、思ふ様に行かず、一九一七年初夏、政局が行き惱みの姿となつたので、中央黨は、政府の此弱みに乘じ、急進派、及、社會黨と相提携して、民主的の改革を迫つたものだから、政府は、之に驚を喫して、次の總選舉までに、プロシアの選舉法を改正すべき事に讓歩したが、軍閥や、保守黨に氣兼ねのみせる姑息の態度のため、宰相は、



信を失うて罷められた。

ペートマンの退職は、軍閥の擡頭を意味するのであつた。九月九日には、家國存亡の急を拯ふと揚言せる祖國黨なるものが興つて來た。けれども、民間に澎湃たる民主的潮流は、何ものを以てするも、之を偃き止めることが出來ずして、十一月、パツリアの首相の新に宰相の椅子に擬せらるゝや、彼は、大命の拜受に先ちて、議會の各派と交渉し、その多數の同意を得るに及んで初めて其職に就いた。これ、既に、事實に於て獨裁的なりし在來の政治の形式を破つたものであつた。けれども、軍閥、竝に、保守派の跋扈跳梁せるがため、新宰相も、内政上に於て格別の新施設を行ふことが出來なかつた。

是に於て、獨立社會民主黨は、彼等が御手のもの、同盟罷工を煽揚し初めた。一九一八年一月中旬、同盟罷工のウーインに勃發するや、ベルリンも、亦、直に之に倣ひ、二、三十萬の勞働者、之に参加して、一、無併合、無賠償、及、自決を基礎として平和を結ぶこと、二、萬國の勞働者を平和會議に列席せしむること、三、食料の適當なる分配を行ふこと、四、戒嚴令を止め、工業の軍國化を停止すべきこと、五、政事犯人を解放すること、六、プロシアに普通、祕密、平等の選挙制を立することを要求した。直に平和を克復し、又、民主的改革を施行せよと云ふのである。ストライキは各地に波及したが、プロシア政府は、その大事に至らざるに、之に武力的彈壓を加へ、首謀者を

嚴罰し、その若干をば、軍隊に送つて苦役に服せしめた。されど、この擧たる、却て、革命熱を戦線に播布したるに過ぎなかつたのである。

## 二九三 講和、竝に、民主的改革促進の努力

(一) 民主的政府の組織、成る

ドイツ軍の大攻勢が峠を通り越した一九一八年六月二十四日、戦局の大勢を洞破した時の外相は、議會に於て、戦争の最早、武力のみでは之を決すること能はざる旨を演説したが、此極めて正當なる言説に對し、汎ゲルマン派や軍閥は、怒號して辯者の弱音を吐けるを責め、終に其職を免ぜしめた。當時に於ては、行政部は、それほど軍閥のために壓迫されて居つたが、これから一ヶ月とたぬ中に、七月の攻勢は頓挫を遂げ、ドイツ軍、破綻の緒がこゝに開かれてしまつた。かくて負け戦となつてからは、戦場に於て平和を求むることの望みがなくなつただけ、他日のために、敵國中、比較的公平なる合衆國の歡心を求むべく、豫め民主的諸改革をドイツの内政上加ふることの必要が起つて來た。そこで、カイゼルも、我を折り、八月二十四日、帝國議會の議員數を四四一人に増し、大體、人口二十萬に付て一人の割合にその選挙區を配當することにし、二人以上の議員を出す所では、比例代表の制を用ゆることを合し、ついで、九月四日、宰相は、プロシア上院に選挙法改



正案を提出し、約一ヶ月の後、之を通過せしめた。かくの如くにして永い間、懸案となつて居つた責任内閣制の樹立、竝に、プロシアの間接選挙制の廢止は、正に實現の期に近づきつゝあつたけれども、一面に於て講和の談判を進め、他の一面に於ては、這般、内政上の改革を行はんには、政府の權力の今よりも確實にして堅固なる基礎の上に置かるゝことを要とするを以て、政府を支持せし四大政黨は、九月三十日、相議して、總て組織さるべき新政府の綱領を定め、講和問題に付ては、一、一九一七年八月一日のローマ法皇の提議への回答、及、七月十九日の國會の決議を支持すること、二、國際聯盟に參同すること、三、ベルギーを無保留に恢復すること、四、既成の平和條約はすべて之を維持すること、五、アルサス、ロレーン二州を自主せしむることの諸原則を定め、又、民主的改革の問題に付ては、一、即刻、プロシアの選挙法を改正すること、二、政府の責任的統一を期すること、三、人身、集會、及、印刷の自由を立することを期し、是等の精神によりて聯立の苟合内閣ならで、各多數黨の代表者を以て統一された内閣を組織する事となり、バーデンの世子、マクス公、宰相に任じて大綱を統べることになつた。ルーデンドルフは、かゝる議院的政府の出現に反對したが、十月の初、此民主的内閣、成立して、軍閥の號令政治は、全く敗れてしまつた。

(二) ベルリン、對、ワシントンの講和談判

八月十四日、スバーのドイツ大本營で行はれた御前會議では、最高統帥府は、今は、戰爭により

て、到底、戦局を終結するの見込なしと白状したので、ベルリン政府は、これから、中立國を動かして講和を斡旋せしめんと骨折つたが、その甲斐はなかつた。然るに、二元帝國は、ベルリン政府とは反對で、夙に交戦國との直接交渉を主張し、平和の提議は、一日も早く發せられざるべからずとて、トルコ、及、ブルガリアと協議することなくして提議の案文をものし、八月末、之をばベルリン政府に内示するに至つたので、ベルリンとスバーとは、ウイーン政府の此行動に愕然として、ドイツ外相、自ら急ぎウイーンに出馬して之を差し止めようとしたが、ウイーン政府は之に耳を傾けず、九月中旬に、講和交渉の單獨行動に出たのであつた。ウイーン政府が着けた此先鞭は、ドイツをして其方針を一轉するの止むなきに至らしめ、之により、彼の二元帝國、及、トルコと議り、合衆國大統領の十四條項を基礎として平和を議せんことを合衆國に申し込んだのは十月五日のことで、本交渉は、これから一ヶ月の永きに持續したのであつた。

ドイツの此第一回通牒に對する合衆國の回答は、直にベルリンに交付されたが、合衆國は、其中で以て、占領地の撤兵せられざるべからざるを要求し、又、宰相の責任に付て質疑する所あつたので、第一回通牒の後、一週日にして、ドイツは、撤兵の要求を諾し、又、現政府が國民を代表する所の責任内閣に相違なき旨を答へた。けれど、こはまだ容易にワシントン政府をして信をベルリン政府に置かしむること能はず、合衆國は、ドイツを支配する權力にして現在の儘にてあらんには、



平和の談判に應ずることが出来ぬといきまき、尙、又、ドイツの依然として潛水艇による無慈悲なる殺傷を事としつゝあること、其陸軍の占領地退却に際して無用の破壊に任じつゝある事實を指摘して、彼が平和の誠意に疑念をさしはさんだ。そこで、十月二十日の第三回通牒に於て、ドイツは、重ねて、彼の今や議院的政府を實現し、多数黨の領袖を之に列せしめつゝあるを説明し、又、陸海軍に無用の破壊を事とせるの事實なきを辯解したけれども、ワシントン政府の態度、頗る強硬にして、その所謂、責任内閣なるものを危み、將來の事はいざ知らず、現在の戦争を惹起せしめし人々の、相變らず、政府の地位に据つて、一般人民の之と没交渉である以上、かゝる輩によりて行はるゝ平和の安泰なるべきを何人か保し得べけんと言ひ、飽く迄もドイツの降服を要求した。こゝに於てか、ヒンデンブルグは、慨然として、彼の軍隊に向て、合衆國の欲するが如き屈辱的平和の斷じて肯んじ得ざる所にして、彼は、寧ろ力のあらん限り戦うて、君國の難に殉ぜんとするものであると放言したが、かゝる示威的の宣言も、避けがたき運命の前には何等の權威もなく、十月下旬を以て、憲法の修正案は、兩院を通過し、これまで事實に於て皇帝の獨裁權に付せられて居つた宣戰、及、講和が、自今、兩院の協賛を要することになつたし、又、宰相は、議會に責任を帯ぶることになつた。政權は、全く文權の統制の下に立つことになり、ルーデンドルフは、二十六日、終にその參謀次長の職を辭した。

形勢は急轉直下し、二十七日、ドイツは、第四回通牒を以て、全く降服の意志を示すに至つたので、十一月五日、合衆國は、初めて大統領頻回の演説を基礎として、平和の談判に應ずることとなり、但し二個條だけを保留した。海洋の自由の一條をば、平和會議まで保留すること、及、非戦闘員、並に、其財産に對する損害は、ドイツの賠償に歸すべきこと、是である。これよりフォーシュ將軍は、聯合軍の代表者としてドイツと休戰の談判を開くことになつた。

## 二九四 ドイツの革命

### (一) ドイツ海軍政策、獅子身中の蟲

軍國主義、潰えて、ドイツは、事實に於て終に敵の軍門に降服し、獨裁專制の帝政ドイツは、今や議院的制度を實現せんとするに至つた。これ、その政治上の主義の關する限りに於て一の革命である。然るに、勢の此發展に伴ひ、十月末、キールに起つた一種の運動は、カイゼル、並に、彼の王朝を倒すに至つた。カイゼルによつて創められた海軍政策の、彼の王朝に煩ひを及ぼすに至りしは、寧ろ不思議の因縁と言ふべきであつた。

ドイツに於て、戦争反對の氣勢の漸くたかまり來りしは、彼が平和の提議の容れられず、又、その自暴自棄的なる潛水艇政策の成否の氣づかはれてから、將た、社會民主黨少數派の斷然、獨立の



旗幟を翻してからのことであつた。非戦主義の社會黨は、陸兵よりも新しき風潮に觸れ易い所の、又、技術職工と交る機會をより多く持つて居る所の水兵に着眼し、キールの造船所をば、彼が宣傳の第一の目標とした。かくて獨立社會民主黨のキールに彼等の支部を新設せしは、一九一七年三月で、爾來、非戦論にかぶれたる水兵、及、労働者は、秘密結社を結んで運動したので、政府は、七月、之を一網打盡し、陰謀の首魁たる二水兵を死刑に處し、其他にも嚴罰を加へた。此事件は、政府の之を闇から闇に葬り去らんことを冀ひたるに拘らず、これから間もなく議會で問題となり、世間の視聽を聳動したのであつた。されど、一度、キールに巢食うた獅子身中の蟲は、此一舉によりて掃蕩された譯ではなかつたから、一九一八年一月には、又もや、ストライキの勃發を見た。が、一旦、屏息した水兵の運動の、再、大にその頭を擡げたのは、唯一の希望たりしドイツ陸軍の大攻勢の頓挫してからであつた。

十月二十七日、ドイツは終に降服の議を決したが、若しこのまゝに推移して行つたら、ユートランドの海戦から二年五ヶ月を空しく雌伏したドイツの大洋艦隊を擧げて、おめ／＼敵手に落つるに至らしむべきは明であつたので、今や、絶望的となれるその士官連は、皆、寧ろ一戦を賭せんことを冀はざるはなかつた。二十八日、司令長官が全艦隊に出動の命令を發したのは、イギリス海峡のあたりに出かけて行つて、出來得るなら、敵の艦隊の一部を撃破し、一面には、ベルギー沿岸に於

ける陸軍を掩護しようと思ふ目論見から出たのであつた。之により幸にして、イギリスの海軍力を何ほどでも殺ぐことが出來れば、合衆國のイギリスに對する地位は、それだけ強固となり、平和の交渉に際して有力なる發言權を占めて、ドイツに對するイギリスの苛重なる要求を寛和せしむることが出来るだらうと思はれた。然るに非戦思想にかぶれた水兵連は、士官の純愛國論や、獻身主義に雷同すること能はず、今や、平和の成るに垂んとしつゝあるに、強ひて出でて闘はんとするは、これ、貴重なる生命を無益に抛つものであるとして、その命に従ふことを拒んだ。固より、多くの抗拒者は、容赦なく捕縛されたけれども、命令峻拒は、滔々たる潮流となりて、作戦の實行は不可能となつてしまひ、十一月の一日からは、水兵と労働者とは、示威運動により、就縛者の解放を要求して止まず、此混雜の間に、街上には、若干の死傷者を生じ、四日には、不穩兵の數は無慮、二萬に及び、キールには之に同情する總ストライキまでも起つた。ついで同一の騷擾は、東海、及、北海の沿岸の到る處に蔓延して行つた。

革命は、最早、勢である様に思はれた。そこで多數派社會民主黨の一領袖ノスケ Moske は、馳せてキールに到り、亂民を慰撫し、又、革命の目的を遂行する事に奔走した。水兵の代表者の鎮守府司令官に要求したものは、彼等の待遇の改善に關するもの、外、ホーヘンツォーレルン家の位を廢すること、男女の平等選舉權を立すること、政事犯人、竝に、拘禁水兵を解放すること、一九一七年



の暴動者を放免すること等で、キールでは、今はすべての権力は上長官の手を離れてしまった。此危機に際し、十一月四日、マクス公を初め、閣員、連署して、ドイツ國民に告ぐるの告示を發し、プロシアの平等選挙法、人民的政府の組織、責任内閣制の樹立、基礎的大權のカイゼルより國會への轉移、國會の和戰協賛權、宰相の軍閥統制權、大赦令の發布、印刷、及、集會の自由等、是まで決せられたる重要な改革を列記して、動亂を鎮撫せんことを欲したが、時、既に遅かつた。

(二) ホーヘンツォレルンの覇業、仆る

かゝる間に、革命の波は、ホーヘンツォレルン家の覇業の基地であり、ドイツ帝國の重心の所在地である釐穀の下に迄も押し寄せて來た。少数派社會黨は、之を措くとするも、多数派の中にも、已に十月の初からして帝の廢位を唱ふる者あり、かゝる苛激の言論は、檢閲で差留められては居たけれども、二十四日には、議會に於て少数派のハーゼが、公然、共和制の樹立を論じたりし、キールの水兵連も、之を口にするると云ふ様な有様で、今は、ベルリンの形勢も、頗る重大となつて來た。平和に關する、ベルリンとワシントンとの交渉に際し、合衆國大統領のドイツに求めたる民主制度の保證は、ベルリンの當局者からは、カイゼルの獨裁的權力を低下して、イギリス王の憲法上に於ける地位に等しきものたらしめんとするにあるならんと解釋され、之により十月二十八日には、カイゼル自ら勅して、基礎的大權の彼の手から人民に移さるべきを公言したのであつたが、恰も

此當日、キールに革命が起り、その餘沫はベルリンにまでも及んで來た。ベルリンでは、その衛戍總督は、休戰の談判の現に開かれつゝあるに際して、徒に牆に固きて内訌の存在を暴露するは、敵をして之に乗せしむる所以で、國家の不利、此上なしとして、王室に忠なる兵士のみを以て固く非常を警めて居つたが、然る所、六日以降、形勢、急變し、そのため、七日に催さるべき獨立社會民主黨の集會は、事前に禁止を命ぜられた。そこで多数派のシャイデマン Scheidemann は、七日夕に至り、最後通牒を政府に交付し、一、今日の獨立社會黨の集會の禁を釋くこと、二、警官と兵士との態度を寛和すること、三、直に國會の多数黨を以て新プロシア政府を組織すべきこと、四、帝國政府に於ける社會黨の勢力を強め、政府を社會主義化すること、五、九日正午前に皇帝、及、皇太子をして帝位、及、その繼承權を辭せしむることを要求し、容れられざれば、社會民主黨は、政府との關係を絶つべきことを告げた。然るに、スパーにありしカイゼルは、彼に忠誠を誓へる軍隊を頼みとして、彼の退位のためにドイツを無政府状態に陥るゝに忍びずと稱し、之を肯んぜず、又、たとひ、カイゼルの位を辭するの止むなきに至らんとも、プロシアの王位は、飽く迄も之を保持せざるべからずといきまいた。所がベルリンでは、社會民主黨は、多数派と少数派とを擧げてホーヘンツォレルン家を仆すの目的を達成せんとし、總同盟罷工を以て政府を脅して來たので、政府は急を訴へて、益、カイゼルの退位を迫り、九日には、帝政の唯一の頼みたりしヒンデンブルグ其人すら



も、退位の止むなきを帝に慫慂するに至つた。しかも、カイゼルは、尙、懸々として決しなかつたので、マクス公の政府は、帝の正式の承諾を待つこと能はずして退位の次第を發表し、次で彼をオランダに追うて了つた。同時にマクスは、宰相の地位を社會民主黨多數派の領袖エーベルト Ebert に譲り、新なる共和政府は、多數派、及、少數派の聯携によりて組織せられることになつた。

## 二九五 休戦條約の締結

合衆國の愈、ドイツの乞を容れて之と和を講ぜんとするや、ベルリン政府は、其最高統帥府からの矢の如き催促により、中央黨の領袖エルツベルガー Ebert を全權として、大急ぎで、フォーシュと談判を開始せしむることにした。それほどに、當時のドイツの陸軍は、危険なる地位に陥つて居り、戦争の此上の繼續は大敗戦を招くべきは必常だつたので、かゝる潰走とならぬ中に休戦を結ぶと云ふことは焦眉の急だつたのである。かくてドイツ全權の一行は、サンリモジエの聯合軍大本營にフォーシュを訪うたが、フォーシュの一行に對する態度は、征服者としてのそれであつた。

これより先、ドイツの降服の免るべからざるを見るや、フォーシュは、來るべき休戦に備ふべく、豫め關係列國の意見を纏めようと欲し、十月二十五日、彼の許にフランス、イギリス、合衆國の各司令長官を招きて親しく彼等の見る所を問うた。此際、休戦そのものに付ては何人も異存はなかつ

たが、條件の寛嚴いかに付ては、司令長官連の考は二途に分れ、イギリスの司令長官ヘーグは、ドイツをしてフランス、ベルギー、アルサス・ロレーンを撤退せしむること、大戦の初、彼がフランス、及、ベルギーから奪ひ去つた輸送材料を返還せしむること位の溫和の條件を求むるに止めんとを主張し、これ以上の要求は、ドイツをして激越せしめ、却て戦争を永びかすの虞ある旨を論じた。之に對し、フランスのベタン Pétain は、休戦條約の絶對的の休戦條約にして、合衆國大統領の彼が第三回復牒に述べた様に、大戦再開の虞のないものたらざるべからざるを述べ、之になくはならぬ二條件を擧げた。一は、ドイツの大砲や車輛を取り上げ、又、短き期間に其兵を撤せしむること、今一つは、ドイツの占領地、及、ライン左岸からの撤退を命じ、ラインの右岸も五十キロメートルまでは撤せしむることであつた。合衆國の司令官も、ベタンの説に賛成したので、フォーシュは多數の意見とする所を全部七條項にまとめ、之をパリに會せし協商列國の首相、及、外相、並に合衆國の特使の最高會議に提出し、三十一日、こゝで休戦條約の大體を議了して、十月四日、之を成文としたのである。合衆國大統領の第四回復牒の遅延したのは、此下相談の完成を要とする事情があつたからであつた。

休戦條約の案文は、ドイツ全權に交付され、之に對する諾否の回答の與へらるべき期間は、七十二時間と限られた。條件は、頗る苛烈だつたが、その期間内に、ドイツ全權は、何ほどでも之を輕



滅すべく奮闘し、幾分の効果を収むることを得た。かくて十一月十一日、ドイツ全權は、七千萬のドイツ國民は、之によりて具に苦楚を嘗めんも、彼や未だ亡びざるなりと言つて之に調印した。ドイツは、之によりて、十四日以内にベルギー、フランス、アルサス・ロレーン、ルクセンブルグを撤し、一ヶ月以内にラインの全左岸を撤し、又、その右岸を中立地としなければならなかつた。プレスト・リトウスク、及、ブカレストの兩平和條約を廢棄し、その軍隊をロシア、ロマニア、オーストリア・ホンガリア、及、トルコから撤しなければならなかつた。多くの飛行機、大砲、機關銃、潛水艇、大軍艦、機關車、自動車、貨車等を引渡さねばならなかつた。バルト海の航行を自由にせぬばならなかつた。此等の條件の示す所を一言にして蔽へば、世界的強國たるドイツは、敗戦の結果として、一朝にして頹陶し、富と強力との絶頂からして殆んど無一物のどん底に落ちてしまつたのである。

## 附 錄 世界戦争後の世界

### 一 世界戦争の性質

世界戦争は、此の如くに勃發し、此の如くに其結末を告げた。いかなる意味から言うても、亦、如何なる關係から之を觀ても、かくの如くに規模の大なる戦争は、人類の歴史あつて以來、曾て見ざる所であつた。之が渦中に投入せられたるものは、世界に於ける獨立國の殆んど四分の三で、十有七億の人類の中、十五億は敵味方に分れて鎬を削つたのである。往時に在ては、戦争と云ふ戦争は、王朝の個人的功名心から惹き起されざるはなく、國民そのものは、原則としては、之とは沒交渉だつたが、然るに世界戦争は、國民そのもの、實際上の利益なり、將た、彼等がその國威擁護の要求なりをば之が原因として起つたる國民的戦争であつた。従て戰場に繰り出された兵士の數の、驚くべく多いのみならず、銃後に控へたる老若男女も、各その力に應じて、舉げて多少に拘らず、軍國の役務に服し、所謂、舉國一致をばその文字通りに實現し、國家と共に興り、國家と共に滅びんとするの旺なる意氣を示したのであつた。戰場が地上から空中、及、海中にまでも擴延せられたと云ふことも、これ亦、過去の戦争に於てなかりし所であつた。が、列國が過ぐる數世紀の間に作り上げて來た所の文明戦争の法規慣例の、殆んど一の除外例もないほどに一蹶し去られ、かのプラ



イス卿の批評した様に、武器と技術とこそは違ふが、その精神と結果とに於ては、宛然、石器時代に於ける人類間の戦闘と毫も違ふ所なきに至つたと云ふことも、驚くべきの極みであると言はねばならぬ。

最後に擧ぐべきは、戦争に向て拂はれたる鉅大なる費用である。今、戦争に對する直接の費用のみに付て之を見るも、合衆國の研究者の周密なる見積りによれば、一八六二億三三三六萬餘弗であると云ふことである。大戰前に世界列國の國債は、四四〇億弗、一人當り、二十七弗の割合だつたが、戦後には、遽然、二六五〇億弗、一人當り一五〇弗に急増して居る。これ、主として交戦列國の軍費のために外ならぬのである。今、若し、これ等直接の費用に加算するに、大戰による各種の間接の犠牲をも以てせんか、その莫大なる、殆んど想像だも及ばざるものがあるだらう。

人命の損失は、フランス大革命、及、ナポレオンの亂の二十五年間に於て、二一〇萬とせられてゐるが、四年三ヶ月にわたる今回の世界戦争のための死者は、無慮、一三〇〇萬に及んで居る。これ等の大なる人命は、三二五億餘弗の經濟的価格を有するものとして評價されてゐるが、尙、此外に、傷病による損害なり、非戦闘員の嘗めたる苦楚なり、財物の破毀なり、商船の爆沈なり、生産の損失なり、戦争の瘡痍を癒すべく支出せられたる義捐金なり、又、中立國民の被つたる痛苦なり、これ等一切の間接の費用を合算せば、大約、一五一六億餘弗となり、之を直接の費用と合する時は、

大戦争による全損害は、三三七八億餘弗と云ふ驚絶すべき計數を示すことになるのである。

## 二 五大國の斡旋

有史以來、未曾有の大なる犠牲を投じて、辛くも、干戈を鞘にすることになつた世界戦争は、いかなる種類の平和をば贏ち得ることが出来たか。

平和は、アメリカ、イスパニア戦争や、日露戦争の如くに、中立國の周旋により、兩交戦國の全權が一堂に會し、樽俎の間に折衝して齎せしものとは、大にその選を異にするものであつた。合衆國のウィルソン大統領が、ドイツと外交上の關係を斷絶するより約二週前に聲明したやうな、「無勝利の平和」にはあらずして、戦争の末期にかけ、イギリスとフランスとで以て、遂に完全に各の輿論を制するに至りし「徹底的勝利」*Victoire intégrale* による平和そのものであつた。「中歐」大系統の四國は、休戦條約に於て、何れも、絶對降服の態度を示したから、協商列國としては、講和の條件に付て四敵國と交渉討論するの要なく、唯、敵國の實行し得べき範圍内に於て、我の要とする事項を命じ、之を遂行せしむるべきのみであつた。従て問題は、味方のすべての國が満足を表し得べき講和條件を作ることに外ならなかつたが、しかしながら、此點では、問題の解決難は、味方の數の増加と正比例しなければならなかつた。「中歐」の四國を敵として立つたる大小強弱、二十有八



個の國家の得手勝手の要求をば、盡く同一程度に満足せしむる様な平和條件を作らんとするが如きは、絶対に不可能であつた。あらゆる制裁に服するものは四敵國ではあるけれども、四國とても、その國力に限りがあるから、能はざるを之に強ゆることが出来ないし、又、同じ味方の中でも、勝利の結果を齎すべく投ぜられたる犠牲と骨折りとの必しも、同一ならざる以上、彼等の要求を一視同仁する譯にも行かのである。見るべし。萬能の超絶的大裁判官を戴いて居らぬ二十有八個國をば、悉く一堂に會して、正則に講和の條件を小田原評議するが如きは、徒に曠日瀰久して、その間に、敵國に供するに、反間の術策を弄すべき間隙を以てするのみで、一刻も早く拾收せざるべからざる戦局焦眉の急を濟する所以ではないのである。これ、五大國の斡旋のなかるべからざる所以であつた。戰場に於ける最大の功勞者が、平和の談判に於ても、自ら最大なる發言權を占取するに至らんは、これ實に止むを得ざる所であつた。今次の世界戦争に於て、世界の八大強國は、二つの陣屋に分れて相闘つたが、その中、ロシア、オーストリア、ドイツの三大帝國は、崩壊を遂げたものだから、戦局の善後を策することは、當然、最も多く勝利に貢献した所の、残る五大強國の負擔に歸した譯であつた。

### 三 五平和條約、成る

一九一八年十一月十一日、ドイツとの休戦條約の締結せらるゝや、五大國の最高軍事會議は、講和の準備をなすべく、屢、パリに會合したが、一閱月の後、合衆國大統領ウィルソン、亦、親らヨーロッパに渡行し、以てイギリス、フランス、イタリアの首相、及、外相、竝に日本の大使と豫備的の協議を行ふことを怠らなかつた。此の如くにしてドイツに對する講和條件を定むべきための講和總會議の二十八與國の全權を集めて正式にパリの外務省に開かれたのは、一九一九年一月十八日で、この席に於て、七十に近き各國の代表者は、フランスのクレマンソー首相を議長に推すこととしたが、しかしながら、此所謂、總會議は、稀に形式的に之を召集するに過ぎず、一切の重要な事項は、五大國の全權、先づ之を協定し、關係小弱國は、僅に小委員會に其意見を提出することを得る位に止まつて居つた。かくて五月六日を以て總會議の認むる所となつた語數八萬のドイツに對する講和條約案は、其翌日、ドイツの全權に交付され、多少の訂正を経て、六月二十八日、ヴェルサイユに於て關係列國の調印する所となつた。次にオーストリアに對する平和條約は、六月三日、全權に交付されて九月十日、サン・ジェルマンに調印されたし、ブルガリアに對するものは、十一月二十七日に調印された。

二元帝國の瓦解を遂げたりしがために、協商列國は、ハンガリアとは、獨立に平和條約を締結せざるを得なかつたが、此國では、一九一九年春夏の候、共產黨政府起倒の紛擾あり、そのため條約



締結の談判が遷延し、一九二〇年六月四日に至つて、漸くその調印を見るに至つた。

五箇の平和條約中、最大の難關であつたのは、トルコの處分法に付ては、之と最大なる利害の關係を有するイギリス、フランス、ロシアの三國、並に、イタリアの間に、大戦中に於て屢、密約が結ばれ、之により、戦後、トルコは、全くヨーロッパから驅逐され、ロシアは、之に代つてコンスタンチノブルの主となることに約束がきまつて居つたが、ロシアの協商列國間の單獨不講和同盟を裏切り、その與國の仲間から脱離するに至りしため、残る三國、就中、イギリス、フランスの二國は、専ら協調して善後の策を講ずることとなり、處分案の大綱は、一九二〇年四月十八日、サン・レモの大國會議に於て定められて、トルコのセーヴル *Sèvres* に於て之に調印するに至りしは、八月十日のことであつた。かくて「中歐」同盟に對する二十有八國の中には、平和條約の調印を峻拒した若干國もないではなかつたが、兎も角も、大體に於て平和は恢復せられ、交戦列國の外交上の關係は、序を遂うて舊に復した。

#### 四 國際聯盟

パリに於ける平和の努力は、主として二つの大目的のために傾注せられたのであつた。一は、言ふまでもなく、大戦によつて紊された世界の秩序を回復し、各國家、各民族の間に政治上の安定

を齎さんとするので、今一つは、平和を將來の世界に確保すべき道を講ずることであつた。前者は、戦争によつて生じた眼前足下の紛糾を整理せんとするものだが、後者は、之に一步を進めて、共同文明の恆久的編制のために施設せんことを期するものである。國際聯盟は、蓋し、この後の高遠なる理想から畫案せられたものであつた。

平和の擾亂せられ、脅威せらるゝ所以は、列強が依然として均勢主義の外交策を弄しつゝあり、彼等のすべてを結束拘束するものゝ存せざるによるのであるから、大戦をして意義あるものたらしめんとせば、須く、空前の大戦争によりて、世界を擧げて疲弊困憊を告げつゝある此萬載一遇の好機會に於て、列國の間に一の有機的なる聯盟を結成せざるべからずとは、大戦の間に於て已に志ある者の主張する所であつた。中にも、合衆國大統領ウィルソンは、最も之に熱心で、彼の有名なる平和の十四條項の第十四條に於ても、國際聯盟の組織なかるべからざるを掲示したのであつたが、しかしながら、所謂、國際聯盟なるものゝ内容なり、具體的構成なりに付ては、まだ何等の成案もなかつたので、實際政治家の中には、これをば一片の空想に過ぎずとするものも、尠くはなかつた。又、假令、最も、實行的性質を有する提案ありて、これが一般の承認を得べき希望を有したるにしても、これをば討議に上すべき時期に關しては、列強政治家の間に意見の一致を見る事が出来なかつた。實際政治家の多くは、一日も早く戦局を收拾するを要とするの時に當り、悠々として、聯



盟問題の如き理想案の討議に時日を銷せんとするが如きは、迂の至りなりとし、先づ焦眉の急に屬する敵國處分に關する一切の始末を決裁し、平和條約のすべて成立するを待ちて、然る後、徐に、國際聯盟を立すべき平和會議を召集するの一層に效果あるべきを主張した。けれども、合衆國大統領は、平和條約と國際聯盟とを切り離して處置せんことを欲せず、彼の熱執的唱道により、國際聯盟は、パリ平和會議に於ける頭等第一の問題となり、その最初の案は、一九一九年二月十四日に出來たのであつたが、こは幾多の曲折と改訂とを経て、四月末日、漸く總會議の承認する所となつたのである。ドイツに對する平和條約案が、休戰條約の成立してから一七七日目で、漸くその全權の手に交付せられると云ふ様に遲滞したのは、主として多くの時日が國際聯盟の討議のために費されたからであつた。かくて一九二〇年一月十日を以て、ドイツの敵國團中の十四個國は、ドイツと批准書を交換するに至りしを以て、條約の劈頭に掲げられた國際聯盟は、初めて正式に之が成立を告げ、月の十六日を以て最初の理事會は、パリに召集されたし、又、同年の十一月十五日には、第一回の聯盟總會がジュネーブに召集された。合衆國元老院のウェルチアイユ平和條約批准拒絶は、新國際聯盟に對する打撃ではあつたが、それにも拘らず、聯盟そのものは、その成立の精神により、之が畫案を追うて發展しつゝあるのである。

五個の平和條約を通じて其卷頭に掲げられたる國際聯盟の規約は、二十六個條から成つてゐるが、

之には、主要なる機關が二つある、イギリス、フランス、イタリア、北アメリカ合衆國（但し此國は、前記の如く後に脱退した）及、日本の五大國の代表者、並に一定の期を劃し、殘る聯盟國中から選ばれたる四個國の代表者を以て成る理事會は、聯盟の執行機關で、外に之が諮詢機關として聯盟の全員を以て組織せられたる總會がある。事務局は、ジュネーブに常設されてある。聯盟國は、互に相互の領土保全、及、政治的獨立を尊重し、又、外部の侵略から之を擁護すべきを約し、萬一、紛争の發生に會せば、之を仲裁々判所、又は、聯盟理事會の審査に委すべき義務を負うて居る。彼等は、仲裁々判所の判決、又は、理事會の報告後、三個月を経過する迄は、干戈に訴ふることを許されない。聯盟國にして聯盟規約を無視して戰爭を開始したる時は、他の聯盟國は、之と通商上、金融上、及、個人的交通を斷絶すべく、又、理事會は、聯盟擁護のために使用すべき陸海軍に付て提案し、適當の措置を採ることが出来る。列國は、又、今後の労働不安を濟すべく國際労働會議を召集することになつた。

## 五 世界の面目、一新す

五平和條約の成立は、世界の面目をして、全く一新せしめた。これを領土の關係に就て見んか、第一にドイツは、アルサス・ローレーンの二州をフランスに、オイベン、マルメデーの地方をベルギー



に、ポーゼン、及、西プロシアの大部分を新興のポーランドに割かねばならなかつた。人民投票によりて東プロシアの南部、竝に、上シレシアの地方のポーランドに歸すべきか、將た、ドイツの領土として止まるべきかを決しなければならなかつたし、シュレスウイヒも、亦、デンマルクへの復否をきめねばならなかつた。ポーランドの海口たるべきダンチヒの港は、國際聯盟の管理する所となつたし、ザールの炭田地方は、十五年間、フランスの占領する所となつた。植民地は、悉くドイツの手から拉し去られて、國際聯盟から委任された列強、之が統治の任に當ることとなり、アフリカでは、西南アフリカは、南アフリカ聯合に、東アフリカは、イギリスに歸し、カメルン、及、トーゴは、イギリス、フランス兩國の分割する所となつたし、大洋洲では、サモアは、ニューゼーランドに、其他の赤道以南の諸領土は、オーストラリア聯合に、而して、又、赤道以北の諸島と膠州灣とは、日本に歸することになつた。

オーストリアは、ハンガリア、チェホスロヴァキア、ポーランドの三共和國、及、セルボ・クロアト・スローウェン國の獨立を承認した。舊オーストリア帝國に於ける未回収のイタリアは、悉くイタリア王國に割譲せられた。多くの異民族の居住したりし地域は、皆、解放せられて、彼は、今は約七百萬のドイツ民族から成る、海なき一小共和國たるに過ぎなくなつた。

ブルガリアは、彼が大戦中に獲得したりしすべての占領地は勿論のこと、彼のバルカン戦争の獲

物の大部分までも吐き出すの餘儀なきに迫り、ドブルーチアは、ロマニアに、その西方邊境の諸個地方はセルボ・クロアト・スローウェンに、又、トラキアの海岸はギリシアに割かるゝことになつた。

ハンガリアも、オーストリア同様、全く民族國家に萎縮してしまつて、その北部のスロヴァキアはオーストリアのボヘミアと相合してチェホスロヴァキアとなつたし、トランシルヴァニアはロマニアに併合されたし、クロアチアは、セルボ・クロアト・スローウェン國の中に收容されたし、バナートはロマニアとセルボ・クロアト・スローウェンとの分割する所となつたし、彼が唯一の海港たるフィウメは、又、イタリアの之を窺竊して止まざるがために、國際化せらるゝこととなり、ハンガリア自らは、人口九百萬の蓋爾たるマジール國となつてしまつた。

トルコ帝國は全く解體した。スルタンは、依然としてコンスタンチノブルに在ることを許されたけれども、海峡は全く國際化せられ、五大強國を初め關係列國の共同管理の下に置かるゝことになつた。かくしてスルタンのヨーロッパ・トルコに於ける支配權は全く有名無實となつたが、彼がアジアに於けるそれも、亦、多くその掌裡から褫奪されてしまつた。紅海に濱せるアラビアの地方に於てイギリスの後援の下に建てられたヘジャズ王國の獨立は認められた。エジプトは、全くトルコとの關係を絶つてしまつた。地中海の東岸では、パレスチナとメソポタミアとは、イギリスの、而して又、シリアはフランスの委任統治の下に置かれることになつたし、小アジアでは、アナトリアの高



原を残して、その海岸は、西部と南部とに於てギリシアとイタリアとに占領されたし、又、アルメニアとクルヂスタンとは自治することになった。更に、一九一三年を以て一旦、獨立の公國とせられたアルバニアは、セルボ・クロアト・スロウエン國、イタリア、及、ギリシア三國の間に分割せられんとするに至つた。

「中歐」系統の五國は、何れも大にその陸海空軍の縮小を餘儀なくせられ、又、多大の賠償金を賦課された。就中、ドイツに對するものは、最も鉅大なるもので、彼は、その最初の一百億弗に對する利子として一九二一年以降の五年間は、毎年二億五千萬弗づゝを、それから後は、六億弗づゝを支拂はねばならなかつた。かくして適當の時期に於て次の一百億弗に移ることにして、約四十年間に五五〇億弗の償金を支拂ふと云ふことになつた。ドイツは、もとより、之が苛重にして、到底、戰敗國たる彼の擔ひ得べき所にあらざるを哀訴したに拘ららず、フランスの主張、最も強硬にして、協商列國は、遂に之をドイツに強制するに至つたのであつた。ドイツの此賠償の義務を遂行し終るまで、協商列國は、ラインの左岸を占領することとなつた。

## 六 世界戦争後の國際政局に於ける新均勢

かくの如くにして世界戦争後の世界は、殆んどその舊面目を一新した。若し新世界、

於ける大戦後の變化を以て形の上よりも、より多く内容の上にとするならば、ヨーロッパのそれは、獨り形而上のみならず、形而下にも互る至大至深の變化であると言はねばならぬ。世界戦争前のヨーロッパでは、獨立國の數、二十有五を數へて居つたが、戦争は、此等の中のモンテネグロを地圖面から抹し去つたるのみで、中ヨーロッパ、及、東ヨーロッパに新なる小國の數々を簇出せしめ、之をして通計三十有五に達するに至らしめた。東ヨーロッパでは、ポーランド、及、フィンランドの二共和國の獨立を見たるのみならず、リトワニア、ラトヴィア、及、エストニアの三國は、バルト沿海地方に、ゲオルギア、アルメニア、及、アゼルベージェンの三國はカザカス地方に興つて來た。北海のあなたでは、イスラントがデンマルクから獨立した。世界戦争前のヨーロッパでは、共和政治を標榜するものとしては、スウイス、フランス、及、ポルトガルの三國を見るのみで、中ヨーロッパと東ヨーロッパとは、獨裁政治の歴史的本場を以て目せられ來つたものだが、戦争の間、及、後に至り、形勢、遽然として一變し、三大帝國の君臨したりし地方は、倏忽として、悉く共和政涵養の沃地に化してしまつた。従て、現在のヨーロッパでは、君主政治に固執する國家は、僅に十三指を屈するに過ぎない。而して、これ等新舊列國の互にその隣國と隣に隣ぎつゝあるは言ふまでもない。

戦争の間に急激に發展し來つた滔々たる民主的、民族的革命の大波瀾のために、國內、國際の生活は大變調を來し、國際政局に於ける在來の均勢は、全く一掃されてしまつた。新なる秩序なり、



編制なりを立することは必須になつて來た。思ふに、彼の國際聯盟なるものは、極めて傳說的なる權力均衡の思想と、その方策とに取つて代るべく畫案されたるものではあるけれども、まだ一部理想家の期待を充すべきだけの十分なる試煉と修養とを積んでは居らぬ。從て之が實效の露白を三、五年の間に期せんとするが如きは、あまりに性急の要求であると言はねばならぬ。混沌たる世界の政局に、曲りなりにも、一種の安定と和平とを與へてくれるものは、依然として列強間に於ける實力の均衡である。戦後の世界の主要なる問題は、要するに、ヨーロッパの經濟的復活の問題を外にしては、此均勢の問題である。

戦後の世界に於て、此意味に於ける新均勢の樹立を要求して止まぬ方面は、少くとも二つある。一は、俄然たるドイツの消滅と、帝政ロシアの崩壊とにより、及、ヨーロッパ列強との比較上、合衆國、及、日本の國力の著しき膨脹により、世人をして一時、次の戦場の所在地たらざるなきやを懸念せしめたる太平洋の方面である。こゝでは、現在の所、日本とイギリスと合衆國とは、主たる俳優として其舞臺に活躍すべき運命を持つて居るが、中にも、此大洋を挟みて西と東とに相對峙せる日本と合衆國とは、世界戦争の間に、大に海軍の擴張に銳意し、その共に造り上げたる最新式の主力艦を以てしては、合衆國は、正にイギリスを凌ぎて世界の第一位を極めんとしたし、日本、亦、之に追及して第三位に躍進せんとするに至つた。日本移民の問題に關し、支那問題に關し、將た、

ロシアのアジア領に關し、往々にして利害の調和し難きを思はしめたる此兩國にして、若しその軍備擴張の競争を制すべき所以の方法を講ずるに至らざらんか、一九一四年夏季の禍難の遠からずして、太平洋岸に殺到し來るべきは鏡を觀るよりも瞭であつた。日英同盟は、一九二一年を以て満期となるのではあるけれども、これが再新を見んか、イギリスと合衆國との間に總括的なる仲裁々判條約の存せざらん限り(合衆國は、又、國際聯盟に加入することを拒んだ)、日本と合衆國との戦争に際して、イギリスは與國に對する同盟條約の義務を負はねばならぬことになり、第二の世界戦争の不幸を見るやも測られぬのである。一九二一年十一月、合衆國の發議でワシントンに召集された會議は、五大國、別けても、太平洋岸の三大國間に海軍の制限を協定し、傍ら、主として支那に關する諸問題を議し、以て、太平洋に蟠れる暗雲を一掃しようとするのが目的であつた。かくて三箇月にわたる商議により、所期の目的は大體に於て貫徹せられて、日英同盟は廢棄せられ、太平洋上の均勢は、關係列強の協調によりて保持せられることになつた。

舊均勢に代るべき新均勢の樹立を要する今一つの方面は、ヨーロッパである。此大陸では、三大帝國の崩壊により、重心は俄然、西してパリに移つた。戦争の慘禍を被ること最も多きフランスは、ベルギーを己が道連れとしてドイツに衝り、又、中ヨーロッパの諸小國、及、ポーランドに彼が勢力を及ぼして覇を大陸に制せんといきまきつゝある。イタリアには、北隣の共和國を制するだけの餘



裕がないので、今や傳統的なる均勢の政策を以てフランスの覇制主義を扼せんとしつゝあるものは、イギリスで、各地國境の劃定でも、ドイツの賠償問題でも、將た、ヨーロッパの經濟的復興の問題でも、フランスとイギリスとは、常にその暗闘を繰り返しつゝあるの有様である。

# 西洋最近世史終

大正十一年九月十二日 印刷  
大正十一年九月十二日 發行  
大正十四年七月十八日 改訂再版

西洋最近世史

正價金六圓

著者

煙山專太郎

東京府下巢鴨町染井八三六番地

發行者

種村宗八

東京市牛込區辨天町百五十七番地

印刷者

渡邊八太郎

東京市牛込區榎町七番地



發行所

東京市牛込區早稲田  
振替東京二二三番

早稲田大學出版部

日清印刷株式會社印刷



早稻田大學出版部發行 東京牛込 振替 東京一〇二三番 圖書總目錄及新著月報進呈

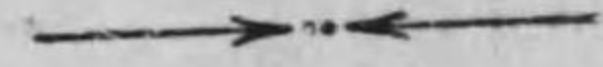
哲學概論	文學博士 桑木 嚴翼 著	五六版函入 五百四十頁	郵一圓八十錢
心理學	文學博士 金子 馬治 著	四版上製 四百頁	郵二圓五十錢
倫理學	早大教授 杉森孝次郎 著	四六版函入 四百五十頁	郵二圓五十錢
歐洲社會制度發達史	早大教授 高橋 清吾 著	四版總布 四百五十頁	郵三圓三十錢
社會問題概論	早大教授 安部 磯雄 著	八四六頁版	郵四圓十八錢
國際勞働運動史	早大教授 林 癸未夫 著	四六版布製 四百頁	郵二圓十五錢
國家の明日 新政治原則	早大教授 杉森孝次郎 著	四六版布製 五百五十頁	郵三圓十二錢
歐洲政治思想史	早大教授 高橋 清吾 著	六版總布 六百八十頁	郵四圓十八錢
近世哲學史(上下)	北ヘフ デイン グ 著	各七百頁	郵各三圓五十錢
法律及經濟の文化史的觀察	早大教授 中村 萬吉 譯著	五版總布 五百二十頁	郵四圓十六錢

社會學原論	川邊 喜三郎 著	四六版函入 五百頁	郵三圓十二錢
沙翁傑作集(全廿卷)	文學博士 坪内 逍遙 譯	四六版入版	各册二圓五十錢
國歌の胎生及び發達	早大教授 五十嵐 力 著	五版布製 五百七十頁	郵三圓十八錢
日本演劇史	伊原 敏郎(青々園) 著	六版美本 六百頁	郵五圓十八錢
支那哲學史概論	渡邊 秀方 著	七版上製 七百頁	郵五圓十八錢
西洋最近世史	早大教授 煙山 專太郎 著	一版上製 一千頁	郵六圓十八錢
家庭用兒童劇(第一集)	文學博士 坪内 逍遙 著	二四六頁版	郵二圓二十錢
宗教の本質 <small>と各宗の特質</small>	中ラ島イ 祐アヲ 著	四同百頁	郵二圓三十錢
建築構造學	工學博士 内藤 多仲 著	四四六倍頁版	郵四圓二十錢
自然地質學	理學博士 横山 又次郎 著	三版七〇頁	郵五圓十八錢
無線電話	安藤 博 著	二版上製 二百頁	郵二圓八十錢
經濟學史	米山 勝美 譯著	四版百頁	郵三圓拾六錢



外-1706  
✓

所 捌 賣



東 京 神 田  
東 京 橋  
東 京 橋  
大 阪 西 區  
名 古 屋 市

東 京 堂  
北 隆 館  
東 海 堂  
盛 文 館  
星 野 書 店

其 他 各 地 書 舖



~~398~~

~~99~~

Z30.5

KE38



終